

上対馬町文化財調査報告書第1集

# コフノ採遺跡

1984

長崎県上対馬町教育委員会

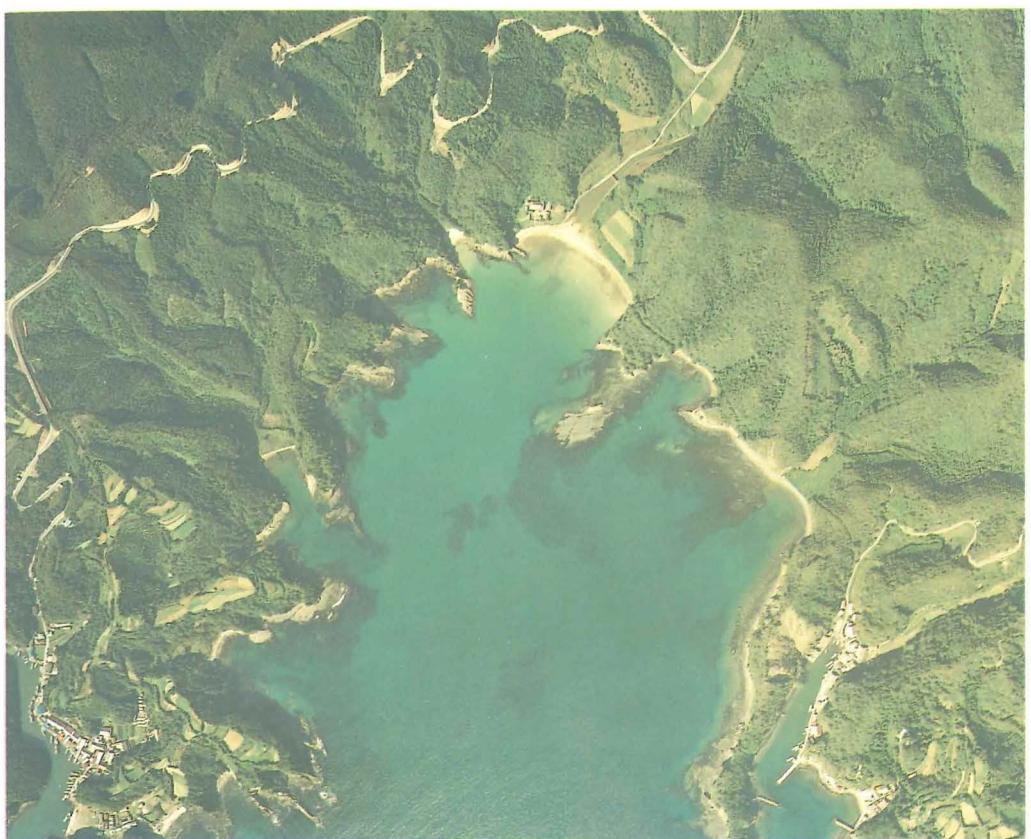
上対馬町文化財調査報告書第1集

コフノ<sup>さえ</sup>隣遺跡

—長崎県上県郡上対馬町所在の遺跡—

1984

長崎県上対馬町教育委員会



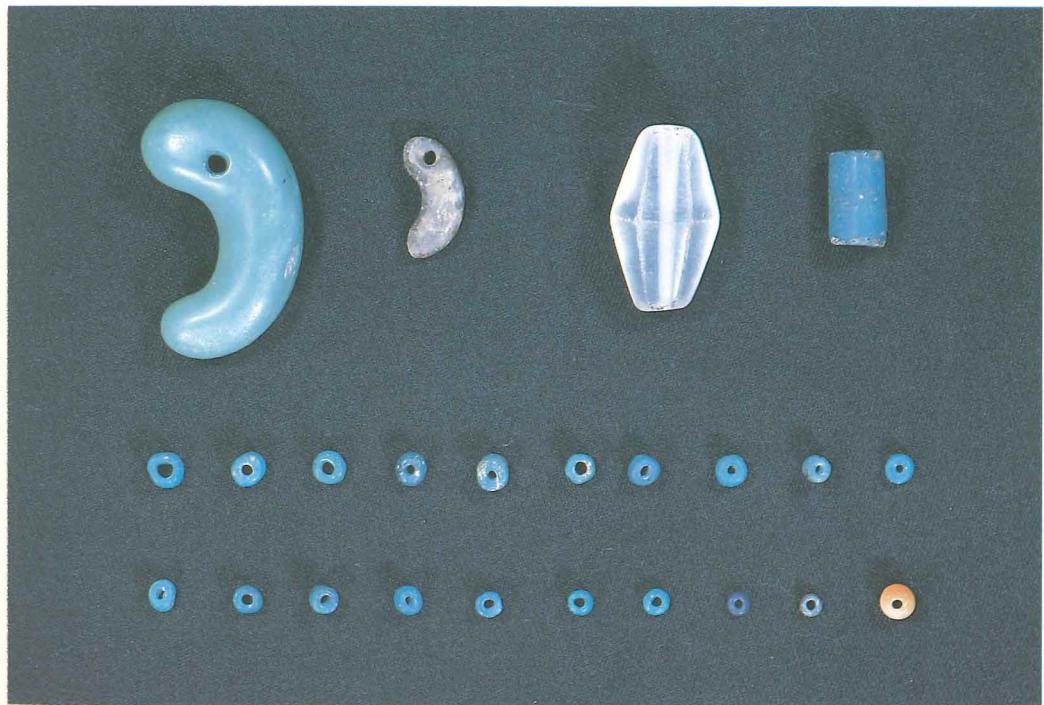
コフノ隣遺跡と周辺の地形



対馬北端から釜山地方を望む



出土遺物



出土遺物

## 発刊にあたって

このたび、コフノ<sup>きえ</sup>隣遺跡に関する調査報告書を刊行することになりました。

この遺跡は昭和56年の夏、上対馬町が計画した道路建設のため測量を実施していた時、役場職員により発見されたものです。

教育委員会では直ちに現地に赴いたところ、墓址と思われる積石状の遺構が数箇所確認されました。町では検討の結果、路線を北側に変更し、現状のままで遺跡の保存を図ることになりました。その頃、折しも町の開発計画の一環として自然公園等の計画策定が行われていた最中で、この地を史跡公園とする案が組み込まれたためあります。

遺跡の位置する津和浜は、昭和の初め頃、畠を開墾している時、銅矛が出土した所としても知られており、近くの津和原からも土器や石器が採集されていることから、古くから開けていたと思われます。今回の調査によって、多くの朝鮮半島の土器などが出土したことは、地の利をいかした私達の祖先が、早くから交易活動に従事して活躍していたことを偲ばせます。

町内にはこの遺跡の他に国指定の塔の首遺跡や、朝日山古墳などを含め多くの文化財がありますが、私達の大切な文化遺産として大事に保存していきたいと考えております。この調査報告書が、文化財の保護と、学術研究に資することが出来れば幸いに存じます。

おわりになりましたが、直接調査を担当していただいた県文化課の方々や、多くの御協力をいただきました地元の皆さんに深い敬意と謝意を表して発刊のことばといたします。

昭和59年3月1日

上対馬町教育長 御手洗 惟己

## 調査関係者

上対馬町教育委員会 御手洗惟己 教育長  
庄司 剛 事務局長  
管野 俱吉 社会教育係長  
島居 邦明 主査（現町民課福祉係長）  
糸瀬 良久 主事

長崎県文化課 安楽 勉 文化財保護主事  
藤田 和裕 "

調査協力者 武末虎夫・小宮春夫・相川シズエ・荒井絹代・国分明子・吉田信一郎  
財部 貢

調査内業 山形文恵・小島千嘉枝・森 洋子・松岡清美

本報告を執筆するにあたり、関係遺物について教示を与えられ、また館所蔵の遺物を快く見学させられた釜山大学校博物館長 閔 成基先生・嶺南大学校博物館長 鄭 永和先生・東亜大学校博物館長 沈 奉謹先生や、国立慶州博物館の崔 鍾圭先生ほか慶北大学校博物館を含めて、それぞれの博物館の先生・職員の皆様には大層お世話になった。

また、北九州市立考古博物館長小田富士雄先生には、遺物についてお教えを受けるところが多かった。

以上、特に記して謝意を表わしたい。

最後になったが、現地の調査にあたっては、器材・遺物の保管などを快く引き受けられた、津和浜在住の糸瀬 博氏（上対馬町文化財保護審議会委員）、調査員の宿舎となった福田屋旅館の方々にも大層お世話になった。無事、調査を終えることができ、ここにその報告を提出できるようになったが、これは多くの方々の御協力によるものと感謝している。本当にありがとうございました。

## 例　　言

- 1 本書は、昭和58年度の国庫補助を受けて実施した、  
長崎県上県郡上対馬町所在のコフノ<sup>さえ</sup>遺跡範囲確認調  
査の報告書である。
- 2 調査は、上対馬町教育委員会を主体とし、長崎県文  
化課が協力して実施した。
- 3 調査で、遺構の判明する以前のものは全て、第何号  
遺構という名称で示し、性格のわかったものについて  
は第何号石棺などという呼び方をした。
- 4 本書の執筆は分担して行い、各項の執筆者は文末に  
記した。
- 5 本書関係の写真撮影は藤田が担当したが、巻頭の釜  
山地方を望む写真は上対馬町産業課の提供による。
- 6 遺物の写真図版で、土器・鉄器は約 $\frac{1}{2}$ 、銅矛は約 $\frac{1}{4}$ 、  
玉類・紡錘車などはほぼ実大である。
- 7 本遺跡に関する図面および写真類は、長崎県文化課  
が保管の任にあたっている。
- 8 本書の編集は藤田による。

## 本文目次

### I はじめに

(1) 調査に至る経緯	1
(2) 対馬の歴史・地理的環境	2
(3) 周辺の遺跡	7

### II 調査

(1) 調査の概要	10
(2) 遺構	12
1 A 地点 第1号遺構	12
2 A 地点 第7号・第8号・第9号遺構	12
3 A 地点 第10号・第11号遺構	14
4 B 地点 第2号遺構	17
(3) 遺物	18
1 日本の土器	19
2 朝鮮半島の土器	31
3 鉄器	43
4 玉類	44
—付— 津和浜出土の広形銅矛	48

### III まとめ

(1) 遺構について	49
(2) 遺物について	49

—付— 対馬における発掘調査年表	51
対馬における考古学関係文献目録	52

## 挿 図 目 次

第1図 コフノ隈遺跡位置図	2
第2図 対馬における主要遺跡分布図	4
第3図 コフノ隈遺跡周辺の遺跡	8
第4図 コフノ隈遺跡周辺地形図	10
第5図 コフノ隈遺跡遺構分布図	11
第6図 A 地点 第1号遺構実測図	13
第7図 A 地点 第10号・第11号遺構実測図	15
第8図 B 地点 第2号遺構実測図	17
第9図 コフノ隈遺跡出土土器実測図(1)	18
第10図 コフノ隈遺跡出土土器実測図(2)	20
第11図 コフノ隈遺跡出土土器実測図(3)	23
第12図 コフノ隈遺跡出土土器実測図(4)	24
第13図 コフノ隈遺跡出土土器実測図(5)	26
第14図 コフノ隈遺跡出土土器実測図(6)	28
第15図 コフノ隈遺跡出土土器実測図(7)	30
第16図 コフノ隈遺跡出土土器実測図(8)	31
第17図 コフノ隈遺跡出土土器実測図(9)	32
第18図 コフノ隈遺跡出土土器実測図(10)	34
第19図 コフノ隈遺跡出土土器実測図(11)	36
第20図 コフノ隈遺跡出土鉄器実測図	43
第21図 コフノ隈遺跡出土玉類実測図	45
第22図 コフノ隈遺跡出土玉類・銀環・紡錘車実測図	46
第23図 津和浜出土銅矛実測図	48

## 表 目 次

第1表 対馬における主要遺跡地名表	5
第2表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(1)	19
第3表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(2)	21
第4表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(3)	23
第5表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(4)	25
第6表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(5)	27
第7表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(6)	29
第8表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(7)	33
第9表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(8)	33
第10表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(9)	35
第11表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(10)	37
第12表 コフノ隣遺跡出土小玉計測表	47
第13表 対馬における発掘調査年表	51

## 図 版 目 次

図版 1 コフノ隣遺跡航空写真	57
図版 2 コフノ隣遺跡遠景	58
図版 3 コフノ隣遺跡近景・調査風景	59
図版 4 コフノ隣遺跡近景	60
図版 5 遺物出土状況	61
図版 6 コフノ隣遺跡遺構	62
図版 7 コフノ隣遺跡遺構	63
図版 8 コフノ隣遺跡遺構	64
図版 9 コフノ隣遺跡遺構	65
図版10 コフノ隣遺跡遺構	66
図版11 コフノ隣遺跡遺構	67

図版12	コフノ隣遺跡遺構	68
図版13	コフノ隣遺跡遺構	69
図版14	コフノ隣遺跡遺構	70
図版15	コフノ隣遺跡遺構	71
図版16	コフノ隣遺跡遺物(1)土器	72
図版17	コフノ隣遺跡遺物(2)土器	73
図版18	コフノ隣遺跡遺物(3)土器	74
図版19	コフノ隣遺跡遺物(4)土器	75
図版20	コフノ隣遺跡遺物(5)土器	76
図版21	コフノ隣遺跡遺物(6)土器	77
図版22	コフノ隣遺跡遺物(7)土器	78
図版23	コフノ隣遺跡遺物(8)土器	79
図版24	コフノ隣遺跡遺物(9)土器	80
図版25	コフノ隣遺跡遺物(10)土器	81
図版26	コフノ隣遺跡遺物(11)土器	82
図版27	コフノ隣遺跡遺物(12)土器・鉄器	83
図版28	コフノ隣遺跡遺物(13)土器	84
図版29	コフノ隣遺跡遺物(14)土器	85
図版30	コフノ隣遺跡遺物(15)土器	86
図版31	コフノ隣遺跡遺物(16)土器	87
図版32	コフノ隣遺跡遺物(17)土器	88
図版33	コフノ隣遺跡遺物(18)土器	89
図版34	コフノ隣遺跡遺物(19)土器	90
図版35	コフノ隣遺跡遺物(20)玉類・紡錘車	91
図版36	コフノ隣遺跡遺物(21)玉類・銀環	92
図版37	津和浜出土銅矛と津和浜	93

# I はじめに

## (1) 調査に至る経緯

上対馬町の東海岸、唐舟志北側の津和浦には小河川の津和川が注ぎ、流域には若干の平担地が開け、津和原と呼ばれる可耕地がある。かつては、ここに小学校の分校があった所でもあり、その名残りが残る。さらに南の、川が注ぎ込む海岸は砂浜を呈し、小さな湾を形成している。以前この湾に面した畠地からは、昭和の初め頃の開墾の際、銅矛が出土したことでも知られ、注目されていた地域でもあった。

本遺跡は、大字唐舟志字コフノ隣ウギョーノ<sup>894・895</sup>番地に位置する。南に山を1つ越した舟志湾には、450mの高さを誇るオメガ送信塔が至近の距離に望め、また古墳時代の編年上重要な位置を占めた、霧靈神社裏の朝日山古墳も同湾内に位置する。<sup>文献17</sup>

遺跡発見の端緒となったのは、富ヶ浦から唐舟志までの海岸線道路新設計画である。この地区には、これまで歩いて通れる程度の道しか無く、車の通れる道は津和浜で終点であり不便であった。そのため解消策として、昭和55年富ヶ浦・津和間の道路新設が計画され、町建設課では予定地の測量調査に着手した。ところが岬状になった地点では、ゆるやかな稜線上のあちこちに石棺状のものや、積石状になったものが見られ、須恵器らしいものも発見された。これまで対馬における遺跡の特性は、海に突出した岬の先端部に、埋葬遺構や埋納遺構が弥生時代から多く営まれていることが、一般的に知られていたこともあり、類似性の遺跡として町教育委員会に通報され、適切な処置が取られたのである。

その後町教育委員会は、県へ遺跡確認の要請を行うとともに、道路の計画変更を求めた。県では時を同じくして豊玉町において発掘調査を予定していたこともあり、昭和56年1月12日専門職員を現地に派遣した。その結果古墳時代に属すると考えられる遺構が、土取りなどでかなりの破壊を受けてはいるものの、石棺状や、積石状になるものと合わせて、東西に突出した地形に2群約10基は存在するだろうとの確信を得た。町当局はその後、遺跡保護の建前から、当初の道路計画を北側に変更し、合わせて史跡公園化の構想を打ち出した。

かかる構想を前提に、町では範囲確認調査を実施して、遺構の性格や時代観、基数を把握することを目的に、昭和58年度事業として国と県の補助金を受け、昭和58年5月9日～6月1日までの24日間の日程で調査を計画した。調査は県文化課の文化財保護主事2名が担当し、期間中には町文化財保護審議員や一重中学校生徒などの参加があった。以下調査については各項で述べるとおりである。

(安楽)

## (2) 対馬の歴史・地理的環境

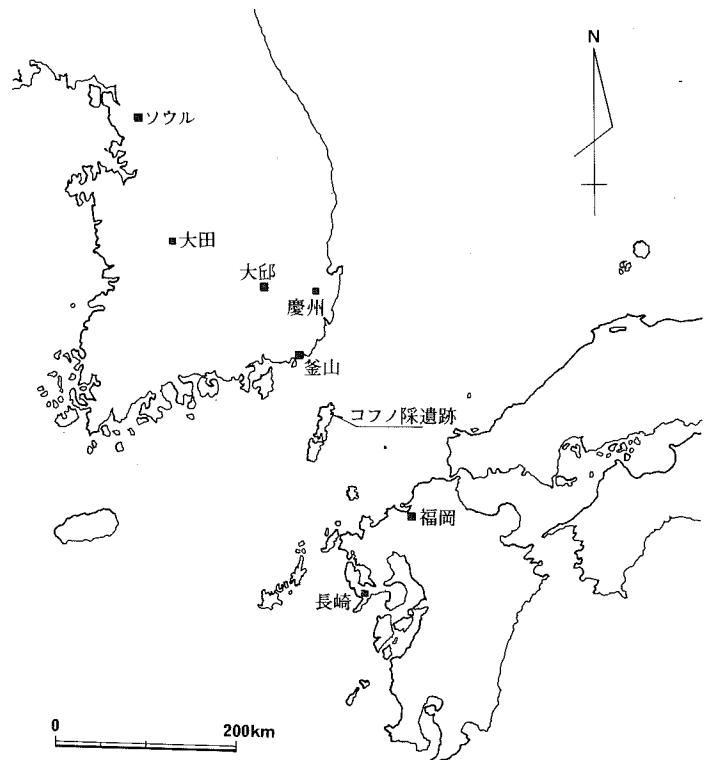
対馬は日本海の西に浮ぶ南北約82km、東西約18km、総面積710 km<sup>2</sup>の細長い、佐渡島、奄美大島に次ぐ日本で3番目に大きい島である。北は朝鮮海峡を隔てて上対馬より釜山までわずかに53km、南は対馬海峡を挟んで壱岐島まで50kmを計り、九州本土より3分の1の近距離にあり、まさに一衣帶水の地である。対馬・壱岐は日本と大陸を結ぶ飛石の役割を果たし、政治的にも文化の交流の面でも、歴史の流れの中で、重要な役割を担ってきた。

対馬の地勢を見てみると、海岸は沈降と隆起によって出来たリアス式海岸であり、その総延長は828kmにも及ぶ。全島の87%が山林で覆われ、耕地率は5%に満たない。山岳は峻険な山々が連なり、厳原町南部に位置する648.5mの矢立山を最高峰として、200m～300mの山々が海岸までせまり男性的な景観を呈している。しかし溺谷現象によって形成された浅茅湾は、大小無数の入り江と島々から成る景勝地としても知られ、上島・下島の2島に分断している。河川は地形的な関係で河足が短く、ほとんどが急流小河川である。一番長い上県町餌所川においても全長約13kmにすぎない。地層の傾斜は東海岸に面する部分が急で、西海岸は比較的ゆるやかである。このため中央縦走山脈は東にかたよっており、沖積平野は佐須奈・佐護・仁田など西海岸に集中して開けている程度である。

地質的には、本島の大部が第三紀の堆積岩で、対州層群とよばれる貢岩と砂岩の互層から成り、これを貫いて火成岩が南部の高地を作っている。

海流は暖流である対馬海流に囲まれた島であるが、大陸からの冷たい季節風のため秋から初冬にかけては冷え込むことが多いが、積雪はあまり見られない。

対馬が歴史的に知られる最古の文献は、三世紀に書かれた『魏志』の倭人伝である。当時の模様を『始めて一海を渡る千余里、対馬国に至る。其の大官を卑狗



第1図 コフノ隣遺跡位置図

と曰い，副を卑奴母離と曰う。居る所絶島，方四百余里可り。土地は山険しく，深林多く，道路は禽鹿の徑の如し。千余戸有り。良田無く，海物を食して自活し，舟に乗りて南北に市糴す。』と描写され，今でもこの実感は当時と変わらないような気がする。したがって対馬の産業は今でも漁業が主流であり，古来から海に生きてきた人々の伝統が残されているのである。

### 朝鮮半島との結びつき

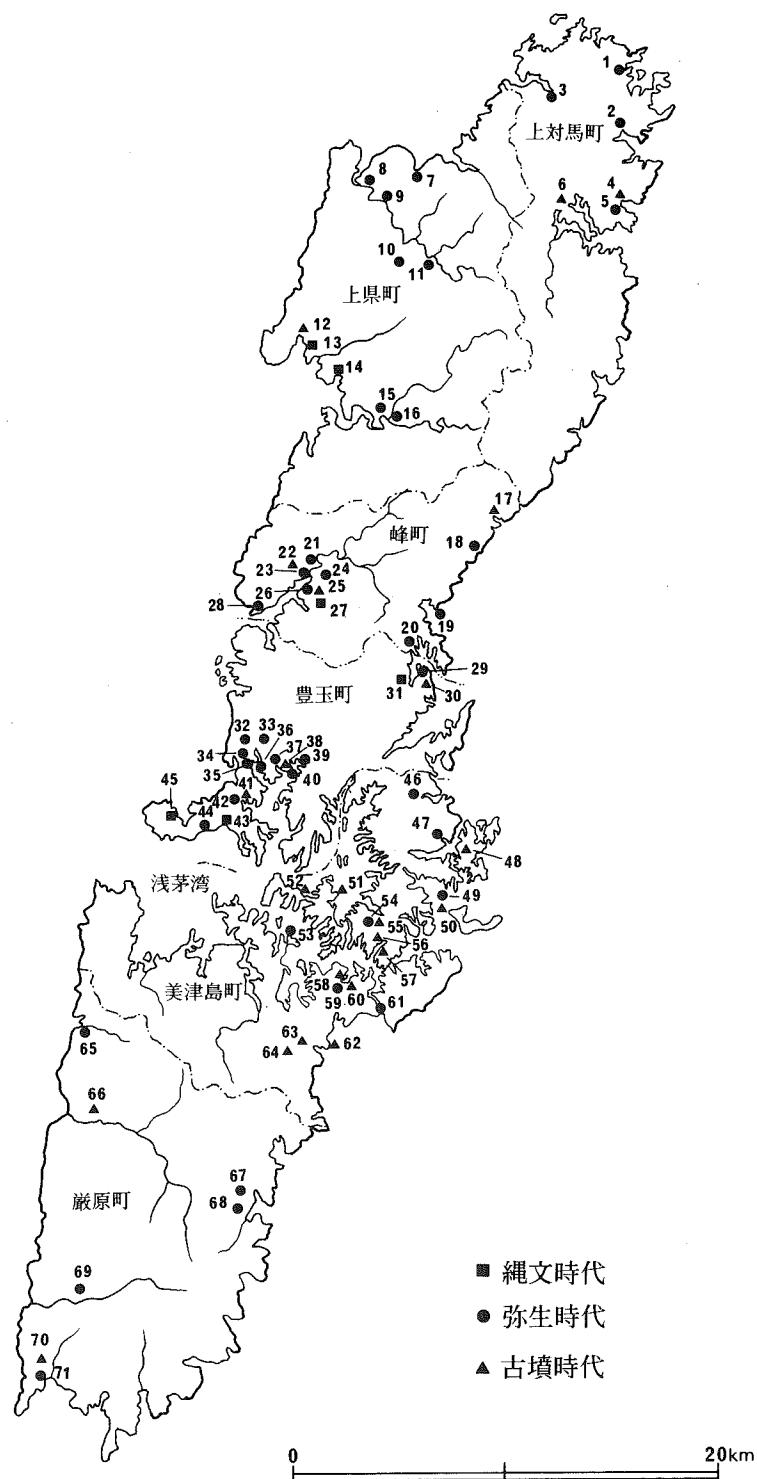
対馬には旧石器時代の遺跡は発見されていないが，縄文時代の遺跡は上県町越戸遺跡・志多留貝塚・豊玉町西加藤海底遺跡・吉田貝塚など縄文早期から晩期まで，九州本土の文化圏に組み込まれたものが出土している。また越戸遺跡では，半島で製作されたとも考えられる隆起文土器が出土，一方釜山市南方に位置する影島の東三洞貝塚に代表されるように，縄文式土器の出土があり，縄文前期頃からの交流が裏付けされている。

弥生時代になると，対馬の地理的重要性は増々大きくなってくる。前期の遺跡は少ないが，吉田遺跡や住吉平遺跡があり，ともに夜臼式土器や板付I式土器を出土している。北部九州では前期末頃の段階から朝鮮青銅器の需要が起りはじめると，これら製品の輸入に対して対馬の各集団は，積極的にこれに関与するようになる。中期以降になると結びつきはさらに強まり，倭人伝コースと呼ばれる①金海 → 対馬中部 → 浅茅湾 → 対馬南部豆駿 → 壱岐西海→唐津のルート，さらに博多湾をめざす②半島 → 対馬北部鰐浦 → 東海岸南下 → 壱岐 → 博多湾沿いの二つのコースが主要であったと考えられるが，③半島 → 対馬北部 → 沖ノ島 → 瀬戸内方面への航路も想定される。

対馬における主要な遺跡は第2図に示し，調査の記録は第13表に示したとおりであるが，簡単に概略してみよう。

### 西海岸の遺跡

半島との交流の中で最も利用されたコースは①であろう。西海岸では島内一の大河佐護川流域の，佐護白岳・クビル箱式石棺・ハチマンダン・ゴンクマ・井口浜などで広形銅矛の出土が知られている。南に下った三根湾周辺では，豊富な青銅器や鉄器を出土したガヤノキ遺跡，舶載青銅器を多く出土したサカドウ・タカマツノダンの箱式石棺が知られる。また対馬国一の宮といわれた木坂の海神社には，6本の広形銅矛が所蔵されている。同じ湾に注ぐ吉田川沿いには，弥生から古墳時代にかけて営まれた恵比須山墳墓群がある。豊玉町と美津島町を区分する浅茅湾は，かつては上下の島が繋っていたが，明治29年運河として人工的に開かれたのである。そのためか，遺跡の集中している地区は北側の仁位浅茅湾と呼ばれる周辺に多い。湾最奥部の仁位では，細形青銅剣を出土した東の浜遺跡が位置し，対岸のハロウ遺跡では小形仿製鏡・広形銅矛などが出土，さらに至近の距離にある卯麦糖ノ浜では銅剣が出土している。この南側には和多津美神社があり，ここにも銅矛が所蔵されている。湾の中程から北東へ入り組んだ佐保浦にも著名な遺跡が多い。今なお出土状況の疑念が抱かれている多量の青銅器類を出土したソウダイ・シゲノダン遺跡をはじめ，黒木南鼻・佐保赤崎・キロズガ浜などの遺跡では石棺内から多くの青銅



第2図 対馬における主要遺跡分布図

番号	遺跡名	種別	所在地	時代	在地	種別	所在地	時代
1	塔	石棺	上県郡上対馬町泉	弥生	生	石棺	上県郡豊玉町卯妻糖ノ浜	
2	塔	石首	" "	弥生～古墳	生	石浦	" "	卯妻糖ノ浦
3	絆	隈	大字古里塔の首	大字河内字絆隈	生	東の石	" "	仁位東の浜
4	コ	フノ隊	石棺・石室	" "	唐舟志字コフノ隊	石棺・石室	" "	仁位ハロウ
5	津	和	銅矛出土地	" "	唐舟志字津和浜	石口ウ	" "	生中期～古墳
6	朝	日山	石棺	" "	大増潮日山	石棺	" "	貝口ス崎
7	井	口	散布地	" "	上県町佐護井口浜	石口赤崎	" "	貝口テナシ浦
8	神	御魂神社	ゴンクマ出土竈	" "	佐護大江	包藤	" "	加藤水崎浦
9	ク	ビル	石室	" "	佐護大江クビル	志石	" "	唐洲加志志
10	ハチ	マンダン	" "	佐護ハチマンダン	" "	包蔵	" "	彌生～古墳
11	佐	護白岳	石棺群	" "	佐護白岳	穴潤	" "	賀谷
12	大	將軍山古墳	石棺	" "	志多留	穴潤	" "	芦ヶ浦
13	志	多留日塚	貝塚	" "	繩文	落石	" "	芦ヶ浦海落
14	越	高	包蔵地	" "	志多留	松石	" "	冲島竹崎
15	中	来	栖	" "	越越高	兵衛石	" "	兵衛島
16	エイ	タノダン	墳墓	" "	仁田中来西ノダン	赤崎石	" "	鳥山赤崎
17	桂	ノ浦	" "	峰町志多賀港ノ浦	古	浦石	" "	鳥山弘法浦
18	志	多賀	" "	峰町志多賀港ノ浦	古	式崎石	" "	竹敷小式崎
19	小	姓島	箱式石棺	" "	佐賀小姓島	石棺	" "	玉鰐
20	エ	ガ崎	" "	櫛エーガ崎	古	人道石	" "	大山八道浦
21	サカ	ドウ	石棺	" "	三根サカドウ	次郎石	" "	玉鰐五次郎
22	恵	比須山	石棺	" "	吉田恵比須山	調浦石棺配石	" "	玉調
23	ガヤ	ノキ	石棺・土塙	" "	三根ガヤノキ	石	" "	竹敷小式崎
24	井	手	" "	三根下里井手	古	道石	" "	玉鰐
25	トウト	ゴ山	石棺	" "	吉田トウト山	郎石	" "	大船越西ノ神様鼻
26	タカマツ	ノダン	石棺	" "	三根タカマツノダン	石	" "	大船越西ノ神様鼻
27	吉	田貝塚	包蔵地	" "	吉田	前方後円墳	" "	難知根曾
28	木	坂	石棺	" "	三根木坂	円墳	" "	難知高浜ツルノヤマ
29	觀	音	石鼻	" "	豊玉町千尋藻舟カクシ	阿連セトバル	" "	難知高浜サイノヤマ
30	ワジマ	マ	石棺	" "	曾ワジマ	立山古墳	" "	久田ハゲノサイ
31	住吉	平貝塚	包蔵地	" "	曾住吉平	円墳	" "	宝満山
32	キロズ	ガ浜	石棺	" "	佐保キロズガ浜	久根田舍	" "	久根田舍
33	シゲ	ノダン	石蓋土塙	" "	佐保シゲノダン	古墳	" "	豆醍保禾山
34	唐	崎	石棺	" "	佐保唐崎	古墳	" "	豆醍保禾山
35	黒木	南景	石棺	" "	佐保黒木	包蔵地	" "	豆醍オデカタ
36	赤	崎	石棺	" "	佐保赤崎	" "	" "	豆醍生

第1表 対馬における主要遺跡地名表

器が出土した。浅茅湾東南部の美津島町沿岸でも、弘法浦・玉調ハナデンボ・西ノ神様鼻などの遺跡をあげることができる。西側沿岸から浅茅湾にかけて、農耕の適地が少ないにもかかわらず、埋葬遺構や埋納遺構が弥生中期から後期の時期に集中していることは、海上の交易活動を主とした、海洋民的集団の拠点といえよう。

浅茅湾から南に至る西海岸にはさしたる遺跡は見られない。厳原町がほとんど含まれるが、久根田舎銀山上神社に広形銅矛と中広銅矛が所蔵されている。また対馬に数少ない平地の生活址の遺跡としてオテカタ遺跡が豆駿<sup>文献54</sup>に所在する。豆駿は対馬の南端、九州本土を結ぶ最短の地であり、古来から開け、古墳時代終末に位置づけられている保床山古墳もここにある。旧式内社も三社あり、現在でも赤米の耕作や亀トの行事などが伝承され、ト占風習の実態を探る上で貴重な地域である。

①のルートについて概観したが、東海岸の上対馬町比田勝・舟志・峰町の志多賀、佐賀の地域にも多く遺跡が点在する。

弥生時代後期は国産青銅器が北部九州から輸入されると、これまで朝鮮製青銅器を多く求めてきた各集団の独自性は薄められ、北部九州の勢力下に置かれるようになり、これまでの銅矛中心の祭祀遺構は絶えていく。そして前方後円墳が出現し、拠点は浅茅湾から南の難知を中心とする周辺に移動する。代表的な古墳として根曾古墳群や鶴ノ山古墳などがあげられる。しかし対馬における箱式石棺墓は弥生時代から古墳時代を通して主流をなし、8世紀頃まで継続され、副葬品も半島系の遺物が多く見られる。そして半島とのつながりは近世以降までも、間断なく続けられている。

(安楽)

### (3) 周辺の遺跡

対馬の最北端に位置する上対馬町は、西を上県町、南を峰町と境を接し南北に細長く、北部から東部にかけ沈降海岸で形成されている。面積は 108 km<sup>2</sup>に及ぶが、全体の97%は山林で覆われており可耕地は、舟志川、玖須川、琴川などの流域にわずかに見られる程度である。

また厳原に次ぐ商・漁業の中心地である比田勝は、小倉からの定期航路の発着港でもあり対馬北部の玄関口となっている。

北端に位置する鰐浦は、栗島が北に位置した深い入江があり、古来から船泊として知られ、「日本書紀」卷九の神功皇后の条に「冬十月巳刻朔、皇后和珥津より発ちたまう。時に飛廉を起し、陽候浪を挙げ、……便ち新羅に至る。……」と記されている。内容はともかく、鰐浦が和珥津と同一地名と考えられることは事実であり、半島との交流を考える上で重要な「泊」の役割を担ったと思われる。<sup>文献29</sup>

このあたりの小高い山に登れば、どこからでも澄んだ日は韓国南部の山々が遠望でき、5月になると、大陸系の植物で国の天然記念物に指定されているヒトツバタゴが真白い花をつける。

町内には各地に遺跡が散在しているが、その概観をしてみよう。

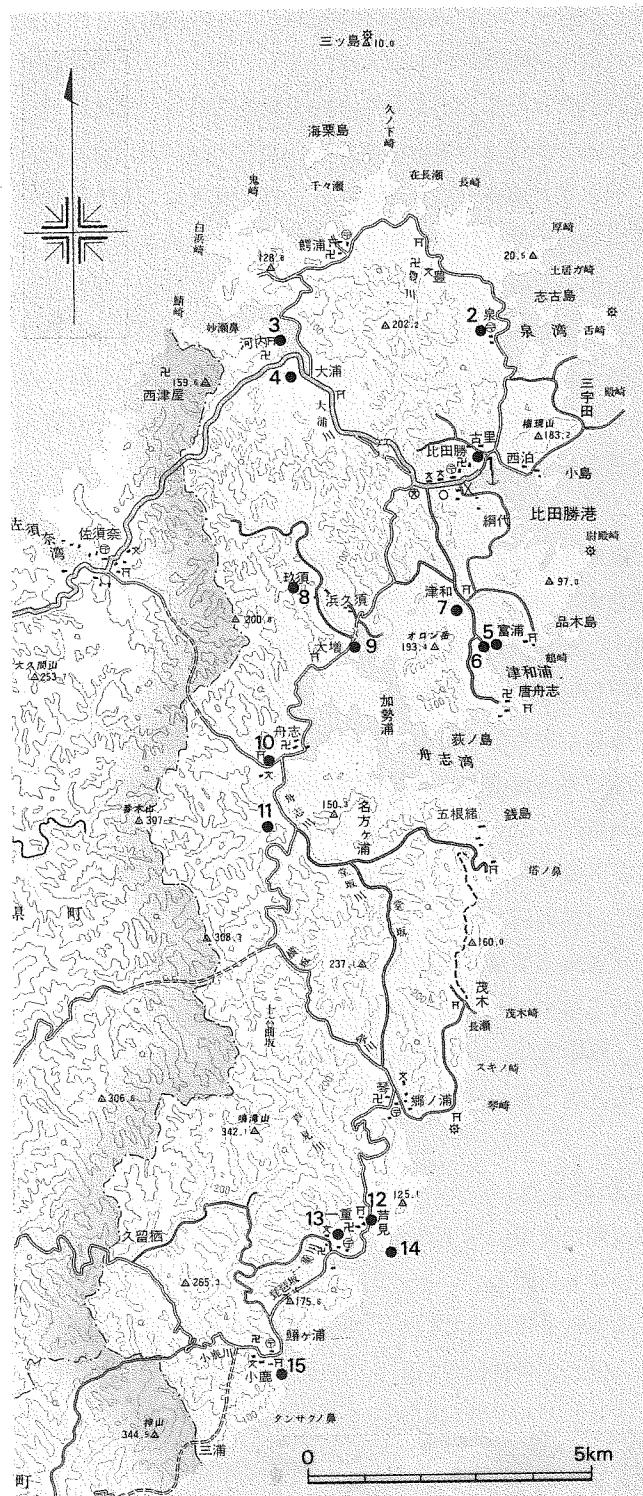
現在の時点では、対馬島内に旧石器時代の遺跡は発見されていないが、縄文時代の土器は泉の石棺より出土したという甕棺が相当する。しかし生活址は発見されておらず今後に期待したい。<sup>文献17</sup>

弥生時代の最も代表的な遺跡として1の塔の首遺跡をあげることが出来る。1971年3月、当時12才の少年によって発見されたこの遺跡は、西泊を望んだ2つに分岐した西側丘陵上に位置する。東側の丘陵上は、1948年東亜考古学会によってすでに調査された「古里箱式石棺墓」が所在する。1971年には新発見の遺構5基が発掘調査された。このなかで3号石棺からは、弥生後期の土器と共に陶質土器、それに広形の青銅矛2本、青銅鉶7個、ガラス玉多数が出土。他の石棺の出土遺物も合わせて、対馬における弥生時代後期の重要な位置を占めている。<sup>文献45</sup>

さらに北部の泉湾西北端の山際より、明治末年に有柄式磨製石剣が出土、石剣は長さ約50cmの粘板岩質のものでB I - b 形式である。ここからは石棺も出土しており弥生時代の、2泉石棺として知られている。<sup>文献17</sup>

河内地区では3の経隈墳墓は1975年発掘調査が行われた。北西に面した大河内湾に突出した標高16mの台地上に位置する。湾の北東は高麗山(190m)が、南西には万葉集に歌われた結石山(183m)が山脈を連ね、奥深い湾を形成している。この墳墓は丘陵の先端を切り取り、その上に盛土をして墳丘を築き、3基の石棺を構築していた。中からは、弥生後期の土器と共に鉄剣や金海式土器が出土、古墳の前段階の墓制ではないかという問題を提起した。この湾奥から国道を越えさらに南側の旧岬の突端にも、4の積石塚状のものが発見されているが、調査は行われていない。

東の舟志地区にもまとまりがみられる。5は本報告分で省略するが、隣接して6の津和浜銅



## 遺 跡 名

1. 塔の首遺跡
2. 泉遺跡
3. 経隈墳墓
4. 河内遺跡
5. コフノ採遺跡
6. 津和浜遺跡
7. 津和原遺跡
8. 浜久須遺跡
9. 朝日山古墳
10. 巖島神社
11. 久頭乃神社
12. 舟付場遺跡
13. 尾崎の段遺跡
14. 剣島遺跡
15. 那須加美金子神社

第3図 コフノ採遺跡周辺の遺跡

矛出土地がある。昭和初期の畠地開墾の際出土したもので、別々に2本出土し、その中の1本は上半分が故意に折られたようになっている。(第23図) 現物は唐舟志の庄司裕次郎氏によって大切に保管されている。津和浜から川を遡ると7の津和原の水田が広がる。ここに須恵器や弥生式の土器片などがかなり散布しているといわれるが、最近は荒地が多く採集はあまり出来ない。5・6の遺跡を営んだ人々の生活の場として考えられる地区である。南へ下って浜久須周辺にも遺跡が見られる。8は現在埋めたてられてグランド予定地になっている所で、その横にも箱式石棺があると言われるが、未調査である。舟志湾が深く入り込んだ大増地区の半島には霞灘神社が海に向っている。その裏手の小高い所に9の朝日山古墳がある。拝殿が建てられた山頂一帯には、板状の石で組合せた石棺が群集している。昭和23年東亜考古学会において調査され、須恵器や半島系の土器・鉄製品・紡錘車など多くの出土品があった。ここでは中期古墳と後期古墳を区別する標式的な遺跡として知られるようになった。10は舟志の厳島神社に祀られている石劍である。出土地は不明であるが、近接した所からと考えられる。11も神社に祀られたものである。舟志から琴に行く途中の久頭乃神社には広形銅矛が1本あるが、出土地不明である。

さらに南の一重地区には12の散布地が全国遺跡地図42、船付場遺跡として記載され、13は一重尾崎の段を散布地として登録されているが、出土遺物などについてはわからない。14の剣島は陸から少しづれた小島である。ここから銅矛が出たと伝えられるが現存しない。しかし石棺が壊された状況があり、須恵器などが採集されていることから遺構は古墳時代に属すると考えられる。15の小鹿大浜にある那須加美金子神社にも古墳があるとされるが、確認はされていない。

以上のように町内の遺跡を簡単に概略したが、ほとんどの遺跡は海岸に集中した埋葬遺構である。特に塔の首遺跡や朝日山、コフノ隣遺跡を営んだ人々は、弥生時代後期後葉から古墳時代にかけて、朝鮮半島と密接な関係を持った水人集団といえよう。

今後も各岬の突端や河川の流域を中心として、まだ遺跡の発見される可能性は十分ある。また散布地についても、生活址を解明する重要な要素をはらんでおり、7の津和原については遺跡の範囲や性格・時代など十分な把握ができるよう確認調査が必要かと考えられる。(安楽)

文献17

## II 調査

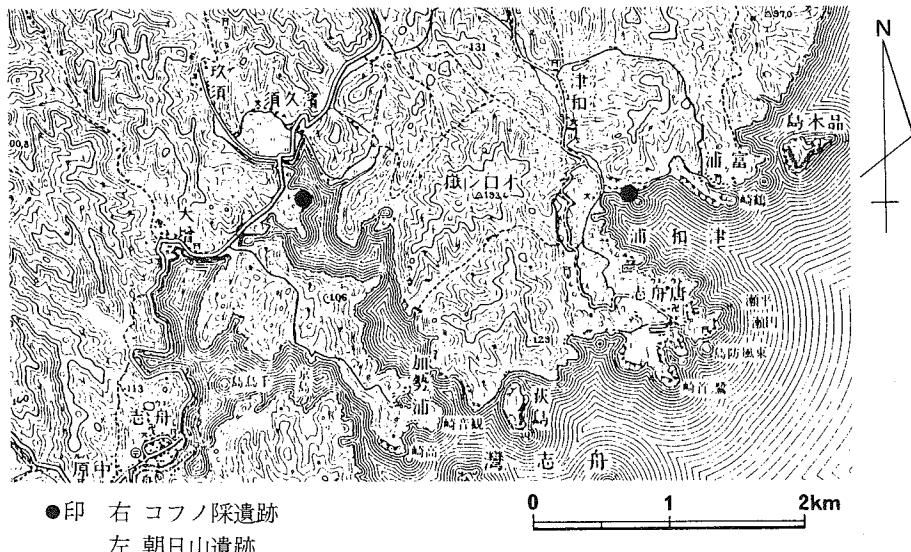
### (1) 調査の概要

遺跡が立地するのは津和浜の糸瀬博氏宅へ通じる分岐点の、白妙橋から東へ300m程離れた、南に突出した岬である。岬は中央の部分が凹み、2つの角が突出したようになっており、干潮時にはその先にあるチーゼと呼ばれる小島と繋る。規模はどちらの突出しも似たようなものであるが、東側の方は突端部まで土砂の堆積があるのに対し、西側の方は傾斜が急であり、中程から端部にかけては岩盤の露頭を見る。従って遺構の中心は、東側の稜線上が利用されている。調査に際しては、東側をA地点、西側をB地点と呼んだ。

ところがA地点の縁辺部では採土のため、ほとんど旧状が失われていた。対馬では古くから「ベイ」と呼ばれるように、赤土を庭先に運び水をかけて練り、平らに広げて、穀物を干したという。道路が発達していなかった当時は、小舟が着ける手頃な赤土の堆積している岬の突端が、格好の採土の対象地にされたのである。

調査は先ずA地点から始めた。一帯は雑木林で、マツ・クヌギ・ツツジなどが密生していたが、今後史跡公園化の構想があるため、自然の景観を壊さないよう最少限の伐採にとどめた。遺構は標高12mから17mの範囲に位置しており、高い方から確認を始めた。調査の方法は、すでに表面に散見しているものもあるため、腐葉土を剥ぎ旧地表を出すことにした。

その結果11基の遺構を確認した。遺構は3群に分かれるようで、第1号遺構が標高16m台に、第2～6号遺構が15m前後、第7～11号遺構が12m台のところに位置する。ほとんどの遺構は



第4図 コフノ隣遺跡周辺地形図

原状を留めておらず、二次的な攪乱を受けている。なかでも第7・8・9号遺構は採土のため壊滅的で、原状を知ることが出来ない。だがこの周辺からは多くの半島系の土器や玉類を得た。

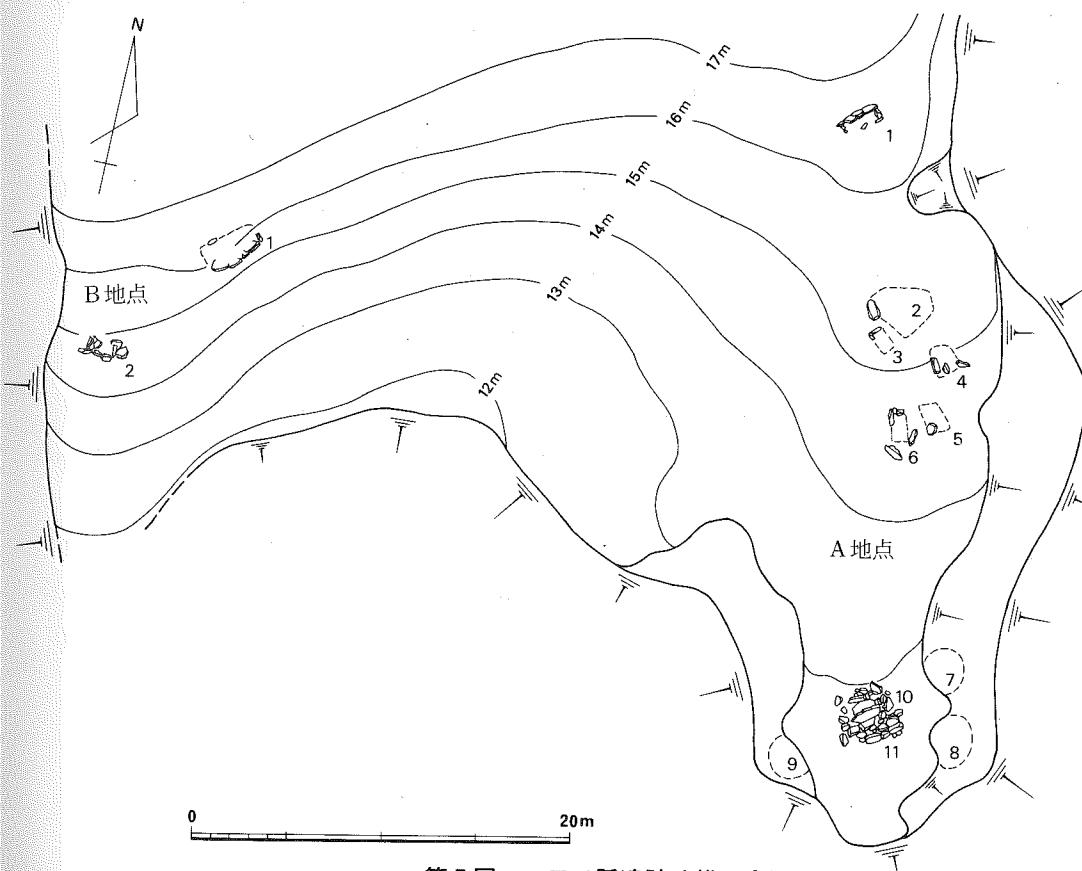
ここでは第1・10・11号遺構の記録措置と第7・8・9号遺構の残された部分について調査を行った。

B地点ではA地点の稜線から西へ約40m離れたところに2基の遺構が確認された。その間は湾部になり遺構の立地は見られない。第1号遺構は標高16mの傾斜の急な地形で、積石部分が一部露出していた。このため攪乱を受けているか判断するため確認を行った結果、竪穴石室状のもので、二次的攪乱を受けていないと判断され、今後に期待をつないだ。第2号遺構は稜線上に位置する箱式石棺であったが大半は失われ、玉類など若干の遺物が認められた。

今次の範囲確認調査においては、A・B両地点合わせて13基の遺構と、半島系土器多数を含む遺物の出土を見、新たな問題も提起した。

調査後の処置は土盛や杭打を行い、一部原状に復するなどの保護策を講じた。今後史跡公園など具体化されれば、本調査の必要が生じるが、その時は、半島をも含めた相互間の調査交流が行われることを期待したい。

(安楽)



第5図 コフノ隣遺跡遺構分布図

## (2) 遺構

### 1 A地点 第1号遺構

A地点の標高15m余り、遺構群の中では奥まった最上段に離れて位置し、第2号遺構と10mの間隔がある。調査前から長側板の一部が露出して、主軸の方向がはっきりした箱式石棺であるが、盗掘によって大半の棺材は抜き取られている。北側の側板と東南の小口板が残り、傾斜しているものの、原位置を保っている。南側の側板は全部石材は抜き取られ、蓋石も全くない。棺底も一部削られている。北側板は2枚の板石で組まれ、基底部は完全に残っている。床石は敷かれておらず、土質の関係で棺底を確実におさえることはできないが、棺材の基底部より上と考えられる。残された遺構から棺の法量を示すことができる。

棺は主軸をおおよそ北東—南西のN-50°-Wにとる。内法は長さ約160cm、幅およそ60cm前後、深さ約50cmを測る。長側板に使用された石材の厚さは5～7cm前後、砂岩質で2枚の板石が使用されている。

盗掘のため目立った遺物はないが、若干の須恵器破片と、ガラスおよび滑石製の小玉が18点、碧玉製管玉が1点、棺の内外から出土した。

(安楽)

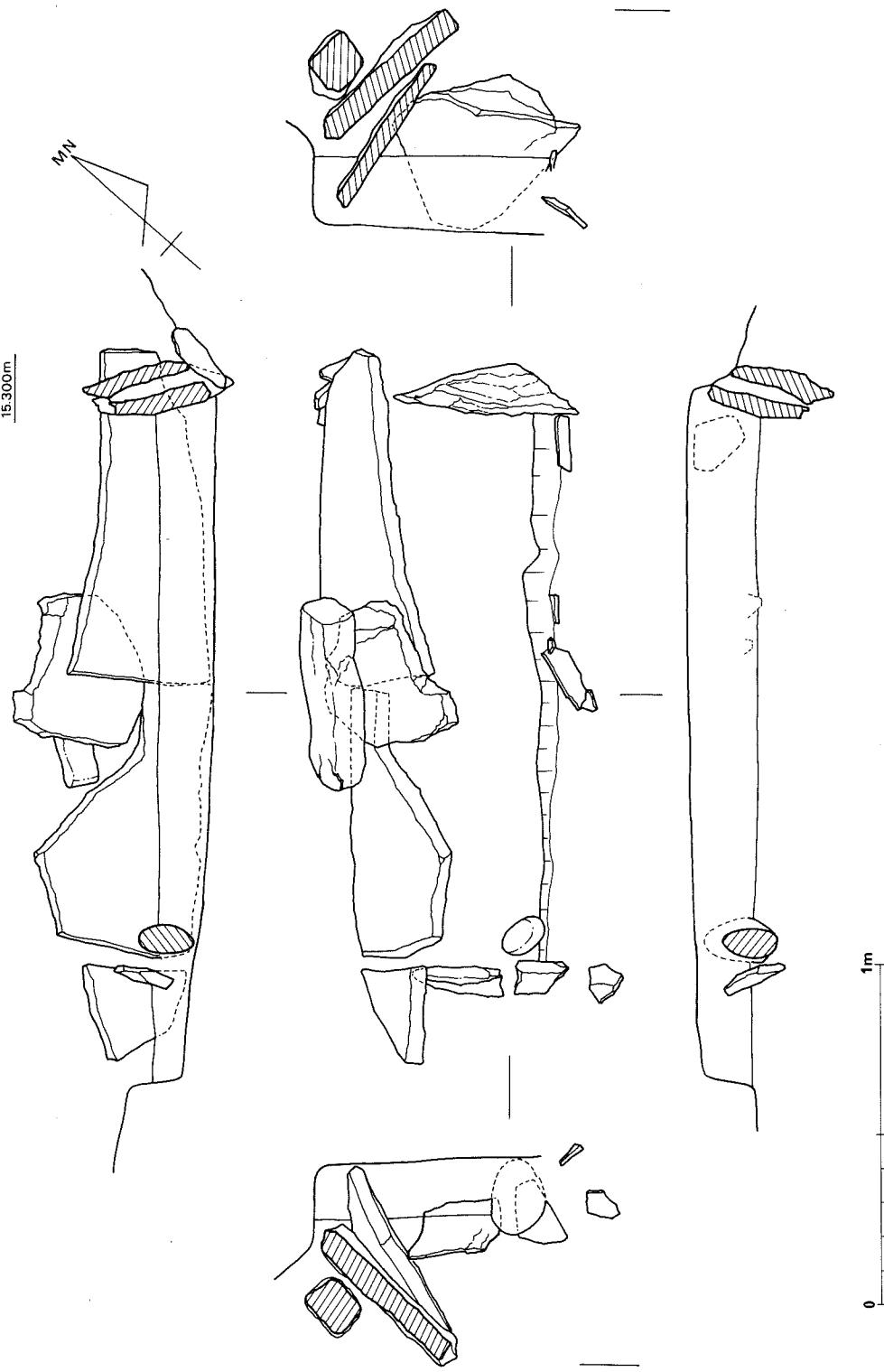
### 2 A地点 第7号・第8号・第9号遺構

第1号石棺の南約30mほどの、岬の先端部に位置している。東側のものを第7号・第8号、西側を第9号遺構と呼ぶことにした。これらは岬の尾根から各々約1mほどの深さに掘り取られていた場所で、第7号遺構にあたる土取りの崖面に第18図の器台口縁部が認められた。このため、近辺の腐植土を除いて清掃にかかったところ、人頭大の円礫が多数散乱している状況で、石棺の材料となっていたと思われる板石もあったので、破壊された遺構として取り扱うことにして、東側を第7号・第8号遺構、西側の土器の出土する場所を第9号遺構とした。

第7号遺構の円礫の間に第19図の伽倻式の把手付壺が、脚部を上にし、胴の欠けた方を下にして出土した。そして、この壺の中には第21・22図の玉類が土とともに残っていた。たぶん副葬されていたものと考えられる。

第8号・第9号遺構からも各種の土器片が出土している。第7号遺構とともに、石棺と考えられる埋葬施設を持つ遺構であったものが、いつの時代か、土を取るに際して破壊されたものであろう。

(藤田)



第6図 A地点 第1号遺構実測図

### 3 A地点 第10号・第11号遺構

第10号・第11号遺構は埋葬遺構で、当初は第10号の、厚めの板石の立っている状況から石棺墓を想定して清掃にかかったところ、その南側にも埋葬施設と思われる遺構を検出したため、これを第11号遺構と呼ぶことにした。

まず、第10号遺構は、厚さ13cm前後、長さ140cm、幅70cm以上の板石が斜になって地面に見えており、その北側80cmほどの所にも向きをほぼ同じくする厚さ15cm、長さ75cmの板石が認められたので、箱式石棺を考えて調査にかかった。板石を主に使用した石棺で、主軸はN-54°-Eにとり、北東から南西を向く。現在、この石棺は両小口部分を欠いていて、全長を知り得ない。内部には、若干傾斜した、長さ90cm、幅50cmほどの薄い板石がある。しかしこの板石の下から土器・鉄斧・ガラスの小玉などが出土するので、床面に敷いた石か判然としない。このような状況から、石棺の長さ140cm以上、深さ35cm以上で幅は80cm前後であったものと思われる。

次に第11号遺構であるが、これも第10号とともに北東・南西に向いていて、第10号の石棺の南側板を共用している点が特異である。第10号の側石の下端部の線に大きめの石の長辺を沿わせて直線的に配し、この線の南東1.15m～1.3mの線に、これも大きめの石の外側の長辺をそろえ、明らかに壁面の意識を持った石の置き方を示している。これら大きめの石の列の間にやや小ぶりの円礫をほぼその上面の高さをそろえて敷いており、ここが明らかに床面であろうと思われる。第10号遺構に比べ、円礫・角礫などの使用が目立つ。現存する側壁の状況から復原すれば、床面の幅95cmで、側壁の長さ2.6mほどが残るが、これを閉じる施設やその痕跡がなく、正確な点は不明である。また南東部分の大きな石の上にも、さらに何段かの石を積んでいた可能性があり、それらしき石材も周辺に存在している。

遺物は、第11号遺構外の南側部分の地表面に水晶玉が見つかっており、第10号と第11号遺構の接する部分から耳付無蓋高壺が出土している。ガラス小玉は両者から出土しており、銀環は第10号から出土している。鉄斧と思われるものも第10号から出土しており、各種の土器の出土も多い。これらの土器の出土地については、他の項目とともに一覧表にしているので参照されたい。なお、人骨などは残っていなかった。

第10号と第11号との関係について見てみると、この2基の埋葬施設は、一方の側壁を他が利用しているという状況であり、これらの構造からみて、埋葬と同時に地中に埋めてしまうことからすれば、この2基は同時、あるいは極めて近い時期に、作られたものと考えられる。そして、その製作時期は、第10号・第11号の間から、かなりしっかりした状況で無蓋高壺の出土があっていることからして、5世紀末から6世紀初頭を考えいいのではなかろうか。同じ時期のものと考えられる上対馬町大増朝日山遺跡出土の遺物の組合せが、本遺跡第10号・第11号とその周辺に出土するものと類似していることも、その時期であることを示している。

(藤田)



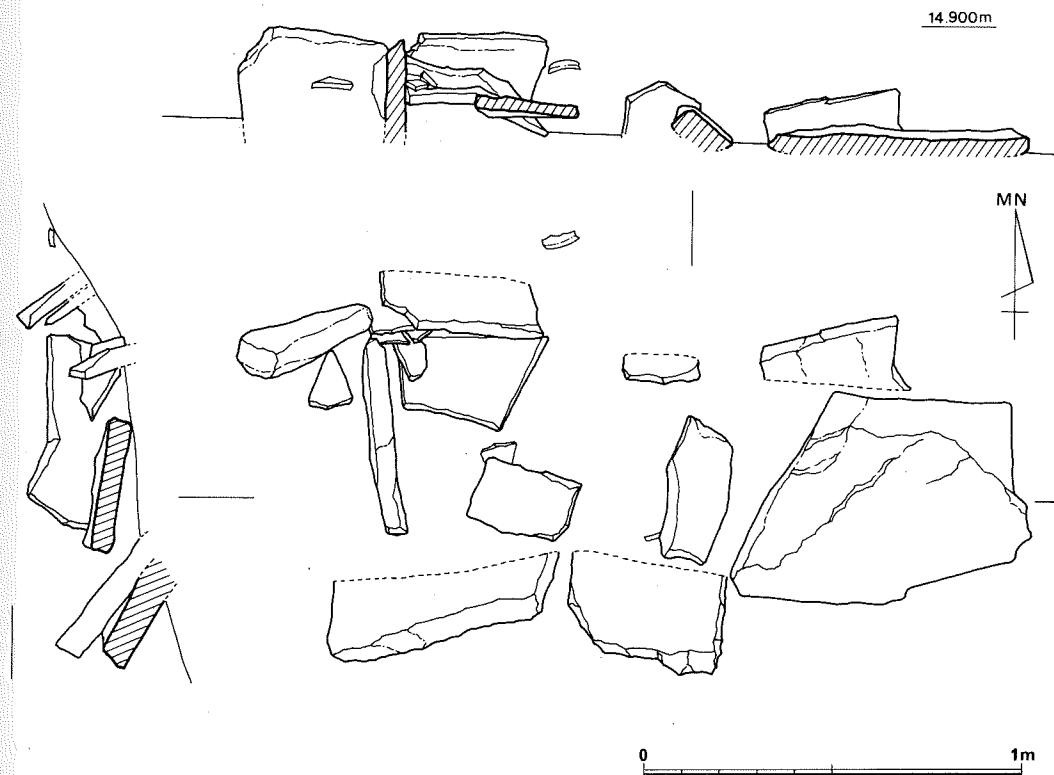
第7図 第10号・第11号 遺構実測図

#### 4 B地点 第2号遺構

1号遺構の南西約8m離れた、標高15m弱の所に位置する箱式石棺である。遺構は、傾斜が急で稜線が狭い岩盤直上に構築されている。ほとんど露出している状況だったので、盗掘に加え破損度も大きい。長側板は北側が2枚残るが大きく割れ、南側も2枚残るだけで抜き取られている。残った両側板は傾斜に沿って南に傾いている。側板の厚さは5~10cm前後、西側小口は厚さ5cmの側板がほぼ原位置を保って残っているが、東側の小口板は抜き取られている。棺底には敷石が見られ、大きな板状の石が残っている。

棺は主軸をほぼ東西方向にとる。内法は長さ160cm余り、幅約45cm前後を測り、深さは不明である。石材は砂岩質である。

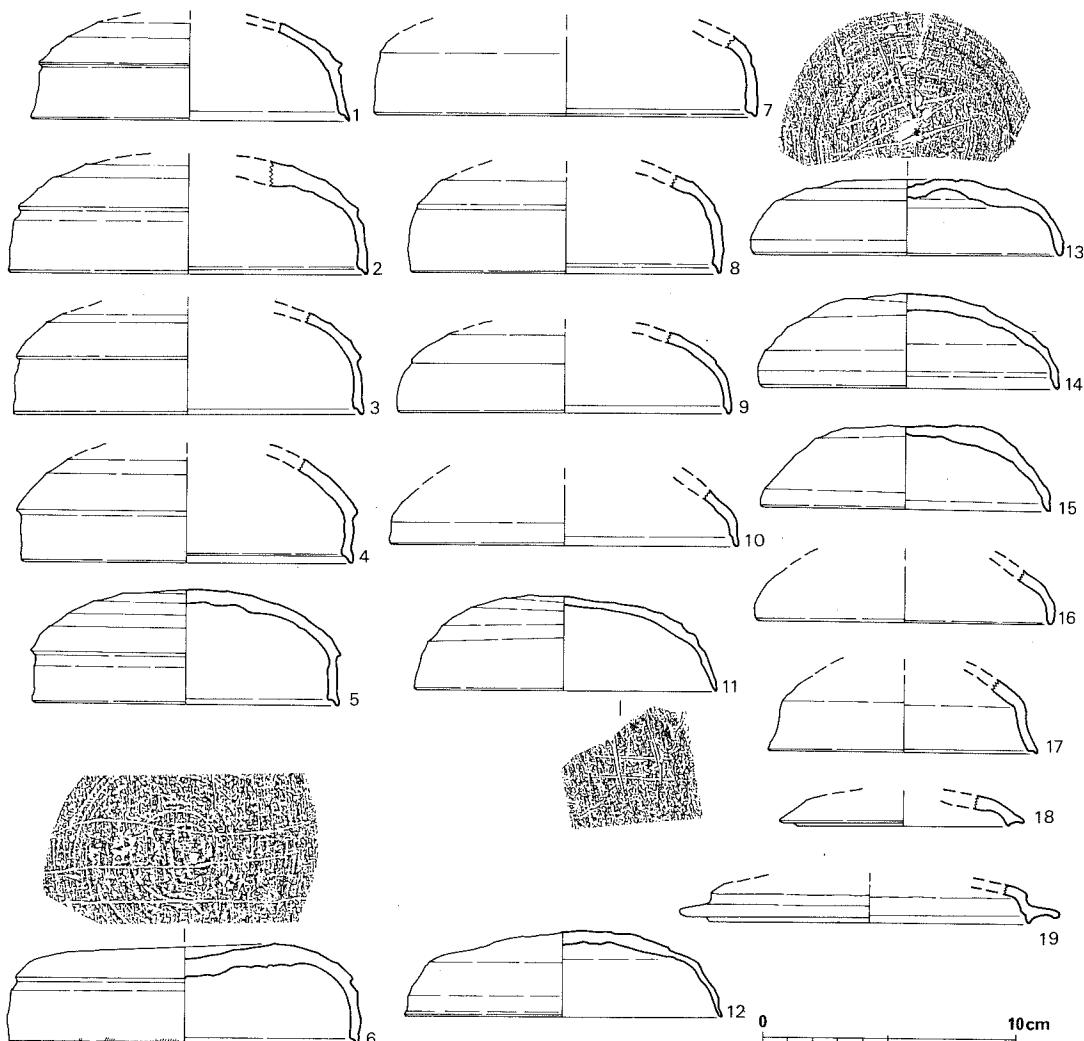
遺物は棺内からガラス製小玉18点、一部破損の雁木玉1点、碧玉製管玉1点が出土したが、須恵器は棺内外から小破片数点が認められた。  
(安楽)



第8図 B地点 第2号遺構実測図

### (3) 遺 物

遺物には、土器・鉄器・装飾品がある。このうち、土器についてみると、明らかに日本製でないもの、つまり朝鮮半島（地理的位置としての半島の名称として使うもので、以下も同じような意味に使用する）、それも南部地方の製品が混って出土しているのでこれらについては項目別に設けて記述する。すなわち、日本の土器（須恵器・土師器）と、朝鮮半島の土器とである。しかし、ここで半島の土器としたものなかには、時代、地域を異にするものがかなり認められる。このため、「朝鮮半島の土器」と大きく規定し、そのなかで、百濟・伽倻・新羅と、時代あるいは製作・使用された地域を、できうる限りではあるが限定できるものにつ



第9図 コフノ隣遺跡出土土器実測図(1)

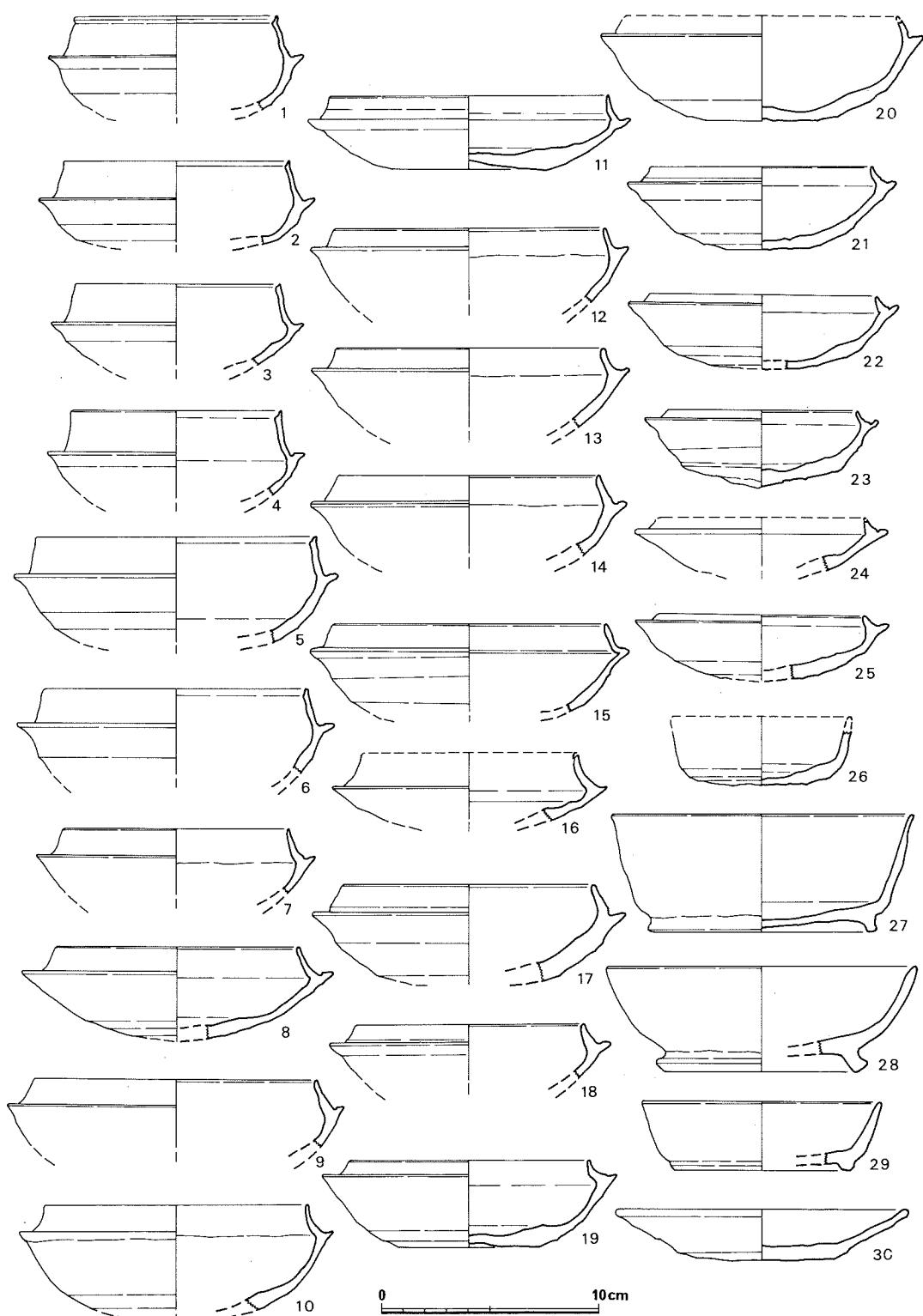
いて記することにする。実物を対比させることができず、筆者の独断、あるいは事実の誤解があるかもしれない点は、あらかじめ申し添えておき、諸賢の御教示を仰ぐものである。

## 1 日本の土器

須恵器（第9図～第14図）と土師器（第15図）とがある。それぞれの遺物の特徴、法量などについては別表として遺物観察表を付けているので、それを参照されたく、以下では器形別に大まかな概要を述べてみたい。

遺物番号	図版番号	特 徴			法量(cm)		出土地	備考	
		形 態・手 法・色 調	断面の色	胎 土	焼成	口径			
第9図 1	16	稜部と先端部は鋭い。先端内側に凹面。外面は淡黄灰色。内面は灰色。	灰 色	普通 小砂粒を含む	良好	12.5	4.3	1	外面僅かに自然釉。小破片
2	"	やや大形。凹面になった先端部は鋭い。外面は濃灰色。内面は灰色。	灰 色 あざき色	普通 小砂粒を含む	良好	14.2	4.8	7・10	
3	"	稜と先端部は尖らせている。内・外面とも灰色。	灰 色	良 小砂粒を含む	良好	13.8	4.3	7	小破片
4	"	稜と先端部は尖らせている。外面は黒灰色。内面は灰色。	灰 色	良 僅かに砂粒	良好	13.0	5.0	7・10	
5	"	ほぼ直立する口縁部に尖らせた稜部と先端部。内・外面ともにやや濃いめの灰色。	灰 色	良好	良好	12.2	4.6	7・9・10	半分程ある
6	"	焼け歪みのあるもので、口縁部はやや内彎する。内・外面とも灰色。	灰 色	良 小砂粒を含む	良好	13.9	4.0	8・10	半分程ある
7	"	大きくて、稜部が殆ど付かない形。内・外面とも灰色。	灰 色	普通 小砂粒を含む	普通	15.0	4.5	B-2	
8	"	稜部は殆ど付かない。口縁先端部は鋭い。内・外面とも灰色。	灰 色	良 僅かに小砂粒	普通	12.2	4.7	9	
9	"	稜部は殆ど付かない。天井部は丸くなる。内・外面ともあざき色がかった灰色。	あざき色	良	良好	13.0	4.0	1	
10	17	稜部はなく、口縁部も短い。先端部内側の凹面は僅かに残る。内・外面とも灰色。	灰 色	良好	普通	13.6	4.0	2・4	
11	"	口縁端部は外下方に伸び、内面の凹面はない。内面は灰色。外面は濃い灰色。	灰 色	普通 小砂粒多い	良	12.0	3.8	7・10	内面にヘラ記号
12	"	稜部、口縁内側の凹面ともない。先端部分は薄くて鋭い。外面は濃灰色。内面は灰色。	灰 色	良	良	12.6	3.4	7	
13	"	口縁先端部を丸くおさめている。外面は黒灰色・灰色。内面は灰色。	淡紫灰色	良好	良好 堅い	12.2	3.0	9・10	外面にヘラ記号
14	"	口縁先端部を僅かに折って丸くおさめる。内・外面とも濃灰色。	淡いあざき色 灰色	良好	良好	11.8	3.8	7・8	外面にヘラ記号
15	"	口縁先端部を僅かに折って丸くおさめる。内・外面とも濃灰色。	濃灰色	大小の砂粒 多く粗	良好	11.4	3.4	7・10・11	ほぼ完形
16	"	口縁端部を僅かに内側に折って丸くおさめる。内・外面ともやや濃いめの灰色。	灰 色	良好 堅い	良好 堅い	11.5	3.5	9	小破片
17	"	口縁端部は外下方に伸び、内側に凹面を持つ。内・外面ともやや濃いめの灰色。	濃灰色	良好	良好	10.6	4.0	7・10	
18	"	身うけのかえりの付く小形のもの。内・外面とも灰色。	灰 色	良	普通	8.4	1.7	10	
19	"	身うけのかえりが付く。先端は丸くおさめている。内・外面とも灰色。	灰 色	良	普通	12.6	2.2	B-2	小破片

第2表 コフノ採遺跡出土土器観察表(1)



第10図 コフノ隣遺跡出土土器実測図(2)

遺物番号	図版番号	特徴				法量(cm)			出土地	備考
		形態・手法・色調	断面の色	胎土	焼成	口径	受部径	器高		
第10図 1	18	薄くて鋭いたちあがりを持つ。蓋をかぶせて焼いたあとがある。内・外面とも濃灰色。	あずき色	良	良好堅い	9.3	11.9 (5.1)	1.9	10	
2	"	薄くて鋭いたちあがり。受部先端も鋭い。内・外面とも灰色。	薄かにあずき色をした灰色	良。小砂粒含む	良好堅い	10.4	12.8 (4.3)	1.8	6	小破片
3	"	削り部分多い。内・外面ともやや濃いめの灰色。	あずき色	良。小砂粒含む	良好堅い	9.5	11.8 (4.6)	1.8	6	
4	"	長いたちあがり。内・外面とも灰色。	薄いあずき色	良。小砂粒含む	良好	9.6	11.9 (5.1)	2.1	7	
5	"	たちあがりやや厚い。受部先端は丸い。内・外面とも灰色。	灰色	普通砂粒含む	普通	12.9	15.1 (5.5)	1.8	7・10	
6	"	器形やや大きい。受部先端は丸い。内・外面とも灰色。	灰色	普通	普通	12.0	14.8 (5.5)	1.7	7	
7	"	たちあがり、受部先端は鋭い。内・外面とも紫がかかった濃い灰色。	あずき色	良。小砂粒含む	良好堅い	10.4	13.0 (4.6)	1.4	7・10	小破片
8	"	たちあがり、受部先端は丸い。内・外面とも濃い灰色。	あずき色	精良	良好堅い	11.2	14.4 (4.4)	1.3	2	
9	"	薄めたちあがり。内・外面ともあずき色がかった灰色。	あずき色	精良	良好堅い	13.0	15.6 (5.2)	1.3	9	
10	"	たちあがり、受部先端とも薄くて鋭い。内・外面とも濃い灰色。	あずき色	普通砂粒含む	良好堅い	12.1	14.5 (5.5)	1.3	7・10	
11	19	受部以下、黄緑色の自然釉。内面は灰色。	灰色	普通。小砂粒多い	良好	12.9	15.0	3.4	1.1	9
12	"	たちあがり部、受部とも薄くて先端は丸味を持つ。内・外面とも灰色。	薄いあずき色	良。小砂粒多い	良好	12.5	14.7 (5.1)	0.9	7・10	小破片
13	"	たちあがり、受部とも丸い先端部を持つ。内・外面とも灰色。	灰色	良。小砂粒含む	良好	12.4	14.8 (5.1)	1.0	10	小破片
14	"	たちあがり、受部とも丸く厚い先端部。内・外面とも灰色。	灰色	良	良好	12.0	14.7 (5.0)	1.2	2	
15	"	折って伸ばしたちあがりを持つ。内・外面とも灰色。ごく一部に自然釉。	灰色	良好	良	12.7	14.9 (4.6)	1.1	7	
16	"	受部先端は鋭い。内・外面とも黄味をおびた灰色。	灰色	良。小砂粒含む	やや、あまり	(9.8)	12.8 (3.9)	(1.6)	10	小破片
17	"	厚い体部に、先端を丸くおさめたたちあがりが付く。内・外面ともに灰色。	灰色	良	良好	11.6	14.5 (4.8)	1.3	B-2	
18	"	たちあがりと受部の先端は丸味を持つ。内・外面とも黄味がかった灰色。	黄灰色	良。小砂粒含む	やや、あまり	10.5	13.0 (4.1)	0.9	1	小破片
19	"	内傾し、先端をやや尖らせ気味のたちあがり。内・外面とも灰色。	灰色	普通。小砂粒含む	普通	11.1	13.8	4.1	0.8	9
20	"	厚めた受部。内・外面とも茶色っぽい灰色。	灰色	普通	普通	(12.6)	15.0 (4.9)	(0.9)	2	
21	20	外面底部にヘラ記号。内・外面ともに灰色。	灰色	普通。小砂粒含む	普通	10.3	12.6	3.9	0.7	9・11
22	"	短く内傾したちあがりを持つ。内・外面とも濃い灰色。	濃灰色	良。小砂粒含む	良好	10.5	12.6 (3.4)	0.5	9	一部、ヘラ記号か
23	"	外面底部に大きな削り痕。内・外面ともに灰色。	灰色	良好	良好	8.9	10.9	3.6	0.5	7
24	"	先端の尖る内傾した短いたちあがりを持つ。内・外面とも濃いめの灰色。	濃灰色	良好	良好	(9.6)	11.8 (3.1)	(0.5)	2	
25	"	先端の丸い内傾したちあがりを持つ。内・外面とも灰色。	淡灰色	良。小砂粒含む	普通	9.5	11.8	3.1	0.4	7・10
26	"	たちあがり・受部のつかない形で小さい。外面は黒灰色。内面は黄灰色。	灰色	普通	良好	(8.2)	(3.2)		7	内面に一部自然釉
27	"	高台が付き、薄くて僅かに外傾して伸びる体部。内・外面とも濃いあずき色。	あずき色	良好	あまり	13.9		5.5	7	
28	"	高台が付き、厚めの体部の先端は丸くおさめる。内・外面ともにあずき色。	あずき色	普通	あまり	14.2		4.9	9	
29	"	小形で、口縁部は丸くおさめる。内・外面とも灰色。	灰色	良好	良好	10.9		3.2	2	小破片
30	"	皿状に伸びた先端部を丸くおさめる。底は厚い。内・外面とも灰色。	灰色	良。小砂粒含む	普通	13.2		2.4	2	

第3表 コフノ採遺跡出土土器観察表(2)

### 蓋（第9図 1～19 第2表）

完形品は1点もない。1～5は古式のもので、稜がはっきりしており、口縁部の作りも鋭い。6～10は口縁内側の凹面は残るが稜は明瞭でなく痕跡を残すにとどめる。11、12は薄手の作りで、13～16は口縁先端部を丸くおさめる形である。17は短頸壺の蓋の可能性もある。18は小さなもので、僅かなかえりを付けている。19はやや大きく、小さなかえりを付け、口縁先端部は丸くおさめている。

### 坏身（第10図 1～30 第3表）

新旧混って出土している。1～6は薄くて鋭いたちあがりを持ち、口縁先端部内側に凹面を持つ。ていねいな作り方を感じさせ、1～4はやや小形で、5・6は若干大きい。7～16は口縁内側に凹面を持たず、先端を尖らせ気味に丸くおさめている。15には、折り返してたちあがり部分を作った状況が残る。17は体部がかなり厚い。18～25では、短いたちあがりが内傾し、小形のものになる。26はかえりが付かず、平底で直立する口縁部を持つ形になる。27、28は大形の、高台を貼り付ける形である。29はやや小さく、高台も小さい。30は高台のない皿状のものである。

5世紀代のものから7世紀代までのものが含まれよう。

### 高坏（第11図・第12図）

無蓋高坏（第11図 第4表）と有蓋高坏（第12図 第5表）とに区別ができるが、量的には有蓋のものが多い。

無蓋高坏にも新旧があり、1は古式に属する。全体的に鋭い作りで焼成も良好である。2～4は坏部がやや小さく、5・6は外上方に開く形のものである。

### 有蓋高坏（第12図 1～20 第5表）

1～8は、古式のもので、坏部は薄くて、長く鋭いたちあがりを持つ形である。1・3・4は口縁内側に凹面を持つ。脚は短く透し孔は1段で、脚端は段を持ち、下方に向けて丸くおさめている。10～15は脚が大形化し、透し孔も2段になるもので、16～20は小形の脚になる。

### 甕（第13図 1～4 第6表）

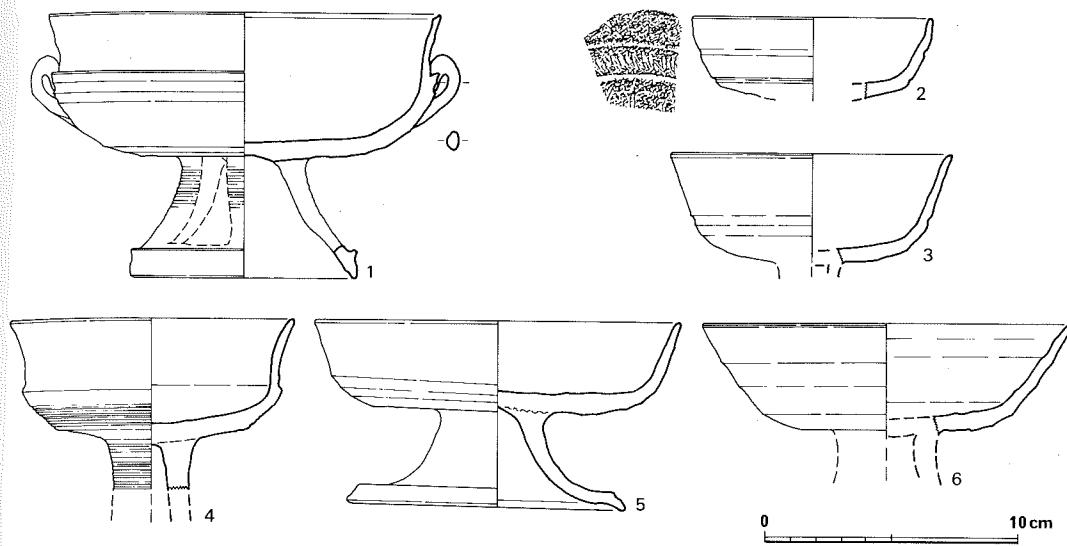
これも、全て破片となっていて全形を知り得ない。1は古い形を呈しており鋭い作りであるが、2・3・4は鋭さに欠ける。このほかにも、胴部など多数が出土しているが、器形の復原が不可能なため図示していない。

### 罐（第13図 5～7 第6表）

口縁部2点と胴部が出土している。5は鋭い作りで、7は厚めの作りである。古式のものはないようである。

### 平瓶（第13図 8・9 第6表）

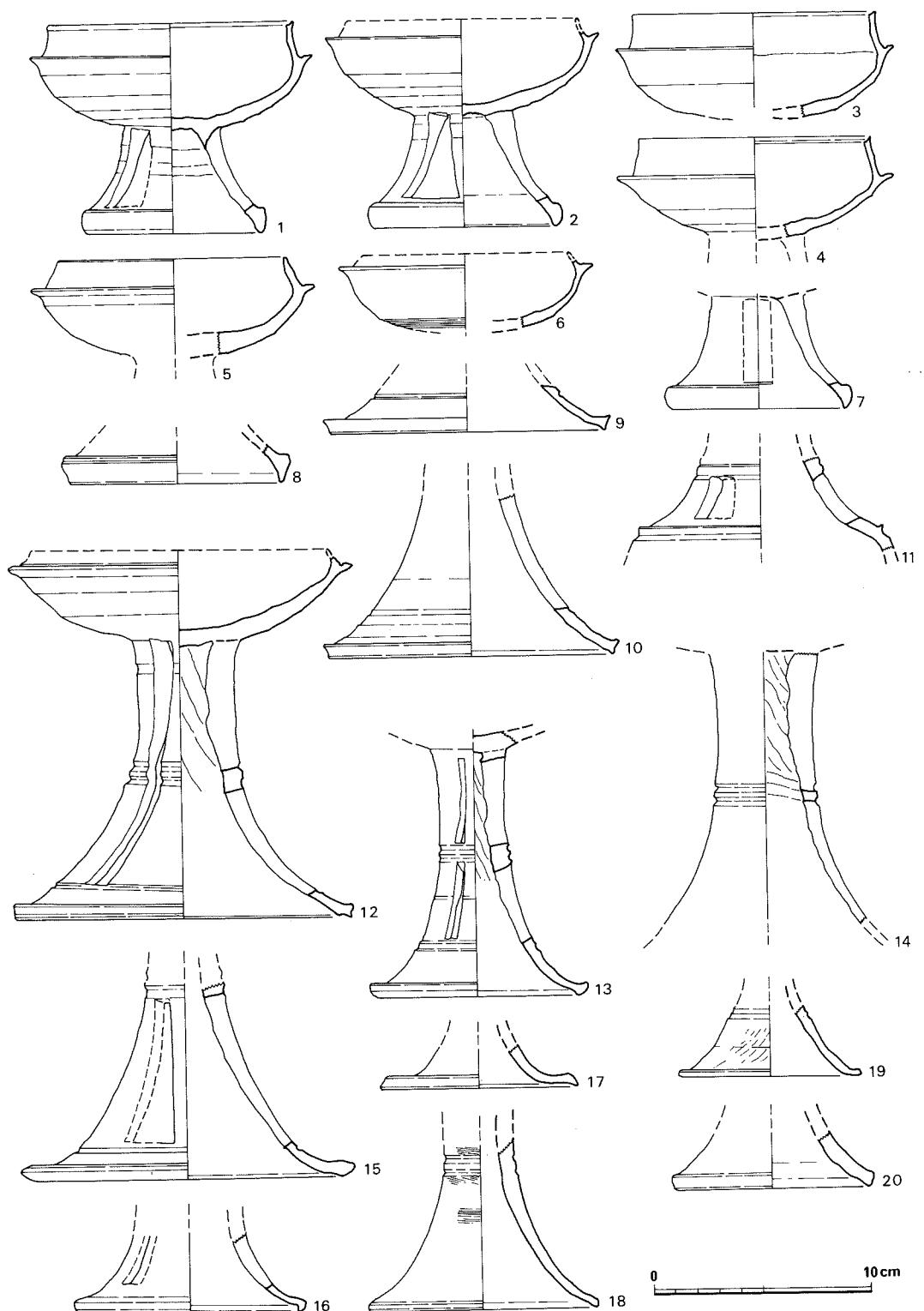
8は小破片からの復原で、図で頸部・口縁部を示した。9は8に比べて平らで角ばっており、大きい口を付けている。胴体上部には面取りをした把手を付けており、一部が残っている。



第11図 コフノ隣遺跡出土土器実測図(3)

遺物番号	図版番号	特徴				法量(cm)				出土地	備考		
		手法・形態・色調	断面の色	胎土	焼成	壺部		脚部					
						口径	深さ	脚端径	高さ				
第11図 1	21	大きい壺部に小さく短い脚が付く。壺体部からちあがり部に耳が付き、全体に非常に鋭い感じを受ける。内・外面とも黒灰色。	あずき色	良好	良好堅い	15.7	5.1	9.1	4.9	10.5	7 10・11 一部に自然釉。重ね焼痕		
2	"	小形で櫛での波状文を持つものである。外面は濃いめの灰色。内面は灰色。	灰色	普通	良	9.5	(2.7)				8 小破片		
3	"	薄めの体部の先端を丸くおさめる。薄い作りである。内・外面とも紫色がかった灰色。	灰色	良好	良	11.1	(3.8)				10		
4	"	途中で折れて外上方に伸び、端部を丸くおさめた形。体部から脚部に力き目。内・外面とも灰色。外面、一部黒灰色。	灰色	良	良	11.2	4.2				10		
5	"	大きめの壺部に低く端部を折った脚が付く。作りは少々雑である。内・外面とも濃灰色。	灰色	普通	普通	14.5	2.8	11.2	3.9	7.6	7・10 ほぼ、ある。(%以上)		
6	"	外上方に開く形で、口縁端部は、やや鋭い。外面は黒灰色。内面は濃いめの灰色。	灰色	良	良好	14.8	3.8				7		

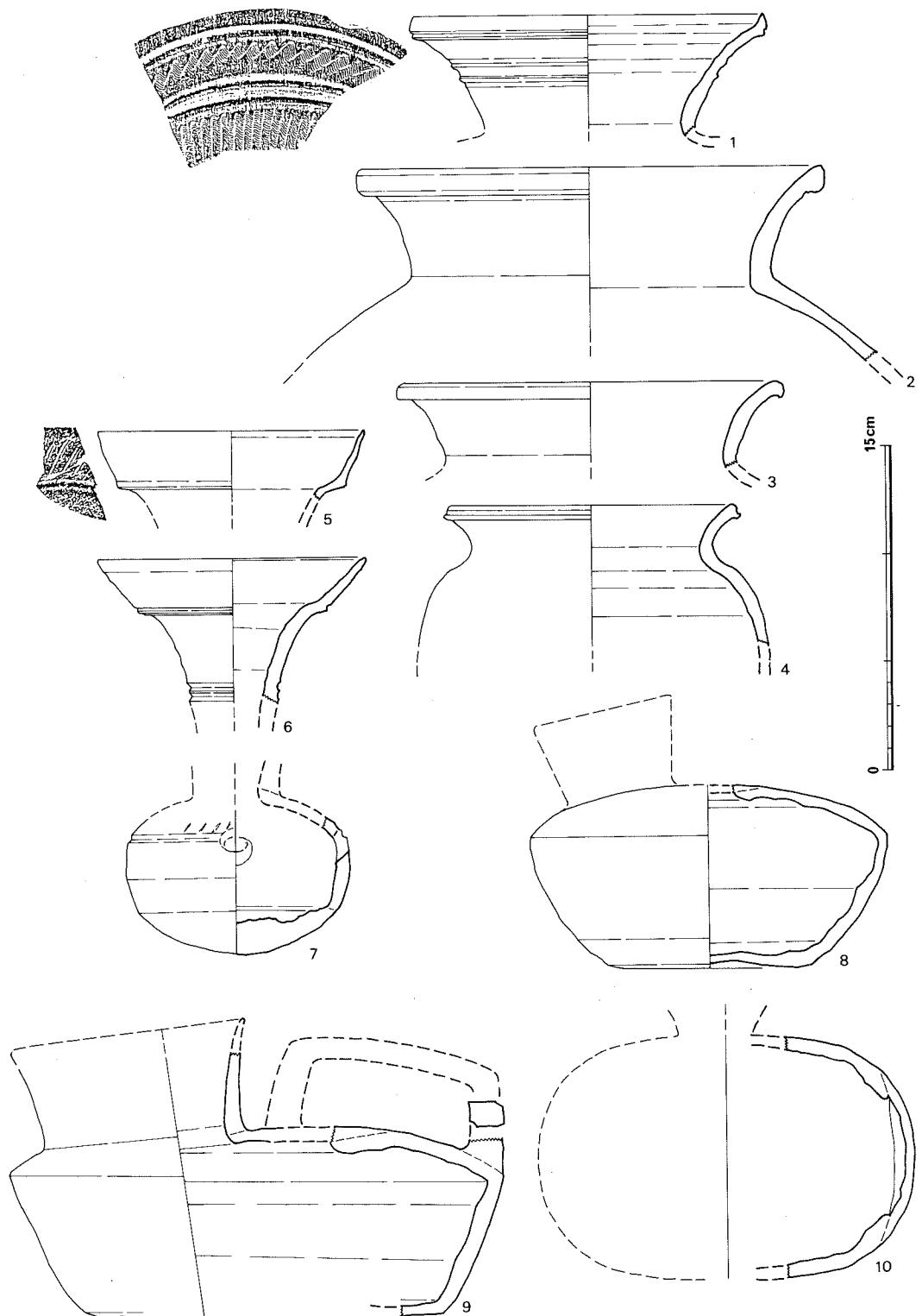
第4表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(3)



第12図 コノノ隈遺跡出土土器実測図(4)

遺物番号	図版番号	特徴				法量(cm)					出土地	備考		
		手法・形態・色調	断面の色	胎土	焼成	坏部		脚部		器高				
						口径	受部径	深さ	脚端径	高さ				
第12図 1	22	蓋坏の坏部に、3方に透しを入れた短い脚を付ける形。内・外面とも濃灰色。	あずき色	良好	良好堅い	11.4	13.2	4.4	8.7	4.9	9.9	10		
2	"	蓋坏の坏部に、3方に透しを入れた短い脚を持つ。内・外面とも濃灰色。	濃い灰色	良好	良好	(10.8)	12.8	(4.2)	9.1	5.4	(9.9)	7・10		
3	"	蓋坏の坏部に脚の付く形。1・2・3ともたちあがりは薄く鋭い。内・外面とも濃灰色。	あずき色	良好	良好	11.2	13.0	(4.5)				7		
4	"	体部からたちあがりは薄くて鋭い。内・外面とも灰色。	灰色	小砂粒含む	普通	10.8	13.0	(4.2)				6	小破片	
5	"	たちあがり、受部先端を丸くおさめぱってした感じ。内・外面とも灰色。	灰色	精良	ややあまい	10.6	11.3	(3.6)				2		
6	"	たちあがりが内傾し、やや小形。底部付近にカキ目が残る。内・外面とも茶色がかった灰色。	灰色	精良	ややあまい	(9.6)	11.8	(3.1)				10		
7	"	1・2・3と同じように蓋坏の坏部に付く形の脚部。透しの数は4か。内・外面とも、やや濃いめの灰色。	灰色	良	良				8.8	5.2		7		
8	"	脚端部が断面三角形に近く、先端が尖って下を向く形。外面は一部自然釉。内面は灰色。	灰色 紫色	良好	良好堅い				10.7			7	小破片	
9	"	脚端が大きく、外方に張り出す形。内面は灰色。外面は濃灰色。	紫灰色	良	良好				13.2			2	小破片	
10	"	9と同じ形になるものであろう。内・外面とも淡い黄灰色。	淡黄 灰色	良	ややあまい				13.8			B-2		
11	"	2段の透しを持つもので、大形である。外面に緑褐色の釉がある。内面は灰色。	灰色 あずき色	良	良好							2		
12	23	蓋坏の坏部に2段透しの脚を付けた形。脚端は坏受部くらいの大きさに広がる。内・外面とも濃灰色。	あずき色 灰色	精良	良好堅い	(13.9)	16.2	(3.7)	16.0	12.8	(17.0)	7・10	半分以上ある	
13	"	脚部がそれほど張らない2段透しの脚部。11と同じく四角の透しを3方に。内・外面とも灰色。	灰色	普通	良				10.2	11.5		7	図の部分ほぼ完全にある	
14	"	12・13と同じような形になるものと思われる。内・外面とも、やや濃いめの灰色。	あずき色 灰色	良	良好堅い							7		
15	"	2段透しの脚で、先端部は丸くおさめられ大きく外に張る。外面は黒灰色。内面は灰色。	灰色	良好	良				15.5			2		
16	"	脚部先端が内側に折れる形で透しは3方か。内・外面とも濃い灰色。	あずき色	良好	良好				10.8			9		
17	"	脚部先端を、やや内側に折っている。内・外面とも灰色。	灰色	精良	良好				9.3			2		
18	"	ゆっくり開いた脚先端部を丸くおさめている。透しはない。内・外面とも濃いめの灰色。	灰色	精良	良				10.8			B-2		
19	"	18と同じような形で、表面にシボリ痕がある。内・外面とも濃灰色。	紫灰色	良好	良好堅い				8.6			10		
20	"	厚めの脚端部で、先端は平に仕上げ内・外面とも淡い黄灰色。	淡黄 灰色	普通	普通				9.5			10		

第5表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(4)



第13図 コフノ隣遺跡出土土器実測図(5)

遺物番号	図版番号	特徴				法量(cm)		出土地	備考
		手法・形態・色調	断面の色	胎土	焼成	最大胴径	口縁径		
第13図 1	24	口縁先端部を上方につまんで伸ばし、頸部にも2条の突起状のつまみ出しがある。この間に細い櫛での波状文。外面は濃灰色。内面は灰色で黄緑色の自然釉。	灰色	良好	良好		16.1	10	甕
2	"	口縁端部を丸くおさめる。胴部はタタキのあとをカギ目で調整している。内面、青海波文。色調は内・外面とも濃い灰色。	灰色	良	良		21.3	9	甕
3	"	口縁端部を丸めて下方に折った形。内・外面とも灰色。	灰色	普通	普通		17.2	2	甕
4	"	短めの口縁端部を丸くおさめ、下方で段を付ける。ヘラ様のもので押し付けたか。内・外面とも灰色。	灰色	良	良		13.0	7・10	甕
5	"	外反しつつ伸びた頸部に、段が付いたあと、わずかに内側して伸びる口縁部が付く。先端部は鋭い。外面に2本組の櫛様のものでの波状文。外面は黒灰色。内面は灰色で一部自然釉が出る。	灰色	良	良		12.2	7	甕 小破片
6	"	やや内彎しつつ伸びる口縁端部を丸くおさめる。内・外面ともやや濃いめの灰色。	灰色	良	良		12.3	1	甕
7	"	厚い底部を持つ球形で、肩に1条の凹線をめぐらし、その上部にヘラか櫛での文様がある。胴体と底部は接合して作ったような割れ方をしている。内・外面とも黒灰色。	濃灰色	良	良好	10.4		8	甕
8	"	全体的にうすい作り。天井部内側に円孔を塞いだ部分が認められる。色調は内・外面とも灰色。	灰色	良好	良好 堅い	16.6		9・10	平瓶
9	"	平たく角ばった胴体に大きな口縁部を付ける。断面四角に面取りした把手を付ける形である。内・外面とも灰色で一部濃灰色。	灰色 濃灰色	普通	良	22.8		10・7	平瓶
10	"	小形であるが俵形を呈する横瓶であろう。内側に円孔を塞いだあとが残る。その外側はカギ目状に整形している。内・外面とも灰色。一部に淡い茶色っぽい灰色。	灰色 淡紫色	普通	良			7	

第6表 コフノ採遺跡出土土器観察表(5)

### 横瓶 (第13図 10 第6表)

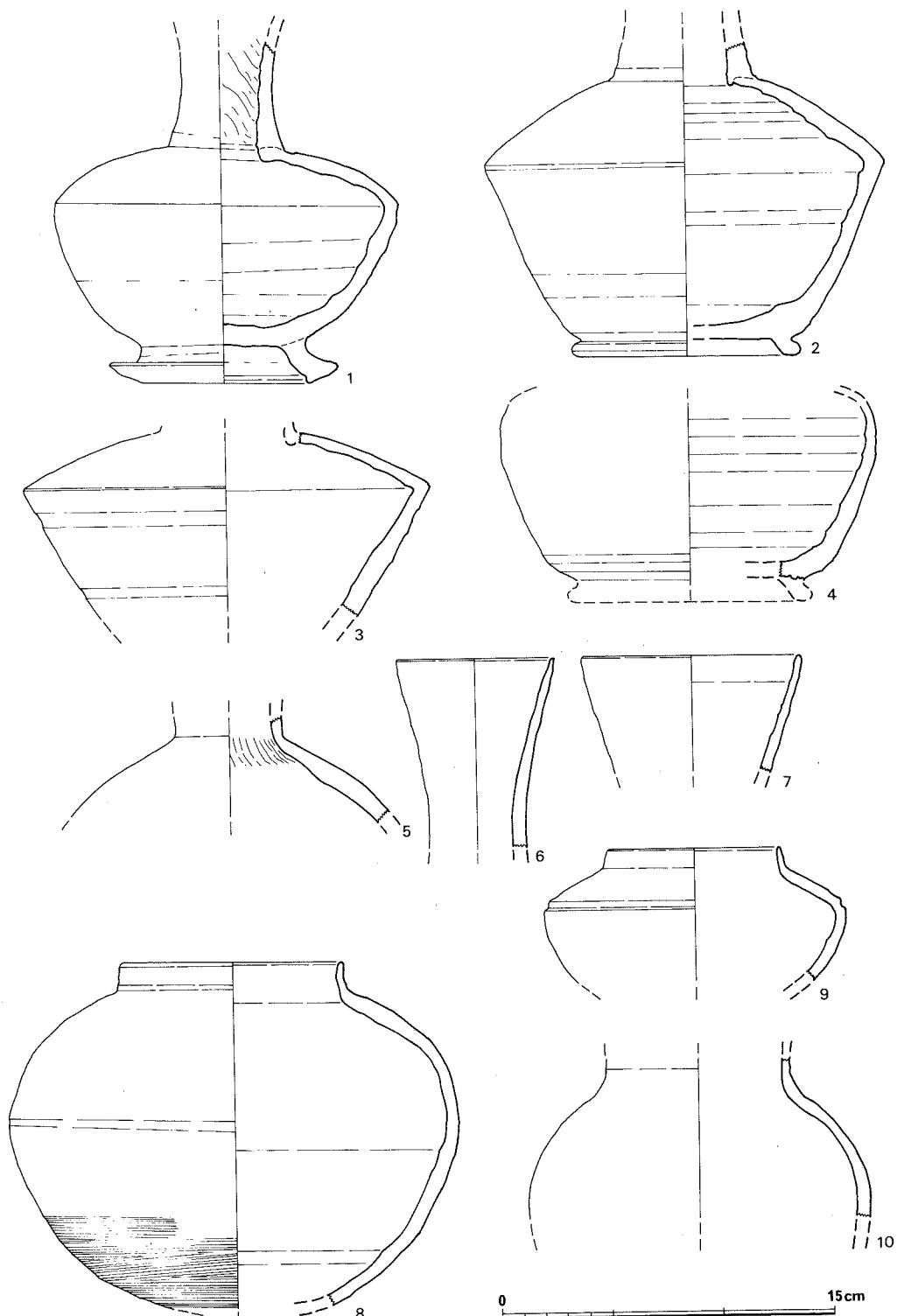
これも小破片で出土したもので、雑な感じの円孔を円盤状の粘土板でおおい、貼り付けて塞いでいる。通有の横瓶と異なって形が小さい。

### 長頸壺 (第14図 1~7 第7表)

1~3は、外上方に伸びた胴体上部を、直角に近く折り、その先端に頸部を貼り合わせている。1には、大きくて外方に「八」の字状に伸びた高台が付き、2は小形の高台が付いている。4には、高台の貼り付け場所にヘラ様のもので円形に溝を切ってある。より良く付くようにしたものと思われる。3にも高台が付いていたものと思われる。5は、原形を知り得ないが、1~4とは頸部の作り方が異なる。丸味を持つ肩部を水引きでしばり込んで頸部となっていて内側にシボリ痕が認められる。6・7ともに頸部から下を欠失している。6はわずかに外反しながら伸び、先端部を尖らせ気味にしており、7は先端を丸くおさめる形である。

### 壺 (第14図 8・9・10 第7表)

いずれも形が違う。8は球形の胴体に、薄くて短い口縁部が付き、9は肩部が内側に折れ、



第14図 コフノ隈遺跡出土土器実測図(6)

遺物番号	図版番号	特徴				法量(cm)			出土地	備考
		手法・形態・色調	断面の色	胎土	焼成	最大胴径	高台径			
第14図 1	25	体部から直角に近く折れた肩部に細い口頸部を接合した形で、外方に張り出す高台が付く。肩部一帯に自然釉。内・外面とも灰色。	灰色	良	良	15.8	10.5		7	シボリ痕 高台は大きい。
2	"	1と同じく、体部から直角に近く折れる肩部を持つ。先端を丸くおさめた小形の高台を貼り付けている。内・外面ともあずき色がかった灰色をしている。	灰色 あずき色	良 小砂粒を含む	良好	18.2	10.5		2・4	
3	"	胴体下部・頸部を欠くが1・2と同じ形であろう。外面肩部と内面は灰色。外面胴部は濃い灰色。	灰色 あずき色	良好	良好	18.6			7・10・11	
4	"	丸味の強い形で、高台貼付痕が明瞭に残る。外面は濃灰色で、内面は灰色。	灰色	良	良	17.3			9	
5	26	頸部を肩部に接合させない形の長頸壺か。外面は緑褐色の自然釉、内面は黄灰色。	あずき色 灰色	良	良好				2	1～4より 古い形か
6	"	わずかに外方に開く口頸部で端部はややうすい。内外面とも黄緑・黒灰色の自然釉かかる。	紫灰色	良好	良好 堅い			口縁径 7.2	2	頸部のみ
7	"	やや外方にひらきながら伸びる口頸部で、先端を丸くおさめている。形は大きめで、内・外面とも淡い茶色。	淡茶灰色	良好	普通			"	7・8・10	"
8		球形の胴体に直立する短い口頸部が付く。端部は丸くおさめる。胴体下部にはカキ目調整を施す。外面は濃灰色で一部黒灰色。内面は灰色。	うす紫色	良好	良好	20.7	口縁径 10.0	器高 16.0	7・8・10	
9	"	肩がはり丸味のある胴体に、先端を丸くおさめてわずかに内傾する口縁部が付く。胴と肩の境に凹面がある。内・外面とも濃い灰色。	灰色	普通	普通	13.8	" 7.8		10	
10	"	肩部から頸部にゆっくりと移り、稜をもたない。内・外面ともやや濃いめの灰色。	灰色	良	良好	15.6			10	

第7表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(6)

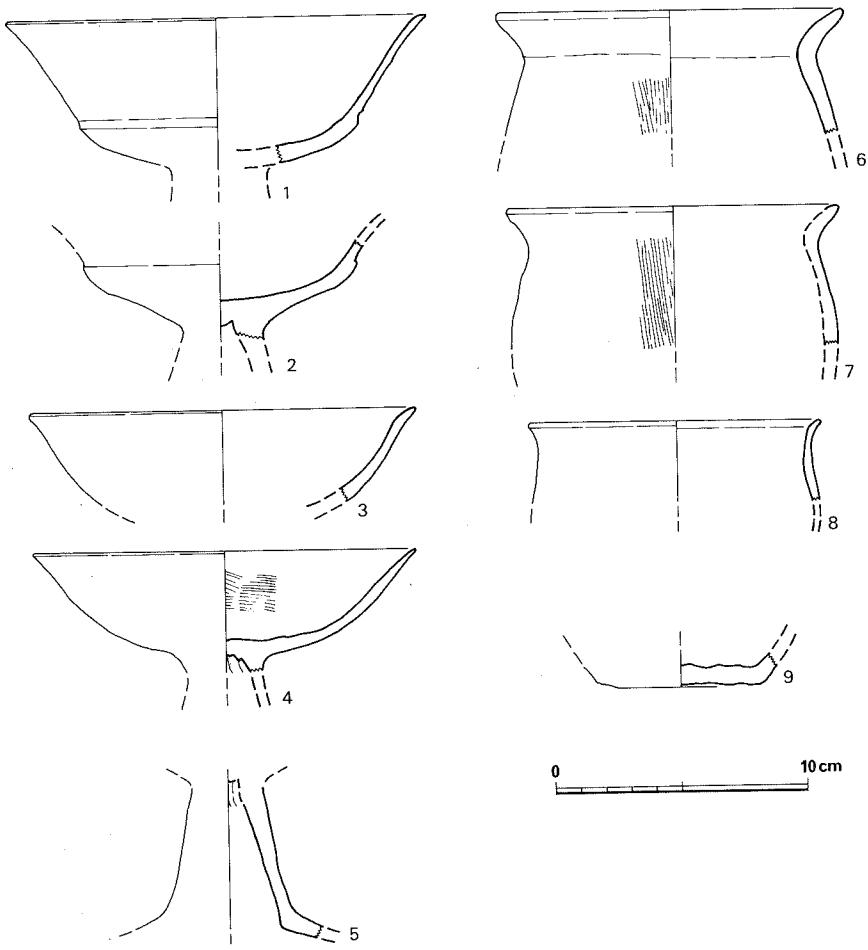
やや扁平になった球形の胴体に、わずかに内傾する短かい口縁部が付く。形は小さい。10は壺と思われるが全形は知り得ない。水引きでしぶり込んで頸部を作っている。以上は全て6世紀後半以降のものと考えられる。

#### 土師器（第15図 1～9 図版27）

高坏・甕・底部が出土している。いずれも破片で、完形品は1点もない。数的にはまだ多くが出土したが、原形に復しえないものは図示していない。

#### 高坏（第15図 1～5）

坏底部に体部を接合せる形のもの（1・2）とそのまま伸びるもの（3・4）とがある。1は厚めの坏底部に、うすく、わずかに外反しつつ伸びた口縁端部を尖らせ気味におさめている。2は口縁端部と脚端を欠く。脚内面にシボリ痕が残る。1・2とも赤褐色を呈し焼成は良い。胎土に小砂粒を含む。器表が荒れているが1の内面にミガキ痕が認められる。3・4は比較的残りが良い。3は口縁端部を丸くおさめている。胎土、焼成とも良い。4は口縁先端部



第15図 コノノ隣遺跡出土土器実測図(7)

をわずかに外に向け、尖らせ気味におさめている。細めの脚をねじ付けていて、脚内面にシボリ痕が残っている。環部内面には横方向へのハケ目が残り、わずかに丹塗りを思わせる色が残っている。器表は荒れが著しい。胎土、焼成は良い。3・4ともに茶褐色を呈する。5の脚部は、端部に近い部分を急に外方に折り出した形である。赤褐色で、良質の胎土を使用している。焼成も良い。

#### 甕 (第15図 6・7・8)

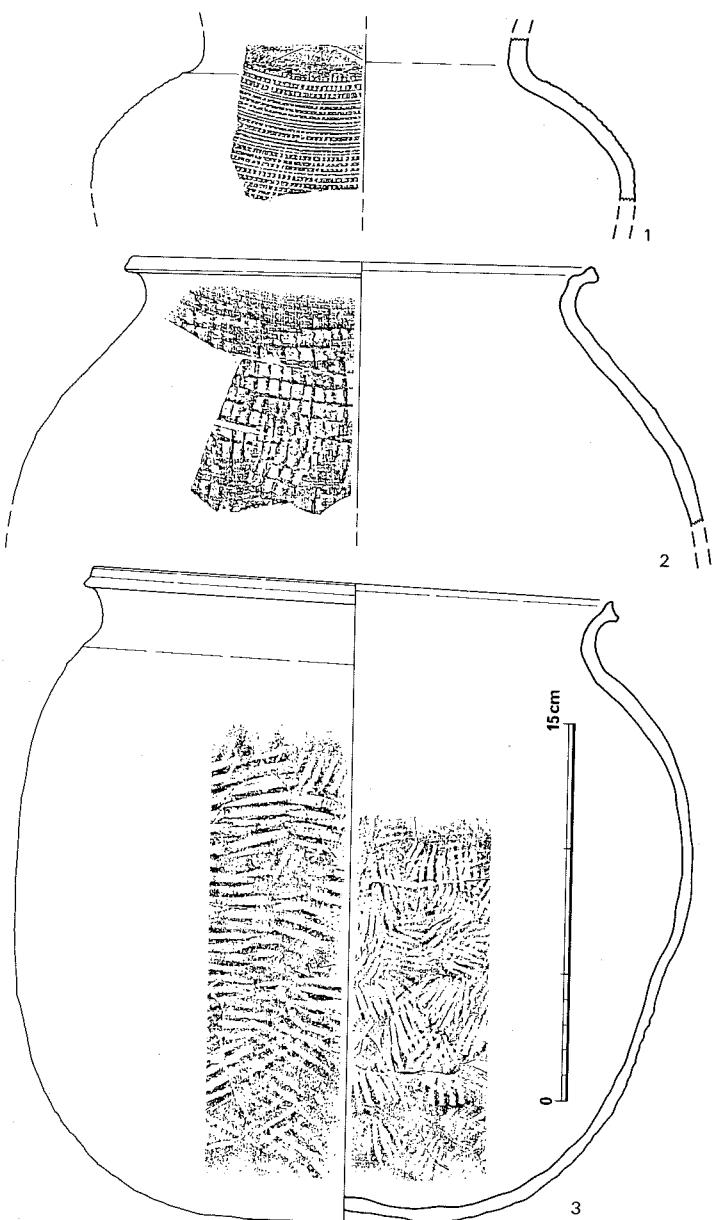
6 外反しつつ伸びる短めの口縁端部を丸くおさめる。外面にハケ目がわずかに残る。胎土に小砂粒を含む。7 短めの口縁部を持ち、胴体外面に縦方向へのハケ目が付く。内部は荒れが著しく、旧形は不明。胎土に小砂粒を含む。6, 7ともに焼成は良く、茶褐色を呈する。8は薄いが、荒れて剥落したため、もとはもっと厚かったものと思われる。小砂粒を含み焼成は普通。茶褐色。9は壺か甕の底部で胎土に砂粒が多い。内面に指先で押したような凹みがある。焼成良好。淡茶褐色。朝鮮半島にある小形甕形土器の底部であろうか。

## 2 朝鮮半島の土器

各種の土器が出土しているので、器種別に概観してみる。

### 甕 (第16図 1~3)

数量的には多いが、図に示せるようなものは少なく3点のみに留まる。1・2は、いわゆる金海式の灰青色硬質土器とされるもので、1にはいわゆる繩蓆文と呼ばれる文様が残っている。2はかなり大型で、肩部以下に格子状のタタキ痕が残っている。頸部のタタキ痕は、後から横

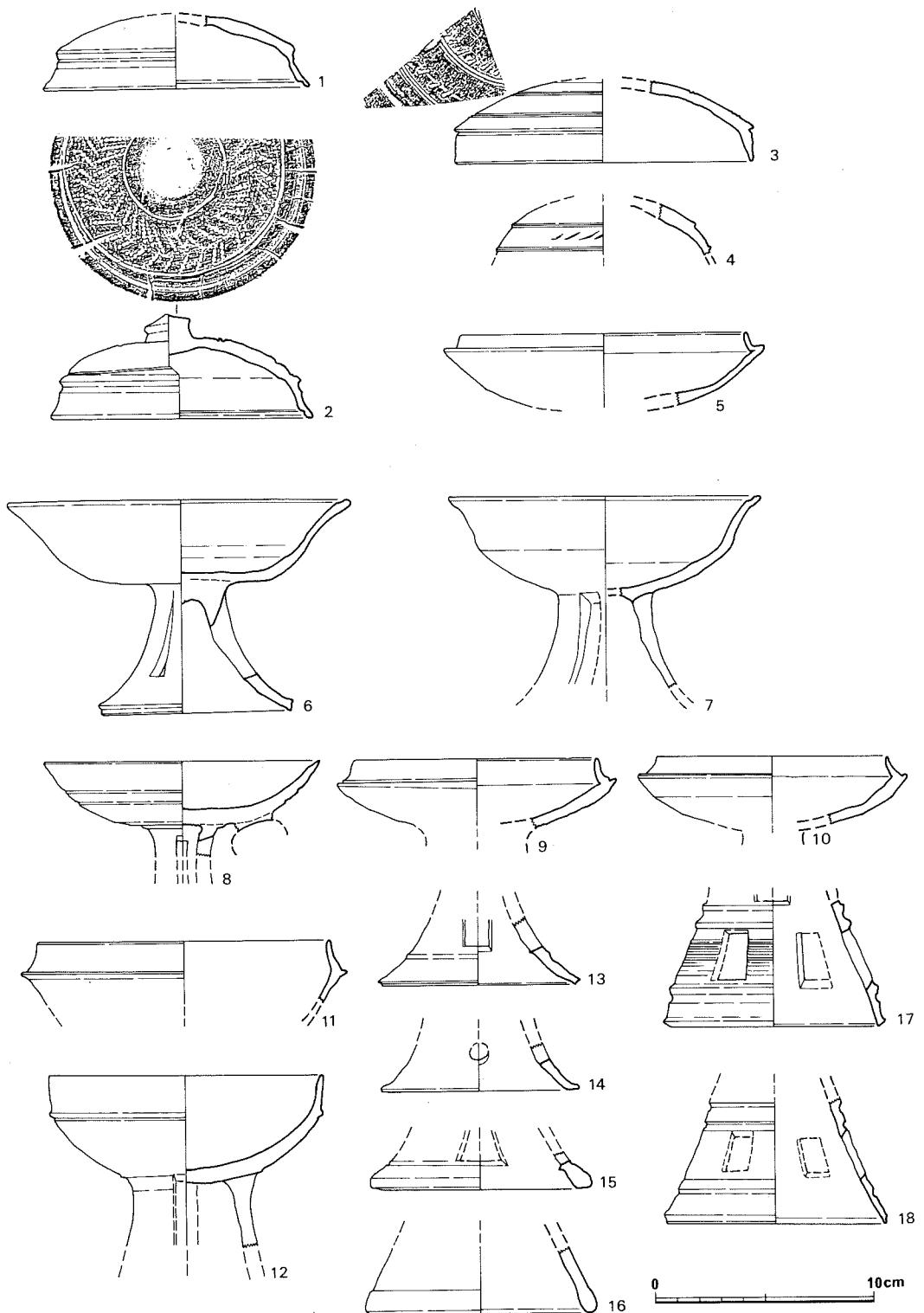


第16図 コフノ隣遺跡出土土器実測図(8)

にナデて消している。1は口縁部と胴体下部を欠き、2は胴体下部を欠いて、いずれも全形を知り得ない。3はやや歪であるが、旧状に復し得た。上方と下方につまみ出して、先端をやくぼませた口縁端部を持つ。口縁径20.7cm、最大胴径27.1cm、器高25.8cmを計る。胴体外面にはタタキ痕が残るが、肩部はヨコナデで消している。内面にもタタキ時の当て具の痕がある。全体的に均一の厚さに仕上げており、底部はやくぼんでいる。

1は濃いめの灰色、2は灰色を呈し、胎土・焼成とも良い。3の外面は暗赤褐色で、内面はあずき色がかった灰色をしている。良質の胎土を使い、焼成も良好である。

1は第6号遺構から、2は第1号・第2号遺構周辺から、3は第7号遺構周辺からの出土である。



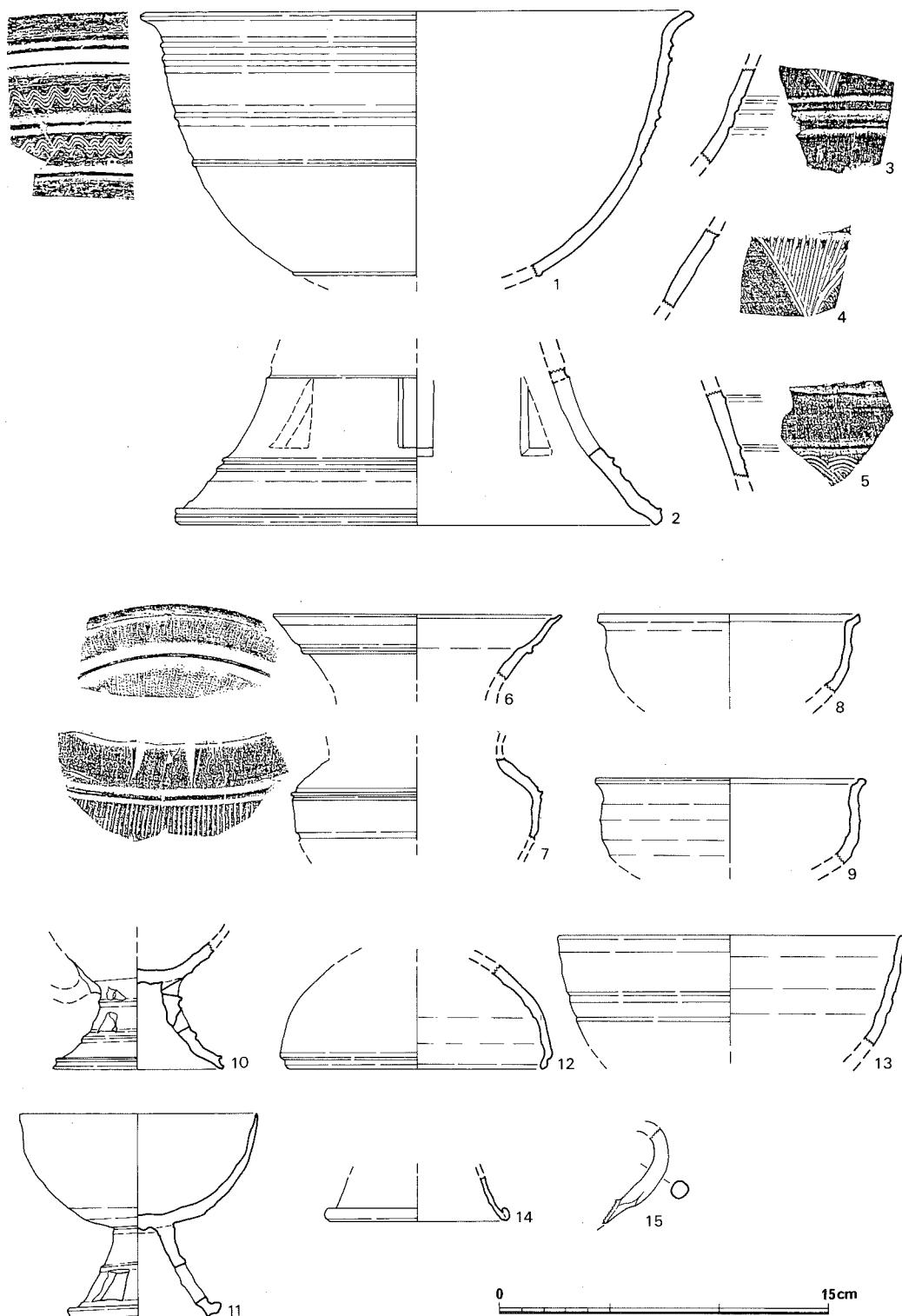
第17図 コフノ隣遺跡出土土器実測図(9)

遺物番号	図版番号	特 徴					法量(cm)		出土地	備考
		手 法・形 態・色 調		断面の色	胎 土	焼 成	口 径	器 高		
第17図 1	29	稜部で折れた口縁部は、外下方に広がり先端内面に凹面を持つ。内・外面とも濃灰色。	あずき色	良好	良好	良 好	12.1	3.5	2	半分ほどある
2	"	稜部で折れた口縁部は、外下方に広がり先端を丸くおさめる。内側に凹面を持つ。頂部につまみあり。回りに櫛での列点文を配す。外面は黒灰色。内面は灰色。	濃灰色	良好	良 好	良 好	11.9	4.8	7	Xほどを欠く
3	"	稜部から下に向いておりる口縁部。2本の沈線間に櫛状刺突具による列点文。内・外面とも灰色。	灰 色	精 良	良 好	良 好	13.5		10	小破片
4	"	2段に稜を持つ蓋と思われ、稜間にヘラ様のものでの刻みあり。内・外面とも灰色。	灰 色	良 好	良 好	良 好			3	小破片

第8表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(7)

遺物番号	図版番号	特 徴					法量(cm)			出土地	備考
		手 法・形 態・色 調		断面の色	胎 土	焼 成	杯 部		脚 部		
							口 径	受部径	深 さ		
第17図 6	29	外彎しつつ伸び口縁部を丸くおさめるが、内側に凹面あり。脚部はゆっくり広がり、それほど大きくない。三角の透し孔、3箇所。内・外面とも茶色がかかった灰色。	あずき色	精 良	普通	15.5		3.4	9.0 (器高) 9.9	7-10	恵比須山出土品に似る
7	"	6に似たつくり。脚端部を欠く。内・外面とも淡い茶色っぽい灰色。	淡い茶 灰色	良好	あま い	14.2		4.2		7	"
8	"	外上方に開く口縁端部は鋭い。坏部は浅く脚は細い。環状の耳が付く。外面は黒褐色。内面は黄灰色で自然釉が出ている。	黄 灰色 あず き色	良	良好	12.6		2.2		7	
9	30	僅かな受部と先端を丸くおさめたたちあがりを持つ。内・外面ともに濃灰色。	あず き色	良	良好 堅い	11.2	12.9	(3.0)		7	坏部はほぼ完形
10	"	9に似たつくりである。これも内・外面ともに濃灰色。9とともに、ヘラ削りらしきものはない。	あず き色	良	良好 堅い	10.6	12.4	(3.1)		7	
11	"	小さな受部に長めのたちあがりを持つ。内・外面とも濃灰色で、内面に自然釉。	あず き色	精 良	良好 堅い	13.3	15.2			B-1	
12	"	僅かに外傾しつつ伸びた口縁先端を丸くおさめている。その下に形だけの蓋受けを持ち大きめの脚がある。透しは四角で、4方か。内・外面とも黄灰色。	黄 灰色	良好	あまい なまや け	12.5	12.6	4.4		7	
13	"	ゆっくり広がった脚端部は凹みをつけた。透しは四角で4箇所と思われる。内・外面とも黒灰色。外面一部自然釉。	黄 灰色 紫色	良好	良好				9.4	10	8の脚と思われる小破片
14	"	脚先端を外につまみ出して、やや尖らせて。外から円孔を穿つ。数は不明。内・外面とも黒灰色。	あず き色	良好	良好 堅い				9.2	10	小破片
15	"	先端部を丸く厚くおさめた形で、大きめの透し孔は4箇所か。内・外面とも灰色。	あず き色	良好 (精良)	良好 堅い				10.2	10	一部自然釉
16	"	ほぼ直線的に下りた脚端部を丸くおさめている。透し孔は不明。内・外面とも濃灰色。	あず き色	良好 (精良)	良好 堅い				10.6	B-2	小破片
17	"	突帯をつまみ出してめぐらし、外下方に真直おりた端部を平にしたもので四角の透し孔をたぶん6箇所ずつ持つものか。カキ自状の調整がある。内・外面とも灰色。	灰 色 あず き色	精 良	良好				10.3	4	小破片
18	"	真直、外下方におるる薄い脚で、突帯様のつまみ出しを持つ。先端部は鋭く仕上げている。四角の透し孔を6箇所持つ。外面は黒灰色。内面は黒灰色で端部はあずき色。	あず き色	精 良	良好 堅い				10.3	B-1	小破片

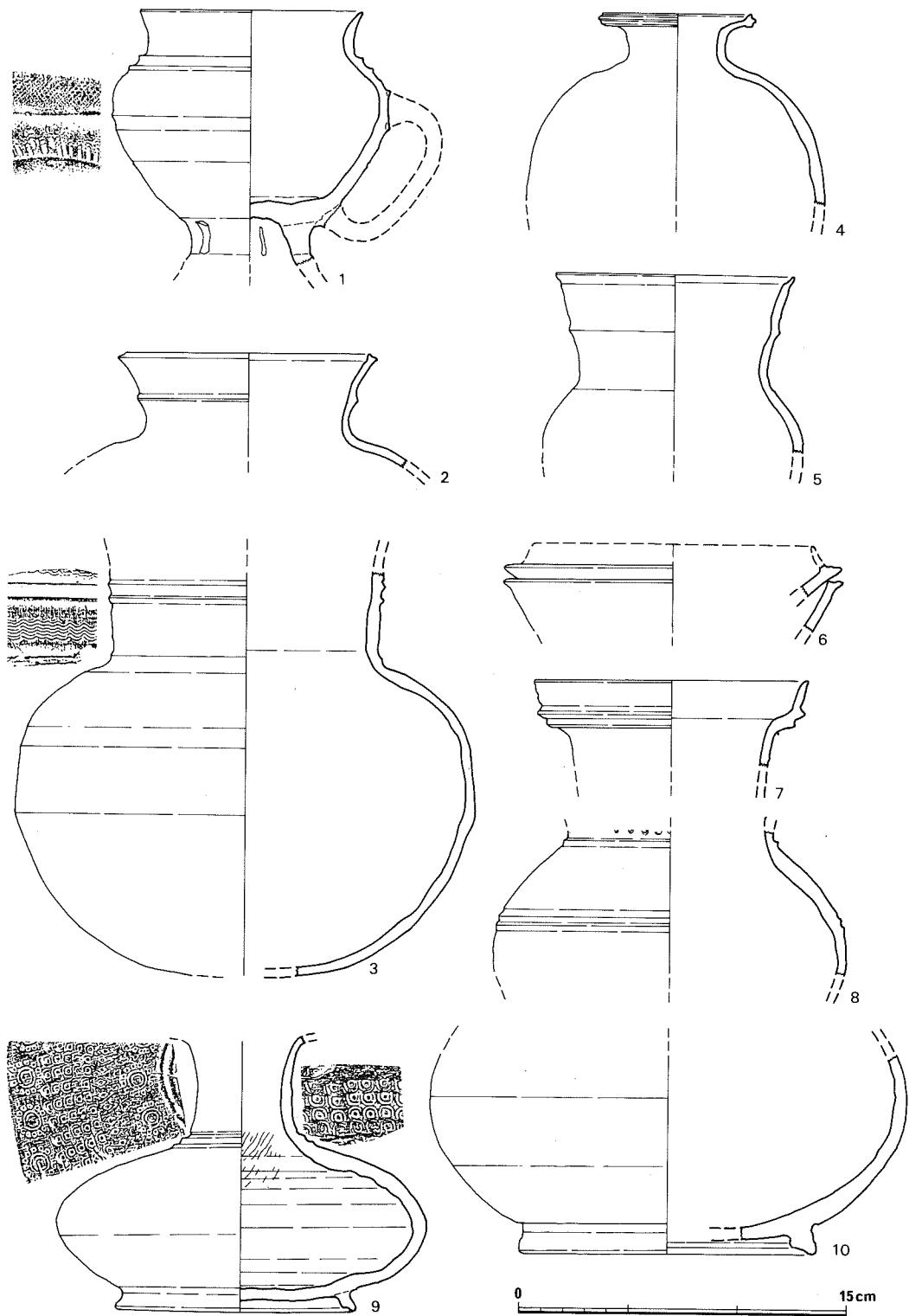
第9表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(8)



第18図 コフノ隣遺跡出土土器実測図(10)

遺物 番号	図版 番号	特 徴				法量(cm)		出土地	備 考
		手法・形態・色調	断面の色	胎土	焼成	口径	脚端径		
第18図 1 2	31	半球形の壺と備かに開きつつ伸びる脚を持つ大型の高環形器台である。壺部は外に折った端部を丸くおさめ、体部には上から2条、1条、1条の突帯をつまみ出し、その間に備での皮状文を施している。脚部は丸く、端部に1条、その上部に2条の突帯をめぐらし、2条の突帯のすぐ上に四角と三角の透し孔を交互に付けている。たぶん、8箇所になるものと思われるが、この上部は欠失して不明。外面は緑褐色の自然釉が付き、付かない部分は濃灰色。壺部内面は緑褐色・黒色の自然釉がかかり、脚部内面は端部に近い部分は灰色、その上部は黒灰色である。	灰色 濃灰色	良好	良好 堅い	25.0	22.4	7	1, 2はたぶん同一物器台
3	"	高環形器台であろう。小破片であるので法量については不明。V字形の区画内にヘラでの刻みがある。また、その下には、2条の突帯をめぐらしている。内・外面とも濃いめの灰色。	灰色	良	普通			9	"
4	"	3と同じ形態のものと思われる、刻みは10数本ある。外面は灰色。内面は濃灰色。	灰色	良	良			9	"
5	"	高環形器台の部分で、4本の施文具による波状文(組紐文)。外面は灰色。内面は濃灰色。	あずき色	精良	良好 堅い			B-2	"
6	32	僅かに内彎しつつ伸び、先端部は薄く丸く内側に凹面を持つ。頸部に突帯が1条めぐり、この上下に細い櫛での波状文を施す。内・外面とも濃い灰色。	あずき色	精良	良好	13.0		8	臘
7	"	胴上部に1条、たぶん中央部にも突帯をめぐらして、この間に13点の櫛での例点文を丁寧に付けている。外面はあずき色がかかった灰色で、内面は濃灰色。	あずき色	精良	良好		胴径 12.7		6と同個体か
8	"	内彎しつつ、ほぼ直立した口縁部を外に折り、端部を平におさめている。鉢形になるものと思われる。	灰色	良好	良	12.0		7	須恵器か
9	"	先端部を丸くおさめ、内側に凹面を付けている。鉢形になるものと思われるが、全形を知り得ない。外面は黒灰色。内面は灰色。	あずき色	精良	良好 堅い	11.9		7	小破片
10	"	小形の脚である。1本ずつの突帯を、ほぼ、等間隔に3本めぐらし、最下段の突帯は丸くおさめた脚端部と接している。2段の三角形の透し孔が3方に穿たれているが、雑に切っており、上段のものは2つが貫通していない。把手を受けた痕が残り、胴下部に大きめの櫛列点文が認められる。脚内部上方は黒色で、その他は、内・外面ともあずき色がかかった灰色。一部自然釉。	あずき色	良好	良好 堅い		脚端径 7.9	9	壺か
11	"	半球形の体部は薄くて鋭い口縁部に統く。厚めの脚は端部を外上方に折っている。脚中央よりやや上にはっきりしない突帯を付け、この下に四角の透し孔を3箇所作っている。内・外面とも濃い黄灰色で、壺内底面には黄緑色の自然釉がかかっている。	黄灰色	良	良	口径 10.8 器高 9.5	脚端径 7.1 脚高 4.3	7	
12	"	内彎しつつおりた口縁部に段をつけ、内側に曲げて先端部を丸くおさめている。内・外面とも黄灰色で部分的に濃灰色を呈する。	灰色	良	良	11.7		8	破片
13	"	僅かに内彎しつつ伸びた口縁端部を丸くおさめ、広くて浅い沈線を2条めぐらしている。内・外面とも灰色	灰色	良好	良好	15.5		2	まだ小さいか
14	"	非常に薄い器壁の先端を折り返し、まるめ込んで整形している。外面は灰色。内面はあずき色がかかった灰色。	あずき色	精良	良好		脚端径 10.1	10	高壺の脚部か
15	"	断面円形の把手で、耳形に曲がるものであろうが欠けている。下端に貼り付け時の押さえ、ナデつけの痕がある。僅かにあずき色がかかった灰色。	紫灰色	精良	良好			B-2	

第10表 コフノ隣遺跡出土土器観察表(9)



第19図 コノノ隣遺跡出土土器実測図(II)

遺物番号	図版番号	特徴				法量(cm)		出土地	備考
		手法・形態・色調	断面の色	胎土	焼成	口径	最大胴径		
第19図 1	33	把手が付く台付壺。口縁端部は外反させ、頸部に2条の突帯をつまみ出す。肩部に斜格子、胴部に櫛での列点文を付ける。脚台に小さな四角の透し孔を5方に切り込んでいるが、この下を欠いている。緑褐色や青味をおびた黒褐色の自然釉が、内・外面にかかっている。	あずき色	小砂粒を含むが良好	良好堅い	10.3	12.9	7	玉類を入れて副葬したか
2	"	口縁端部に凹面を持ち、頸部に1条の突帯をつまみ出す。均一の薄さで鋭い作り。内・外面とも淡茶褐色。	あずき色	精良	良好堅い	11.3		10	
3	"	球形の胴に直立する頸部が付き、2条の突帯をつまみ出す。この上下に櫛での波状文を施している。外面は濃灰色で内面は灰色。	薄いあずき色	良好	良好堅い		21.3	7・10	肩部に自然釉
4	"	球形の胴に直立した小さな頸部が付き、外方に開く口縁部が付く。内・外面とも灰色。	あずき色 灰色	精良	良好	6.8	13.8	7・10	
5	"	僅かに外に開き、先端を尖らせ、内側に凹面を付けた口縁部を持つ。頸部に1条の突帯をつまみ出している。内・外面ともあずき色で、一部は黒色。	あずき色	精良	良好堅い	10.5	11.8	7	
6	34	器形不明。長頸壺に蓋を逆にして焼いた際、附着したものか。端部に僅かに凹面。蓋部にはかえりの痕がある。内・外面とも淡灰色。	淡灰色	精良	良好堅い	14.4		7・11	小破片
7	"	長頸壺で、折り返した外側に2条の突帯様のつまみ出しを持つ。口縁内面に黄緑色の自然釉。内・外面とも灰色。	紫灰色	精良	良好堅い	12.5		9	"
8	"	長頸壺の胴部で、頸部との境と胴部や上方に突帯をめぐらす。頸部に円文と思われる印花文がある。内・外面とも青灰色。	灰色 あずき色	良好	良好		16.4	B-1	
9	"	胴が張り細い頸が付くが、口縁先端を欠く。頸部内面にシボリ痕。先端を丸くおさめ、外下方に伸びる高台を貼り付ける。頸部に2個ずつ上下を向いた馬蹄形文、体部には上方から連珠花形文、二重列点菱形文、連続馬蹄形文、連珠花形文を配している。内・外面とも青灰色。	あずき色 濃灰色	精良	良好堅い		17.1	10	体部は半分以上ほどある
10	"	長頸壺の胴部で、丸くおさめて下に向いた高台を貼り付ける。外面は濃灰色。内面は灰色。	あずき色 灰色	精良	良好堅い		21.9	9	

第11表 コフノ採遺跡出土土器観察表(10)

※印花文の名称は「蔚州華山里古墳群」を参考にした。

### 蓋（第17図 1～4 第8表）

1・2は形態的には似ているが、1は破片で、つまみ部分が残っておらず、櫛状のものでの列点文もなく単純な感じを受ける。2は $\frac{1}{2}$ ほどを欠いている。中心からはずれた位置に、若干傾いたつまみを付けてナデて仕上げている。沈線の入れ方や列点文の施し方は少々荒い。3小破片からの復原で、大きさは疑問を残す。4 これも小破片からの復原である。上下2本の突帶様のものが見られるが、頂部と口縁部を欠き全形を知り得ない。

### 坏身（第17図 5）

精良な胎土で、堅く焼き締った土器である。薄く伸びた体部を途中で折り返し、先端を丸くおさめている状況が明瞭に残っている。

### 高坏（第17図 6～18 第9表）

無蓋高坏（6～8）と有蓋高坏（9～12）とに大別される。6・7はよく似た作りで、外反しつつ伸びた口縁先端部を丸くおさめ、内側に凹みを持っている。脚はゆっくりと開き、先端はややくぼませ気味におさめ、三角形の透し孔を3箇所に配している。8はやや小形で、浅く、耳環の付く形であろう。厚めの坏部の口縁端部はとがらせ気味にしており、体部に2条の凹みがある。9・10は脚部ではなく坏部のみであるが、大きさや蓋受け部、たちあがりなどの形態・胎土・焼成の具合などよく似た作りである。受け部先端を小さく、丸く、申し訳程度に付けているところに特徴がある。11は須恵器とも思えるが、受け部がほんのわずかであり、胎土も精選されたものを使っており、焼成も良好で、堅く締っていることなどから半島系の高坏の坏部と考えた。12は生焼けで黄灰色を呈している。たちあがりがわずかに外方に開く形で直立しており、無蓋高坏と思われるが、蓋受けの芽生えとも思われるものが出現しており、一応有蓋高坏の項に入れておいた。13～18は脚のみで坏部の形は不明である。13は胎土・焼成・色調などから見て、8の脚部と考えられる。14は丸い透し孔を持ち、15は大きめの透し孔を持っている。16は丸くおさめた脚端部を持っているが小破片のため透し孔の有無・数については不明である。17・18は薄手で、鋭い作りである。胎土も良質のものを使用しており、焼成も良孔で堅く焼き締っている。

### 器台（第18図 1～5 第10表）

半球形の坏部に大きな脚の付く形の器台で、櫛様ものでの波状文が巡っている。3・4・5は1・2とは異なる器台の部分と考えた。3・4はV字形の区画の中に斜線を刻み、5は波状文を重ねたような文様を持つ。

### 竈（第18図 6・7 第10表）

薄手の鋭い作りで、精良な胎土を使用している。古式の須恵器の可能性もあるが、作りがていねいであることなどから半島系の遺物と考えた。

### 鉢形土器（第18図 8・9 第10表）

8は口縁部から体部にかけて $\frac{1}{2}$ ほどが残っているが底部の状況は不明である。9はごく小さ

な破片から復原しており、大きさについては疑問を残す。8は須恵器か。

把手付壺（第18図 10 第10表）

10は把手と脚台の付いた土器であるが、体部を欠失しており、壺あるいは鉢形になるものか、または壺状になるかは判然としない。しかし、壺になる可能性が強い。

高壺（第18図 11 第10表）

半球形の楕状の体部に透し孔を1段穿っている。第17図の高壺とは形態上に相異があり、脚付椀とでも称されるものであろう。

蓋（第18図 12 第10表）

壺の蓋であろう。口縁先端部の外側に1段のくぼみが付く形である。

有台無蓋高壺（第18図 13 第10表）

内彎しつつ伸びる体部を持つ、大形の高壺か鉢と考えられる。胴体下部以下を欠いているが、出土例から有台のものを想定した。あるいは把手の付く形のものかも知れない。

脚台（第18図 14 第10表）

非常に薄い器壁を持つ脚で、丸くおさめた先端部分を折り、まるめ込むような形にしている。上部の形がどのようになるのかは不明であるが、この脚はさほど長くはないものと思われる。

把手（第18図 15 第10表）

小形の、きゃしゃな感じを受ける把手であるが、一部を欠いている。盤と呼ばれているものの把手と思われる。

把手付有台短頸壺（第19図 1 第11表）

玉類を入れて出土しており、副葬されていたと思われるもので、体部の半分ほどと、口縁部、脚部の一部が残っている。口縁部の外側への傾きから無蓋のものと思われる。

短頸壺（第19図 2 第11表）

薄手で、鋭い感じの作りである。頸部のはぼ中央に断面三角形に突帯をつまみ出し、口縁端部はややくぼませ気味に、内側は上方につまんだ形におさめている。胴部以下を欠いているが、丸底の壺になるものと考えられる。

長頸壺（第19図 3 第11表）

球形の胴体にはぼ直立する頸部が続くもので、頸部なかほどに2条の鋭い突帯をつまみ出し、頸の付け根にも1条の突帯を巡らしている。2条の突帯の上下に、ていねいな描き方で、櫛様のものでの波状文が施されている。器壁は均一な作りで、全体的にていねいな作りである。

短頸壺（第19図 4 第11表）

球形の胴体に大きく外方に広がる口縁部で、上下に厚くなった口縁端部を持つ。胴体以下を欠失しており、全形を知り得ないが、底部は平になるものであろう。胴体と頸部の境に接合したあと水引きで仕上げた痕跡が残っている。

長頸壺（第19図 5 第11表）

小さな断面三角形の突帯をつまみ出して頸部にめぐらしている。口縁先端をわずかに外側に折って薄く仕上げている。胴体は下半分を欠失しているが、たぶん球形になるものであろう。あるいは台脚の付く形になるものであろうか。

#### 壺・蓋（第19図 6 第11表）

小さな破片で器形の全体を知り得ないが、上のは、かえりを持つ蓋であろうと考えている。下は壺の口縁部で、蓋をさかさにして焼成する際に融けて付いたものと考えられる。

#### 長頸壺（第19図 7・8・9・10 第11表）

7は、韓国で「付加口縁」と呼ばれている長頸壺の口縁部で、頸部上端と口縁の部分が出土した。これより下部を欠失しているが、円形の胴体を持ち、たぶん台脚が付くものと考えられる。8は長頸壺であるが、7とは別個体で、壺の肩から胴体にかけての部分である。頸部に印花文の一部と思われる小さな円文が付いている。9は、横にふくらみ、平な形の胴体に細めの頸が付く形で、胴体上半部と頸部を印花文で埋めている。口縁先端部を欠き、このままおさまるのか、さらにもう一度たちあがるのかは明瞭ではない。さほど大きくない高台が付く。10は胴体上部以上を欠いている。外下方に向いた高台に丸味のついた体部が続いている。長い頸部を持つ壺と考えられる。

#### 朝鮮半島製土器の類例とその年代について

以上で見てきた朝鮮半島製の土器のうち、類例や時代の知られるものについて概観してみたい。

第16図1・2・3は、いわゆる金海系の陶質土器として知られているもので、対馬・壱岐での出土例はかなり多い。<sup>(註1)</sup> 3は、大きさが少し異なるが、器形・口縁部の形から対馬峰町のチゴノハナ遺跡出土のものに近く、報告書では5世紀中頃から後半にかけての時期が与えられている。

第17図1・2は伽倻の蓋で、5世紀でも前半代のものと考えられる。<sup>(註2)</sup> 4は、全形は不明であるが、蓋の稜部付近の形状や、想像される大きさから見ると、国内では岐阜県大垣市遊塚古墳<sup>(註3)</sup> 出土のものに似ている。朝鮮半島では、釜山華明洞古墳群・東萊福泉洞古墳群などからもその類例が知られており、最近の韓国の研究者の考えでは、この手の蓋の出現の時期を5世紀初葉の遅い時期、または5世紀前葉の早い時期としてとらえられていて、遊塚古墳出土のものを4世紀末に比定する考えについては、再考の必要を感じておられる。<sup>(註4)</sup> 5は伽倻の壺で、5世紀後半代のものであろう。<sup>(註5)</sup> 6・7の高壺は、かなり似たものが対馬峰町の恵比須山遺跡から出土しているが、脚部が若干長く、器形も全体的に少し大きい。三角形の透し孔を入れているところ、口縁端部と脚端部の処理の仕方には、かなり類似する点が多い。報告書では5世紀中葉の伽倻式土器の系統とされている。また、同じく峰町のトウトゴ山遺跡表面採集の遺物中にも似たものがある。<sup>(註6)</sup> これも脚部の形や、口縁端部と脚端部の処理の仕方が似ているが、壺体部が内巻し

つつ伸び、深めの壺部となっているところが違っている。5世紀中葉頃の編年を考えられている。このほか東萊福泉洞古墳群にも出土例がある。<sup>(註10)</sup> 8は古新羅系の高壺で、咸安第34号墳出土品中に似たものが認められる。<sup>(註11)</sup> 9・10は高靈池山洞2号墳出土の高壺に、壺部が浅く、蓋受け部が小さい点が似ている。このように、浅い壺部と小さな蓋受けを持つ高壺は、陝川三嘉古墳群第3号墳F遺構出土品にもあり、5世紀末から6世紀初に、同第5号墳出土の高壺は、たちあがり付近の体部が厚いところもよく似ていて、<sup>(註12)</sup> 5世紀初から末葉とされている。<sup>(註13)</sup> 12は、東萊福泉洞古墳群に出土しているものと同じ形であるが、なまやけである。<sup>(註14)</sup> 13は8の脚の可能性が強い。<sup>(註15)</sup> 17・18は福泉洞古墳群・蔚州華山里古墳群で出土のものに似ており、5世紀後葉とされている。

18図1～5の器台は福泉洞古墳群からも出土しているが、やや大きいものが多い。3・4の文様をもつものとして国内では、福岡県宗像郡奴山5号墳の墳丘裾部出土の陶質の大形器台が知られており、この古墳には5世紀前葉という時代が当ててある。本遺跡出土のものは、奴山のものほど大きくはない点が異なっているが、5世紀代のものには間違いないものと思われる。

6・7は須恵器の第I型式中にもあるようだが、5世紀の伽倻のものかと考えた。8・9は不明。10は5世紀代のものと見ても良いか。1段ではあるが三角形の透し孔をあけ、脚端径もほぼ近い大きさのものが金海府院洞で出土しており、それは把手付の壺形土器と称されている。

11は達西面古墳群第55号墳出土土器中に似たものがあり、古新羅に属するもので6世紀のものであり、13になるものと思われるものもいっしょに出土している。<sup>(註17)</sup> 12の蓋はかなり新しいもので6世紀後半の新羅のものと思われる。

第19図1は華明洞古墳群、福泉洞古墳群などに出土例があり、5世紀前半代の伽倻の製品と考えて良いであろう。日本では、福岡市有田出土陶質土器中にあるとして紹介されており、<sup>(註18)</sup> 福岡県糸島地方でも出土例が伝えられている。<sup>(註19)</sup> 2も華明洞古墳群に若干似た短頸壺が出土しており、5世紀前半代の伽倻のものとして大過なかろう。<sup>(註20)</sup> 3は、福泉洞古墳群、星山洞第1号墳などに出土例がある。5世紀代のものである。4は百濟系のものと思われ、陝川三嘉古墳群第1号墳G遺構でも出土している。5世紀代と考えてよいであろう。5はやや新しく6世紀前半代のものか。華山里古墳群に出土しており、そのように報告されている。6は7・8と同じような年代を考えており、6世紀末から7世紀にはいるものと考えられる。9は口縁部がなく、おとし蓋様式のものか、かえりの付く形式のものは判然としない。10は9と同じ頃のものと思われ、6世紀末から7世紀前半代が考えられよう。

(藤田)

- 註1 (1) 「金海府院洞遺跡」 東亜大学校博物館 1981年  
(2) 「古代伽倻の検討」 古代を考える会『瓦質土器の検討と意義』 崔鍾圭
- 2 (1) 「対馬」東亜考古学会 1953年  
(2) 「対馬」長崎県教育委員会 1974年

- 註 2 (3) 「恵比須山遺跡発掘調査報告」長崎県峰村教育委員会 1974年  
(4) 「対馬の遺跡」長崎県教育委員会 1975年  
(5) 「対馬の考古学」縄文文化研究会 1976年  
(6) 「対馬豊玉町ハロウ遺跡」豊玉町教育委員会 1980年
- 3 「原の辻遺跡 I」長崎県教育委員会 1976年
- 4 「平安博物館研究紀要」『韓國慶尚南道釜山・金海地域出土陶質土器の検討』  
定森 秀夫 1982年
- 5 「釜山華明洞古墳群」釜山大学校博物館 1979年
- 6 註 1 の(2)『伽倻地域における4世紀代の陶質土器と墓制』申 敬澈 56ページ
- 7 註 6 に同じ 57ページ
- 8 註 2 の(3)に同じ
- 9 註 2 の(4)『トウトゴ山墳墓群』坂田 邦洋
- 10 「東萊福泉洞第1号古墳発掘調査報告」東亜大学校博物館 1971年
- 11 「大正六年度古蹟調査報告」咸安第34号墳 朝鮮總督府 1920年
- 12 「大正七年度古蹟調査報告」高靈池山洞第2号墳 朝鮮總督府 1922年
- 13 「陝川三喜古墳群」東亜大学校博物館 1982年
- 14 「東萊福泉洞古墳群I」釜山大学校博物館 1982年
- 15 「蔚州華山里古墳群」釜山大学校博物館 1983年
- 16 「奴山5号古墳」福岡県津屋崎町教育委員会 1978年
- 17 「大正十二年度古蹟調査報告」達西面古墳第55号墳 朝鮮總督府 1931年
- 18 「池の上墳墓群」福岡県甘木市教育委員会 1979年
- 19 「三雲遺跡 IV」福岡県教育委員会 1983年
- 20 註12に同じ。星山洞第1号古墳

以上のはかに、朝鮮半島製の遺物を出土する遺跡として報告されているものについては、次のようなものが知られている。

- 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 IX」『福岡県大野城市乙金所在古墳群の調査』  
福岡県教育委員会 1977年
- 「広石古墳群」福岡市教育委員会 1977年
- 「古寺墳墓群」甘木市教育委員会 1982年

またこれらの資料をも取り入れつつ、西日本各地発見の朝鮮半島の土器についての考察がなされているものとしては「古文化談叢」第5集（九州古文化研究会 1978年）に、小田富士雄氏の『西日本発見の百濟系土器』、『対馬・北部九州発見の新羅系陶質土器』などがある。

—追— 脱稿が終り印刷所に回す日の朝、第17図4の蓋に似たものが、58年秋の壱岐カラカミ遺跡の調査で出土していることを知った。当該遺物は4cm×4cmほどの破片であるが、ちょうど第17図4のものと同じ部位であり、4よりやや大きめの、つまみ出して作った突帯が2本、4とほぼ同じ位置にめぐらしてある。上部の突帯の上は、約7mmほどの幅でくぼませている。さらに、2本の突帯の間には、鋭いヘラか金属器で斜め方向に刻みを入れている点も4に似る。内側には水引き痕が明瞭に残る。色は灰色で、胎土や焼成の具合も4によく似ている。

資料を提示された、文化課宮崎貴夫氏の好意に謝を表すものである。

### 3 鉄器 (第20図 1~5 図版27)

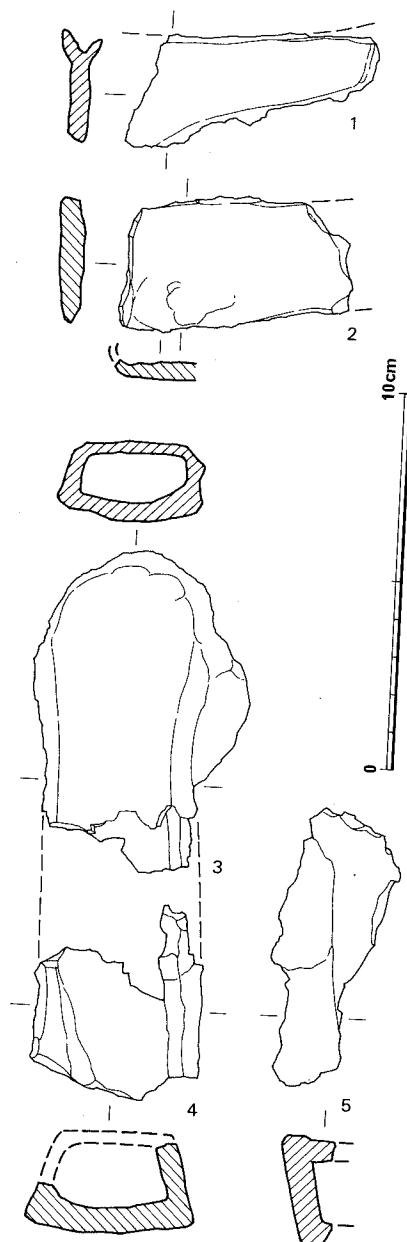
数十片が出土しているが、形状の判定のつくもののみを図示している。

1は鋤先の一部で、形状から端部に近いものと思われる。木身の装着部は「Y」字状に開く溝となっているが、溝の両側は長さがそれぞれ異なる。溝の最深部から刃部方向に、現在での最大値は2.4cmあるが、刃部を欠失しているので、もともとはこれ以上あったことが知られる。装着部すぐ下の身の厚さは5.0mmである。元来の、全体の大きさは不明である。2 図の左下端部に、折り曲げたように観察される部分があるところから鉄鎌であろうと考えられる。背から刃部までの幅2.3cm、身の厚いところで6mmほどある。先端部を欠いていて、旧状をることはできない。3・4・5は鉄斧であろう。3と4は、接合はしないものの、形態や錆の状況などから、同一個体と思われる。やや丸みを持った台形になると思われる袋部が残っているが、刃部の形状は錆のため明瞭ではない。基部での、袋部の長辺の長さは4.5cmある。5は、3・4とは別個体と思われ、現存長は7.4cmある。これも台形の袋部を持つものであろうが、基部・刃部を含めての旧状を知り得ない。

1・2・5は比較的に残りが良いが、3・4は錆がひどい。1・2はともに1片ずつ第10号遺構周辺からの出土で、3・4は第7号、第10号遺構の間から、5は第11号遺構からの出土である。

ここで出土している鉄斧に似た形のものが、東亜考古学会の「対馬」(1953年)に報告されている。現在の上対馬町で、当時豊崎村比田勝古里と呼ばれていた場所にある古里箱式石室墓からの出土品である。それによると、この形式は朝鮮三国時代の古墳に多く、日本の古墳からの出土例は少ないとされており、国内での出土例として福岡県飯塚市枝国山ノ神古墳出土の鉄斧の図を添えてある。

朝鮮半島では、釜山華明洞第2号墳に報告の例があり、形状・大きさから、本遺跡出土品もこれに最も近いようである。また、陝川三嘉古墳群第2号墳出土例も、形は似た点があるが、大きさが異なっている。 (藤田)



第20図 コフノ際遺跡出土鉄器実測図

#### 4 玉類 (第21・22図 図版35・36)

本遺跡出土の小玉類は、第11表に示したとおりで、各遺構に及んでいる。

##### ガラス小玉

出土総数は55個を数える。色調は様々であるが、4色に観察される。(1)群青色とかコバルトブルーと呼ばれる濃紺色。(2)青色、(3)うす青色、(4)うす緑色である。どの遺構出土のガラス玉も、単色の出土ではなく、殆どの色が混合されている。形状は(1)・(3)の色調のものが大形になる傾向にあり、断面は両端が平行なもの、斜行するもの、さらに厚いものや薄手のものなどまちまちである。これは製作課程で、棒状に延ばしたガラス管を切断した時の、技術的な問題であろう。切断面は、平坦部をもつものと、全体に丸みをおび研磨されたのではないかと思われるものがある。最大値は、第21図81の径0.68cmで、最小値は24~26の径0.25cmに示されるように、全体として一定していない。

##### 滑石小玉

出土総数13個、色調は黄褐色か灰色を呈する。形状は殆ど径0.5cm弱にまとまる。切断面は平坦で、側面に張り出しの稜線がめぐるものと、丸みを持つものに区別出来る。

##### 瑪瑙小玉

第7号遺構出土の土器内からのもので、1点だけである。形状は球形で、孔の片方は若干凹んでいる。色調は橙色に近く、部分的に淡いが光沢がある。径は0.53cmを測る。

##### 雁木玉

B地点第2号遺構出土、緑色のガラス質だけが残り破損している。ガラス質には白い縞模様の一部が、わずかに観察できる。復原径は1.3cm、孔径0.4cmを測る。

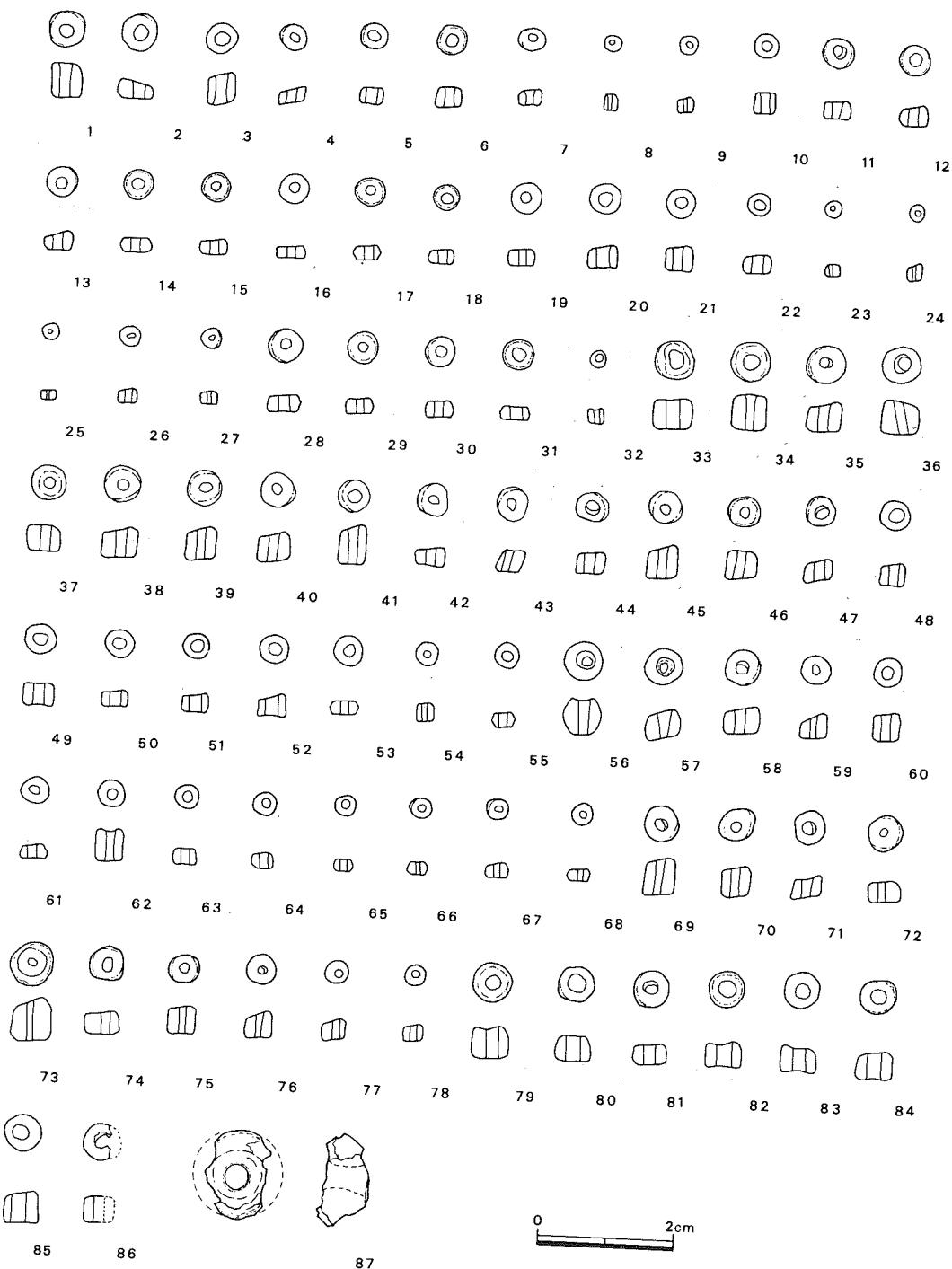
##### 勾玉

2個の出土があった。第22図1は第10号遺構の表面から出土、材質は瑪瑙を用い、色調は黄褐色を呈する。長さ1.96cm、頭頂幅0.62cmを測り小形の部類に入る。孔は両方から穿たれ2段になるが、紐ずれで摩耗している。2は5の管玉類とともに、第19図1の土器中に入っていたもので、副葬品と思われる。材質は碧玉で、深緑色を呈する。頭頂は若干平たく磨かれ、全長3cm、頂部1.3cm、孔は大きい方が0.4cm、小さい方が0.15cmの片割で、小さい孔口には紐ずれ痕が認められる。腹部には弱い稜線が入り、かすかに磨かれた方向が見い出せる。

##### 管玉

3個の出土があった。第22図3は第1号遺構表面出土。片方を一部欠失するが、わずかに端部が残る。長さ1.6cm、径0.45cmを測り、孔は両割である。表面には白いスジ状の線が走り、石質は緑色岩である。4は完形品で、B地点第2号遺構上面出土。長さ約2cm、径0.7cm、孔は上が0.3cm、下が0.1cmを測り、片割で斜行している。材質は碧玉で、全体に縞模様が入る。

5は碧玉製勾玉と同じく第19図1の土器中のもので、微粒な気泡痕が入るガラス製である。色



第21図 コフノ跡遺跡出土玉類実測図

調は青色を呈し、長さ1.6cm、径1cm、孔径0.4cmを測る。切断面は一方が、やや斜行し、両方にわずかな紐ずれ痕が残る。

切子玉（第22図 6）

第11号遺構出土。水晶を用い平面六角形を呈する。長さ3cm、胴径1.6cmを測り、両端部は反対方向に斜行する。孔径は上が0.4cm、下は0.1cmを測り、片割で直線的である。下の孔口は若干の凹みをもち周囲はやや荒れている。胴張はよく稜線も明瞭に残る。

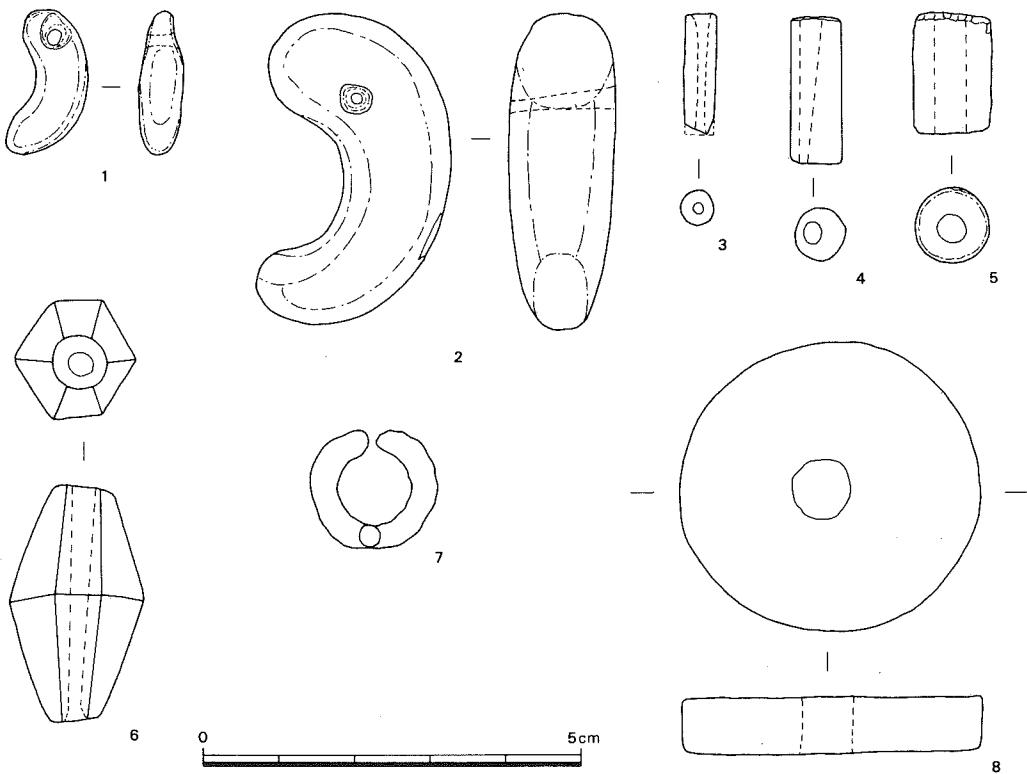
銀環（第22図 7）

第10号遺構出土。径約1.7cm、断面0.4cmのほぼ正円形をなす。銀張りは残らず、一部に緑青が見られる。

紡錘車（第22図 8）

第7号遺構出土。砂岩製で円板形を呈する完形品である。径3.9cm、厚さ0.8cm、孔径0.9cmを測り、重さ22g。全体的にきれいに磨かれている。

紡錘車が箱式石棺から出土する例は、対馬における特徴と見られ、本資料の数値も平均値を示す。材質は砂岩の他に頁岩が多いようである。  
(安楽)



第22図 コフノ採出土玉類・銀環・紡錘車実測図

No.	出土区	径	厚さ	孔径	材質	色彩	No.	出土区	径	厚さ	孔径	材質	色彩
1	A-1号	5.3	4.8	1.0	ガラス	濃紺	44	A-7号	5.0	3.2	1.8	ガラス	うす青
2	"	5.0	2.6	2.1	"	"	45	"	4.5	4.7	1.8	"	"
3	"	4.3	4.2	2.0	"	"	46	"	4.8	4.3	1.9	"	"
4	"	3.6	2.4	1.5	"	"	47	"	4.2	3.0	1.8	"	"
5	"	4.1	2.2	1.8	"	青	48	"	4.2	3.4	1.5	"	"
6	"	4.2	3.0	1.1	"	うす緑	49	A-10号	4.7	3.1	1.9	"	青
7	"	4.1	2.4	1.8	"	"	50	"	4.5	1.7	1.2	"	うす青
8	"	2.8	2.4	0.8	"	"	51	"	4.4	2.8	1.5	"	青
9	"	3.0	2.1	0.8	"	青	52	"	3.9	2.5	1.5	"	うす青
10	"	3.3	3.1	0.9	"	うす緑	53	A-7号	3.6	1.8	1.1	"	濃紺
11	"	4.8	2.5	1.5	滑石	黄褐色	54	"	3.5	3.0	1.0	"	青
12	"	4.8	3.1	1.3	"	灰色	55	"	3.7	2.1	1.2	滑石	灰色
13	"	4.8	3.1	2.0	"	"	56	"	5.8	4.9	1.5	瑪瑙	橙
14	"	4.4	2.0	1.5	"	"	57	A-11号	5.6	3.5	1.8	ガラス	青
15	"	4.4	2.0	1.5	"	"	58	"	5.2	3.3	1.2	"	濃紺
16	"	4.6	3.3	2.1	"	"	59	"	4.3	3.2	1.5	"	うす青
17	"	4.7	3.2	1.6	"	"	60	"	3.0	3.5	1.2	"	"
18	"	4.8	2.5	2.0	"	"	61	"	3.6	1.6	1.0	"	うす緑
19	"	4.7	2.6	1.8	ガラス	濃紺	62	"	3.8	4.6	1.7	"	うす青
20	"	4.6	2.7	2.0	"	うす青	63	"	3.6	2.2	1.0	"	"
21	"	4.3	3.4	1.5	"	"	64	"	3.6	2.0	1.0	"	うす緑
22	"	3.0	2.4	1.8	"	"	65	"	2.8	1.3	0.8	"	"
23	"	2.6	1.8	0.8	"	"	66	"	2.7	1.8	0.8	"	うす青
24	"	2.5	2.0	0.8	"	"	67	"	2.8	1.6	1.0	"	"
25	"	2.5	1.5	0.8	"	"	68	"	3.1	1.9	1.0	"	青
26	"	2.5	1.8	0.7	"	"	69	B-2号	5.4	4.3	0.8	"	濃紺
27	"	3.0	1.8	0.8	"	"	70	"	5.2	4.8	2.0	"	"
28	"	5.0	2.5	1.8	滑石	灰色	71	"	5.0	3.0	2.0	"	"
29	"	4.4	2.2	1.2	"	"	72	"	5.3	3.0	1.6	"	"
30	"	4.3	2.4	2.0	"	"	73	"	6.5	6.3	1.2	"	"
31	"	4.3	1.8	1.9	"	"	74	"	5.0	3.3	2.0	"	"
32	A-6号	2.8	2.2	1.0	ガラス	うす青	75	"	4.7	3.9	1.0	"	"
33	A-7号	6.0	4.2	3.0	"	うす青	76	"	4.4	3.4	1.0	"	"
34	"	6.0	4.4	2.0	"	"	77	"	3.2	2.8	1.0	"	"
35	"	5.5	3.6	2.2	"	"	78	"	3.2	2.4	1.0	"	"
36	"	5.1	3.9	1.5	"	青	79	"	6.0	4.5	2.5	"	うす青
37	"	5.8	4.3	1.8	"	"	80	"	6.0	3.3	3.0	"	"
38	"	5.0	3.4	2.0	"	うす青	81	"	6.8	2.9	2.0	"	"
39	"	5.0	4.0	1.8	"	青	82	"	5.3	2.5	2.8	"	"
40	"	5.2	3.6	1.5	"	うす青	83	"	5.5	3.8	2.0	"	"
41	"	4.4	5.3	1.3	"	"	84	"	5.2	3.4	2.0	"	"
42	"	5.0	2.6	1.2	"	"	85	"	5.5	4.5	2.2	"	"
43	"	4.9	2.8	1.5	"	"	86	"	5.2	4.0	2.0	"	濃紺 半分欠失

第12表 コフノ隣遺跡出土小玉計測表 (単位はmm)

——付——

津和浜出土の広形銅矛 (第23図)

津和川にかかる白妙橋を富ヶ浦の方に渡り、コフノ採遺跡の位置する丘陵裾部の海側で出土したものといわれている。発見の経緯について、詳しくは伝えられておらず、また、出土時の状況についても判然としていない。この場所については、永留久恵氏が、「対馬古跡探訪」で、「弥生式時代の後期に、津和原に村落があったとすれば、ここは銅矛を祀った遺跡としてよい場所である」と述べられている。<sup>(註1)</sup>確かに津和川流域の平地をその奥にひかえた浜であり、時代的には降るが、コフノ採遺跡の存在をも考えれば納得はできよう。

この銅矛は広形に分類されるものである。鋒部が最も狭くなる付近から先の部分を欠いていて、現存長51.1cmである。一部に黒灰色の錆が付着しているものの、全体的には黒褐色を呈し、良好な状況で残っている。関部に近い場所に、朱かと思われる色の付いた部分もある。

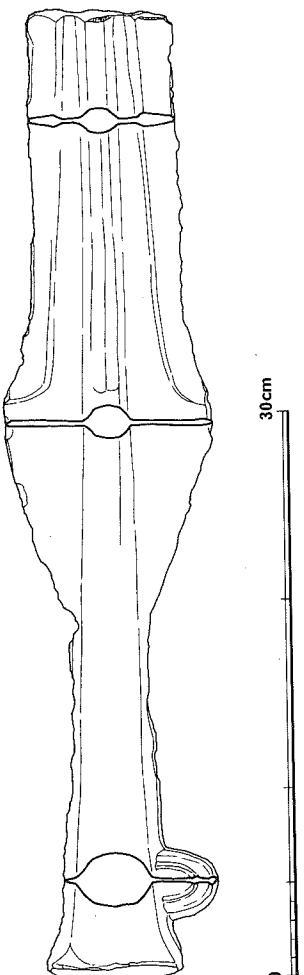
この矛の先端部は、人為的に折り曲げられて分断されたものと考えられ、現存するものの先端中央部は、本来の姿より 1.7 cmほど反っている。この反りは、先端部から 7 cmほどの間に残っている。さらに折り切ったあとを、鑓状のもので磨いたような痕跡がある。刃部・鎬部を部分的に磨いているが、明瞭には研ぎ出されていない。

袋部の長さは18.9cmあり、基部から 4.5cmのところに、幅1.5 mmほどの節帯が刻まれていて、ここよりやや基部側に耳が付いている。耳の孔は貫通していない。袋部につまつた真土は、先の尖ったものでつつかれて、基部から 2 cmほどくぼんでいる。

それぞれの法量は以下のとおりである。まず関部の幅は11.0 cm、厚さ 1.8cm。袋部の最大幅は 7.2cm、最小幅は 4.0cm。耳部の長さは 2.7cmで、幅は 3.8cmを計り、耳の外側での厚さは 0.5cmある。耳中央部での袋部の厚さは 2.8cmである。重量は、約1920g ある。

この銅矛は、上対馬町指定文化財第6号となっている。

(藤田)



第23図 津和浜出土銅 実測図

註1 「対馬古跡探訪」 ジャパン・パブリッシャーズ

1977年

### III まとめ

#### (1) 遺構について

今回の調査は、史跡公園化計画に伴う事前の調査であり、遺跡の性格とその年代についての基礎的な資料を得ることを目的とした。そのため、遺構の調査は最小限にとどめて旧状を保つことと、環境の保全に注意を払った。

対馬においては、本遺跡が立地するような、海に向いて伸びる丘陵上に営まれた墳墓が多く、このような立地の仕方は通有のもので特に記すようなことはない。たださえ狭い可耕地を避けるとともに、海に生活の場を求めた人々の奥津城としてふさわしい場所、という意識でもあったものであろうか。

遺構の調査の詳しい内容については、先述したとおりであるが、A地点第1号遺構は、箱式石棺であり、破壊をひどく受けていた。出土遺物としては、ガラス製小玉、滑石製小玉、碧玉製管玉があった。若干の須恵器片が出土していて、古式のものも1点あるが、6世紀中葉のものと思われるものが2点あった。第10号・第11号遺構の在り方は、対馬においては過去には知られていないようで、大形の箱式石棺と石室系のものの組み合わせでできている。石棺の側石を石室の片方の側壁として利用していることからすれば、極めて接近した時期を思わせる。紀元500年ごろを中心とする時期のものとして大過ないのではなかろうか。この遺構の周辺に散在したであろう遺構からは、5世紀初頭か前半代まで遡るものと思われる朝鮮半島の遺物が多数出土し、岬の先端であることがあわせて、本遺跡内においても特殊な場所であったような感じを受ける。B地点は、立地上の制約もあってか、基數は少なく2基を確認したにとどまる。うち1基は、石室状に構築された遺構であったが、後日を期して埋め戻した。この周辺からも半島系の遺物が出土している。第2号遺構は石棺で、玉類の副葬品とともに6世紀中葉から後半の須恵器も出土している。

以上のような遺構の状況から推して、この岬には2群に分かれた墳墓が営まれ、埋葬施設としては箱式石棺と石室系のものがあったろうことが知られる。

#### (2) 遺物について

本遺跡からの出土遺物のそれぞれについては、これも先述した。須恵器・土師器のほか朝鮮半島の土器が各種・各時期にわたり出土しているので、それについて若干まとめておきたい。

半島系の遺物は時期別により数的に変化が認められるようである。まず、第Ⅰ期としては、第17図1～4の蓋、6・7の高杯、第18図6・7の聴、10の脚部、第19図1の把手付有台短頸壺、2の短頸壺などがあり、5世紀前半代の伽倻の製品として位置付けられよう。

次に、第Ⅱ期としては5世紀後半代のもので、第18図1～5の大形器台とその部分が考えられる。この第Ⅰ期と第Ⅱ期の間か、あるいは第Ⅱ期に入るるものとして第17図5の壺、第19図5の百濟系の壺がくるようである。第Ⅱ期でも終りの方のものとして第17図の9・10・17・18、第19図の3などが当てられるのではなかろうか。

第Ⅲ期としては、古新羅のものがあげられ、6世紀中葉から後半にかけての時期が考えられる。第17図8の高壺、第18図11・12・13などが考えられ、6世紀末から7世紀前半にかけてを第Ⅳ期とすれば、第19図7～10があげられよう。

以上のように分けて見ると、時期によって遺物の量に多少を生じており、数的に多いのは、第Ⅰ期とした5世紀前半までのものであることが知られ、第Ⅱ期になると少なくなる傾向がある。さらに、第Ⅲ期の、6世紀中葉から後半にかけて、新羅系統の遺物が増えてくるような感じを受ける。このような状況から推測すると、朝鮮半島での状勢とも、あながち無関係というわけにもいかないようで、その結果の一端を示しているようにも思われる。すなわち、第Ⅰ期とした5世紀前半までではまだ伽倻の独立が保たれており、いわゆる「任那」を通じての文物の流入が盛んであったものであろう。しかし5世紀後半になると、新羅の勢力が増大し、伽倻諸国は圧迫され、6世紀前半から中頃にかけて滅亡するに至っている。第Ⅲ期とした、6世紀中頃から後半にかけての遺物として新羅系の土器が出現してくるのも、半島での新羅勢力の増大の結果を示すものであり、この時期に「任那」日本府の滅亡が考えられている。第Ⅳ期の6世紀末から7世紀前半は、新羅の勢力がさらに拡大され、統一に向う段階である。さらに、この時期以降は須恵器のみとなり、半島系の遺物がなくなるのは、7世紀中頃(663年)、白村江で唐・新羅の連合軍と戦って敗れた後の、国際的緊張の結果を示しているものと言えるのではなかろうか。

以上、ごく簡略に、遺物の時期と系統、その背景について述べてみた。朝鮮半島を指呼の間に望み得る上対馬の地であれば、相互の文物のみならず人も含めて、現在の状況からは考えられぬほどの容易さで(交通手段の不便さは別にしても)の往来が考えられてしかるべきかも知れない。

本報告で述べた遺物の年代については、類似する遺物についての報告書に拠り、あるいは教示を受けた年代観を使用した。筆者の現在の力量では、半島の遺物の編年的位置付けはもちろん、遺物そのものについても不明な点が多く、言語の障害とも合わせて、問題をこれ以上に進めて論ずることのできないもどかしさを覚える状況である。ただ、現在の段階での年代観については、日韓双方に若干の相異があるようである。<sup>(註2)</sup>筆者は、そのどちらについても、賛同あるいは批評できる力量もなく、そのまま述べてあるように表したつもりであり、もし伝えるところに間違いがあれば、筆者の責任である。今後の課題として、相互の年代観の差、あるいは幅を縮める研究が痛感される。

(藤田)

註1・2 「蔚州華山里古墳群」 釜山大学校博物館 1983年 IV. 考察

No.	調査年	遺跡名	調査機関及び調査者	内容	文献番号
1	1809	島内全域	平山東山	島内の地誌などの調査	1
2	1877	島内の神社	対馬島庁	神社の祭祀や宝物などの調査	2
3	1915	佐護 雜知周辺	鳥居龍藏・浦田政雄	志多留貝塚の発見・古墳の調査など	
4	1921	佐護 クビル遺跡	"	銅矛・銅鏡が箱式石棺より出土	55
5	1922	対馬島内各地	後藤守一		4
6	1927	峰町ガヤノキ遺跡	中山平次郎・藤田亮策	弥生文化と青銅器の関係	39
7	1950	島内全域	東亜考古学会	縄文～歴史時代に至る	17
8	1950	上対馬町朝日山遺跡	"	古墳時代石棺群	"
9	1950	上対馬町泉石棺	"	石棺・石劍・甕棺	"
10	1950	上県町志多留貝塚・大將軍山古墳等	日本考古学会	縄文後期貝塚・半島系土器の副葬	"
11	1951	美津島・雑知周辺	"	高浜ヒナタ遺跡など・小形彷製鏡など副葬	"
12	1952	雑知周辺の弥生遺跡	対馬遺跡調査会	ナカミチノダン遺跡・黒曜石散布地など	20
13	1953	志多留貝塚第3次調査	"	調査中サカドウ遺跡出土遺物に注目	"
14	1954	峰町吉田遺跡他		縄文時代終末～弥生時代	22
15	1965	豊玉町ソウダイ	報告者 永留久恵	馬鐸巴形銅器銅鉗等	32
16	1967	豊玉町シゲノダン	"	遺構判然としないが国産及び舶載各種青銅器	"
17	1968	浅茅湾周辺の遺跡*	長崎県教育委員会	約60基の箱式石棺をはじめとする多くの遺跡	"
18	1970	"	"	"	"
19	1969	美津島町寺越洞穴	坂田邦洋	弥生後期の洞穴	37
20	1970	峰町小姓島遺跡	永留久恵・阿比留義博	弥生後期箱式石棺墓	35
21	1971	上対馬町塔の首遺跡	長崎県教育委員会	弥生後期箱式石棺広形銅鉢副葬	32
22	1972	上県町志多留貝塚	長崎大学・別府大学	縄文後多量の土器・石器・骨角器・岩偶弥生前期	52
23	1973	豊玉町西加藤遺跡	長崎大学・別府大学	縄文早期～後期 櫛目文土器	47
24	1973	豊玉町住吉平貝塚	長崎県教委・豊玉町教委	縄文晚期終末～弥生前期の遺物	49
25	1974	峰町恵比須山遺跡	峰町教育委員会	弥生中期～古墳中期に至る12基の箱式石棺	44
26	1974	豊玉町ヌカシ遺跡	豊玉町教委・坂田邦洋	縄文後期・南福寺式・櫛目文土器・炉址	61
27	1975	峰町吉田貝塚	峰町教育委員会	縄文中期～弥生期の遺物	49
28	1975	峰町トウトゴ山墳墓群	"	弥生後期から古墳後期までの石棺群	"
29	1975	峰町木坂石棺群	峰町教育委員会	弥生後期石棺7基、多量の青銅器	52
30	1975	上対馬町経隈墳墓	上対馬町教育委員会	弥生後期の墳丘上の中央に3基の石棺	"
31	1976	上県町越高遺跡	坂田邦洋	縄文前期、朝鮮系隆起文土器	59
32	1976	厳原町金石城	長崎県教育委員会	石垣、2条の側溝など	53
33	1976	厳原町オテカタ遺跡	九州大学	弥生中～後期の生活址	54
34	1977	美津島町塚塔崎墓地群	美津島町教育委員会	34基の中世墳墓群	58
35	1979	美津島町洲藻遺跡	"	堂の原遺跡と中道壇遺跡の調査、弥生～古墳	65
36	1979	豊玉町ハロウ遺跡	豊玉町教育委員会	弥生後期～古墳銅矛・小形彷製鏡	66
37	1982	豊玉町イノ採遺跡	"	弥生後期石棺墓	
38	1982	厳原町金石城	厳原町教育委員会	金石城に伴う石垣など	
39	1983	上対馬町コフノ採遺跡	上対馬町教育委員会	古墳時代埋葬址、本報告分	

\*調査された遺跡は美津島町19箇所、豊玉町17箇所、峰町10箇所の合計36箇所

第13表 対馬における発掘調査年表

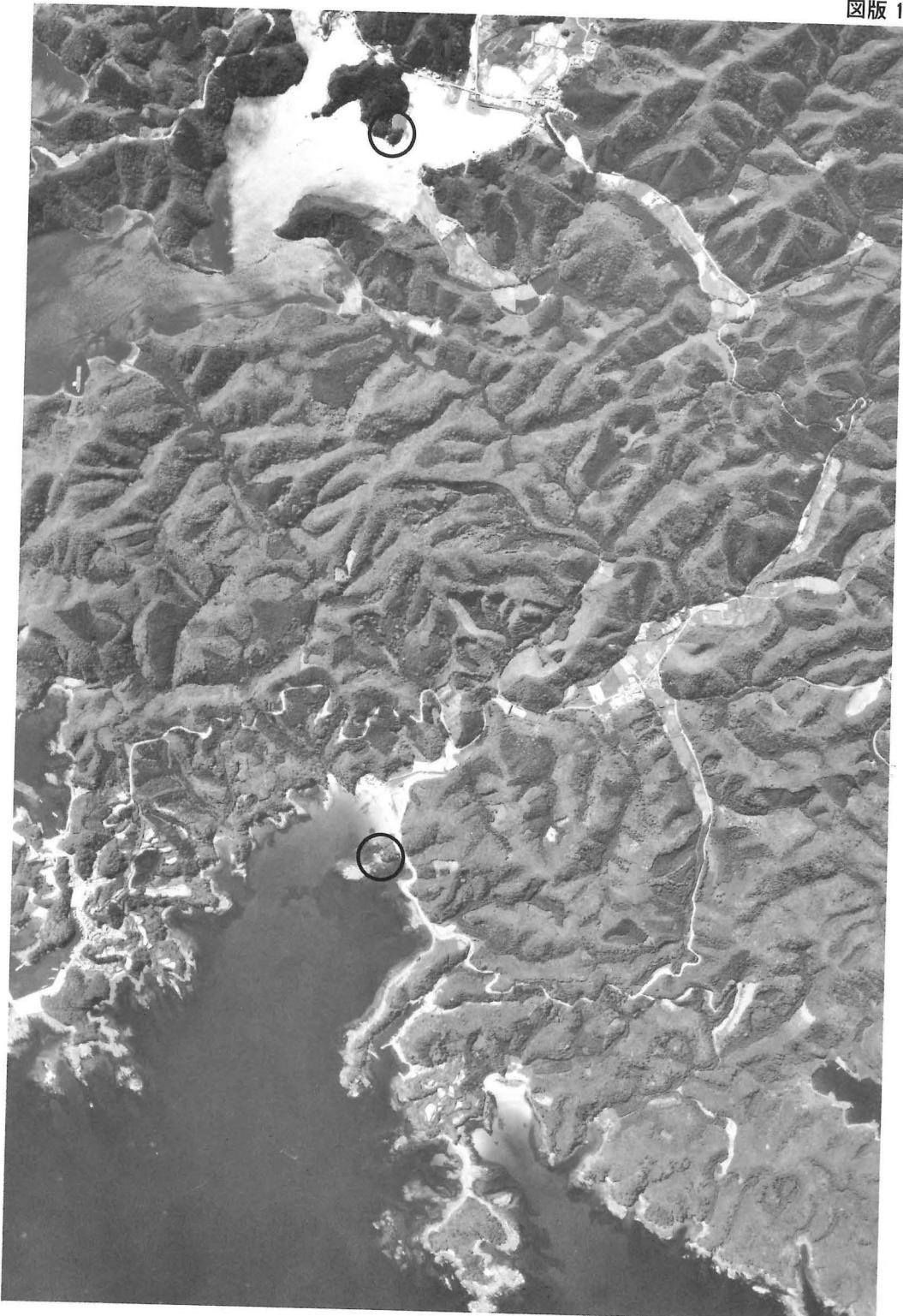
対馬における考古学関係文献目録

No.	報告年	報告者	報告文	報告書名	報告文に同じ	報告書名	報告文に同じ	備考
1	1899(文化6)	平山東山	津島紀事					銅矛をはじめとする考古資料の記載あり
2	1877(明治10)		明治十年神社調査					
3	1922(大正11)	後藤守一	対馬國上東郡佐須名村発掘品	考古学雑誌(二)	考古学雑誌 12-2			
4	1923	"	対馬寶貝錄	銅劍・鋸鉢に就て	考古学雑誌 13-3	史林(8-1)~(9-4)	対馬の出土品	
5	1926	梅原末治	銅劍・鋸鉢の研究	長崎県史跡名勝天然記念物調査報告(1)	考古学雑誌 6-3~13-7	考古学雑誌 6-3~13-7	報告文に同じ	
6	"	高橋健自	長崎県調査委員会	対馬島誌	"	"	志岐・対馬の古墳について	
7	"		対馬教育会	対馬の先史時代人と黒曜石	長崎談叢 33	考古学雑誌 36-3	考古学雑誌 36-3	名前がち出るなぞ後岡一郎著明
8	1928		木島甚久	対馬・対馬の海とその護国精神	考古学雑誌 36-3	駿台史学 1	駿台史学 1	賀谷洞穴について
9	1943	木島甚久	中山平次郎	銅劍・鉄劍・石劍の供伴を示せる組合わせ式石棺	考古学雑誌 36-3	人文 1	ミューザム 10月号	
10	1950	中山平次郎	駒井和愛	八学会連合対馬共同調査	考古学雑誌 36-3	人文 1	東亞考古学会	
11	"	杉原莊介	対馬の考古学的調査	対馬の先史時代人と黒曜石	人文 1	人文 1	九学会編	
12	1951	渡辺仁	渡辺仁・駒井和愛	須恵器	対馬史の黎明	対馬・対馬の古墳、志多留所在組合式石棺の調査	日本考古学年報	
13	"	増田精一	三木文雄	対馬の古墳	対馬から覗た対馬	対馬の古墳文化の生成所収	日本考古学年報	
14	"	増田精一	渡辺仁・駒井和愛	須恵器	長崎県上東郡ディショウゴウ古墳	長崎県文化財包蔵地一覧	長崎県文化財調査報告書第1集	
15	"	三木文雄	水野清一・櫻口隆康・岡崎敬	対馬の古墳	長崎県難知町付近弥生式遺跡	対馬における考古学的遺跡一覧表	九州考古学 18	九州考古学 18
16	1952	水野清一	駒井和愛	対馬の古墳	大将軍山古墳出土品	長崎県対馬調査報告(1)(2)	日本考古学年報 11	日本考古学年報 11
17	1953	駒井和愛	三木文雄	対馬の古墳	長崎県吉田遺跡	埋蔵文化財要覧(二)	増田精一	埋蔵文化財要覧(二)
18	1954	三木文雄	増田精一	対馬の古墳	長崎県遺跡地名表	日本農耕文化の生成所収	新対馬島誌 49-1	新対馬島誌 49-1
19	1955	増田精一	文化財保護委員会	対馬の古墳	長崎県文化財包蔵地一覧	長崎県文化財調査報告書第1集	"	"
20	1957	増田精一	文化財保護委員会	対馬の古墳	対馬における考古学的遺跡一覧表	九州考古学 18	新対馬島誌	新対馬島誌
21	1959	増田精一・曾野寿彦	長崎県教育委員会	対馬の古墳	長崎県対馬調査報告(1)(2)	考古学雑誌 49-1	新対馬島誌	新対馬島誌
22	1961	増田精一・曾野寿彦	永留久恵	対馬の歴史	対馬の歴史 第一先史時代—古代	報告文に同じ	新対馬島誌	新対馬島誌
23	1962	長崎県教育委員会	永留久恵	佐賀貝塚	"	報告文に同じ	新対馬島誌	新対馬島誌
24	1963	永留久恵	長崎県教育委員会	対馬の歴史	対馬の歴史 第一先史時代—古代	古代文化 17-3	新対馬島誌	新対馬島誌
25	"	長崎県教育委員会	永留久恵	佐賀貝塚	"	九州考古学 32	新対馬島誌	新対馬島誌
26	"	長崎県教育委員会	永留久恵	対馬の歴史	対馬の歴史 第一先史時代—古代	長崎県文化財調査報告書第8集	新対馬島誌	新対馬島誌
27	1964	永留久恵	長崎県教育委員会	佐賀貝塚	"	古代の日本 3	新対馬島誌	新対馬島誌
28	"	長崎県教育委員会	永留久恵	対馬の歴史	対馬の歴史 第一先史時代—古代	鳥居龍藏博士の思い出	新対馬島誌	新対馬島誌
29	1965	長崎県教育委員会	永留久恵	佐賀貝塚	"	対馬風土記 6	新対馬島誌	新対馬島誌
30	1966	長崎県教育委員会	平野博之	対馬・若城ト部	「対馬・若城ト部」について	考古学雑誌 58-3	新対馬島誌	新対馬島誌
31	1967	長崎県教育委員会	永留久恵・小田富士雄	対馬豊玉村発見の馬蹄凹形銅器調査報告	「魏志」倭人伝の社会	九州考古学 45	新対馬島誌	新対馬島誌
32	1969	長崎県教育委員会	岡崎敬	対馬一豊玉村佐保シノダノ唐崎の青銅器を出土した遺跡の調査報告	寺越洞穴調査報告	高浜ヒナタの箱式石棺墓など	新対馬島誌	新対馬島誌
33	1970	長崎県教育委員会	浦田政雄	考古学者として最初に対馬を訪れた全島的に調査された鳥居龍藏先生	平島・→対馬→北九州	対馬風土記 8	新対馬島誌	新対馬島誌
34	"	長崎県教育委員会	浦田政雄	峰村小姓島発掘調査	対馬ガヤノキB地点遺物の再発見	史学論叢 6	新対馬島誌	新対馬島誌
35	1971	長崎県教育委員会	永留久恵・阿比留嘉博	弥生時代小形方製鏡について				
36	1972	長崎県教育委員会	高倉洋彰	寺越洞穴調査報告				
37	"	長崎県教育委員会	坂田邦洋	平島				
38	"	長崎県教育委員会	高倉洋彰	対馬ガヤノキB地点遺物の再発見				
39	1973	小田富士雄						

No.	報告年	報告者	文告名	報告書名	備考
40	1973	小田富士雄 上田正昭・岡崎・金達寿他	対馬の朝鮮系遺物 塔の首石棺群の調査をめぐってー 対馬と朝鮮をめぐってー	日本の朝鮮文化 20 日本の中の朝鮮文化 20	
41	"	対馬の自然と文化を守る会	対馬の首石棺墓	対馬の自然と文化第1集 日本考古学年報 24	対談を収録 主要遺跡の紹介
42	"	永留久恵	塔の首石棺墓	長崎県文化財調査報告書第17集 報告文に同じ	坂田邦洋・永留史彦
43	"	峰村教育委員会	恵比須山遺跡発掘調査報告	長崎県文化財調査報告書第17集 報告文に同じ	坂田邦洋編
44	1974	峰村教育委員会	対馬 一伎茅窯とその周辺の考古学調査ー	対馬考古学 1-1 対馬風土記 第11号	菅野対馬考古学会
45	"	長崎県教育委員会	太田原遺跡発掘調査報告	長崎県文化財調査報告書第20集 報告文に同じ	坂田邦洋編
46	"	峰村教育委員会	対馬における縄文早期の土器について	長崎県文化財調査報告書第20集 報告文に同じ	坂田邦洋編
47	"	坂田邦洋	歴日文土器の新資料	長崎県文化財調査報告書第20集 報告文に同じ	日本古代文化叢書 九州大学考古学研究室編
48	1975	"	対馬の遺跡 (住吉平貝塚・トウトゴ山墳墓群・吉田貝塚)	"	繩文文化研究会
49	"	長崎県教育委員会	古代史の鍵対馬	"	
50	"	永留久恵	対馬・芭岐島の遺跡一覽	"	
51	"	倭人伝研究会	対馬の考古学 (木坂石棺群・経隈墳墓・志多留貝塚)	"	
52	1976	坂田邦洋	金石城跡緊急発掘調査報告書	長崎県文化財調査報告書第38集 日本考古学年報 28	
53	1977	長崎県教育委員会	オチカタ遺跡	慶祝高寿和先生六十三歳論文集 日本考古学年報28(1975年版)	
54	"	下條信行	糸馬クビ跡の再検討	"	
55	"	小田富士雄	金石城跡	"	
56	"	永留久恵	対馬古跡探訪	"	
57	"	美津島町教育委員会	塚塔跡遺跡 ー対馬美津島町小船越所の中世墳墓群ー	美津島町文化財調査報告書 報告文に同じ	塚塔跡遺跡発掘調査団編
58	"	坂田邦洋	韓国隆起土器の研究	"	
59	1978	坂田邦洋	対馬の美術展 (図録)	"	福岡県文化会館
60	"	豊玉町教育委員会	豊玉町の文化財	"	
61	"	美津島町教育委員会	美津島町誌	"	
62	"	美津島町	対馬の文化財 ー古代の遺産ー	"	
63	"	永留久恵	南北市縁考 ー弥生時代対馬船載朝鮮製首銅器の意味ー	史蹟第16輯 別大考古学研究報告第3冊	高倉洋彰・山崎純男
64	1979	下條信行	対馬越尾崎における縄文前期文化の研究	美津島町文化財調査報告書2 報告文に同じ	高倉洋彰
65	"	坂田邦洋	洲藻遺跡	考古学ジャーナル11 報告文に同じ	特集日韓文化交流の考古学観点 青銅の武器展図録
66	1980	美津島町教育委員会	対馬豊玉町ハロウ遺跡	同書II エーカ崎遺跡 報告文に同じ	坂田邦洋編
67	"	豊玉町教育委員会	石器時代の対馬	探訪 日本の古墳(西日本編) 日本考古学年報 21-22-23	
68	"	坂田邦洋	青銅の武器 ー日本金属文化の黎明ー	"	
69	"	九州歴史資料館	峰町東部沿岸地域埋文化財発掘調査報告	美津島町文化財調査報告書第4集 森吉次郎博士古稀記念考古学論集 三世紀の考古学 下巻	
70	"	峰町教育委員会	美津島島の自然と文化 ー美しい自然と史跡等文化財ー	報告文に同じ	
71	1981	美津島町	対馬毫崎の古墳	報告文に同じ	
72	"	横山巳貴子	小姓島遺跡	日本考古学年報 21-22-23	
73	"	永留久恵	矛と祭り ー対馬の銅矛遺跡を中心としてー	美津島町文化財調査報告書第4集 森吉次郎博士古稀記念考古学論集 三世紀の考古学 下巻	
74	1982	美津島町教育委員会	芭岐・対馬の歴史探訪	報告文に同じ	
75	"	永留久恵	対馬・芭岐の古墳	東アジア世界における日本古代史論座2 季刊考古学 第6号	特集別馬台國を考古学する
76	1983	武末純一	対馬の歴史探訪	"	
77	"	永留久恵	対馬・芭岐の古墳文化	"	
78	1984	小田富士雄	別馬台國の開拓・対馬	"	
79	"	安楽始	"	"	

図 版

図版 1



コフノ隣遺跡航空写真

○印 上 朝日山遺跡  
下 コフノ隣遺跡

図版 2



南西から望む

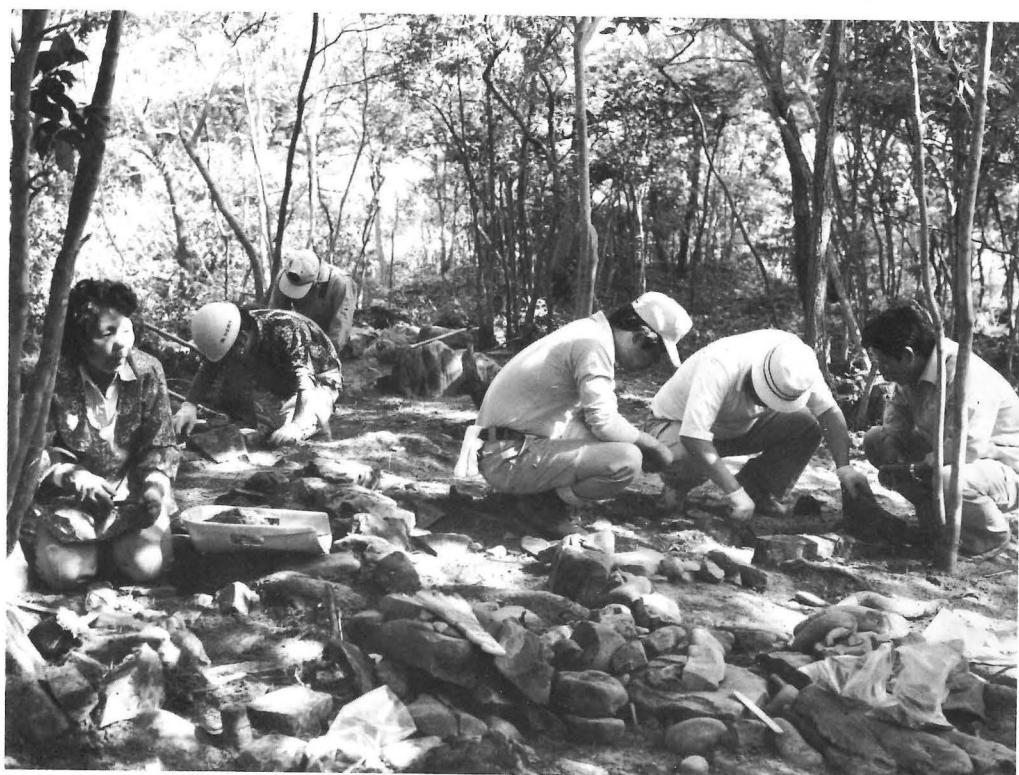


コフノ隣遺跡遠景  
北東から望む

図版 3



南東から望む

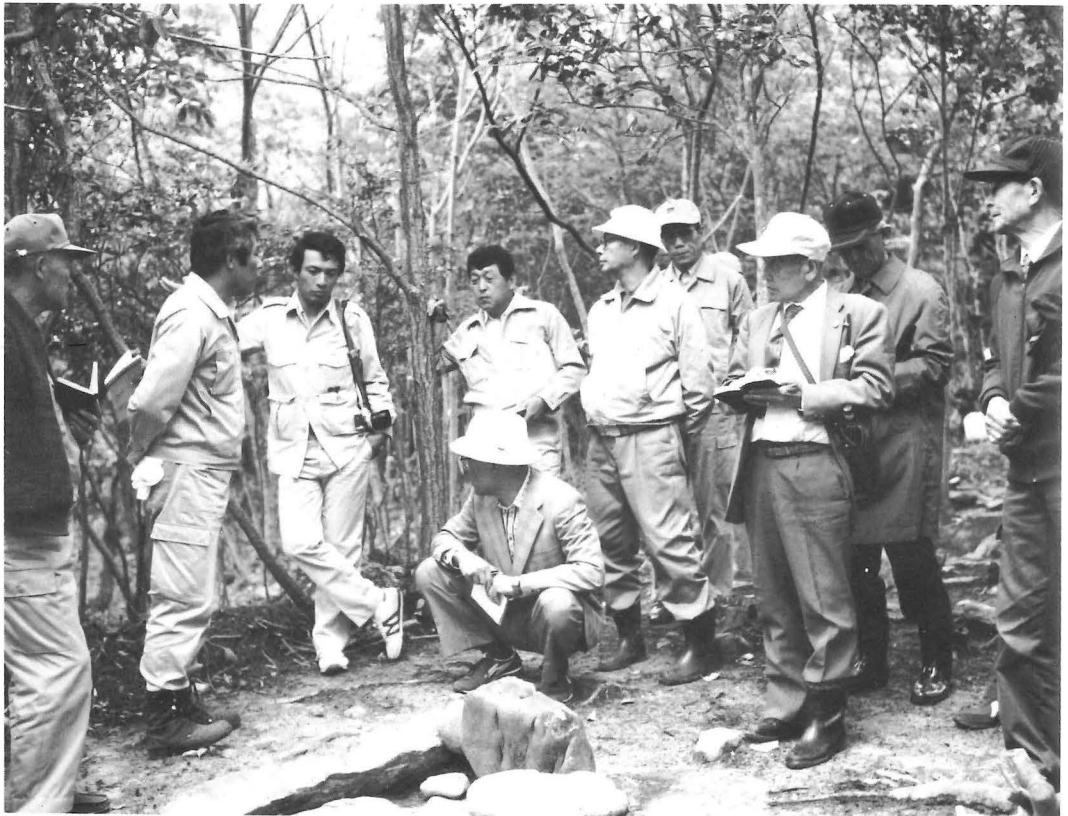


コフノ隊遺跡近景・調査風景

図版 4



調査前の状況



コフノ隣遺跡近景

現地説明会

図版 5



調査風景



壺の出土状況  
(第7号遺構)



無蓋高壺出土状況  
(第10号・第11号遺構)

遺物出土状況

図版 6

第1号遺構調査前の状況(南西から)



コフノ際遺跡遺構

第1号遺構調査後の状況(南西から)



図版 7



第2号遺構(中央)  
(西から)



第3号遺構(左)と第2号遺構(右上) (南から)  
コフノ隣遺跡遺構

図版 8



第3号遺構(南東から)



第4号遺構(東から)

コフノ隣遺跡遺構

図版 9



第5号遺構(西から)



第6号遺構(南から)

コフノ隣遺跡遺構

図版10



第7号遺構(北東から)



第8号遺構(南東から)



コフノ隣遺跡遺構

第9号遺構(北西から)

図版11



第10号・第11号遺構 調査前の状況(左 第10号・右 第11号遺構)



(南東から)

コフノ隣遺跡遺構

図版12



第10号遺構(左)・第11号遺構(右)



第10号遺構(奥)・第11号遺構(手前)  
コフノ隣遺跡遺構

図版13



第11号遺構

コフノ隕遺跡遺構



第10号遺構

図版14



B地点第1号遺構(南東から)



B地点第1号遺構(南西から)  
コフノ際遺跡遺構

図版15



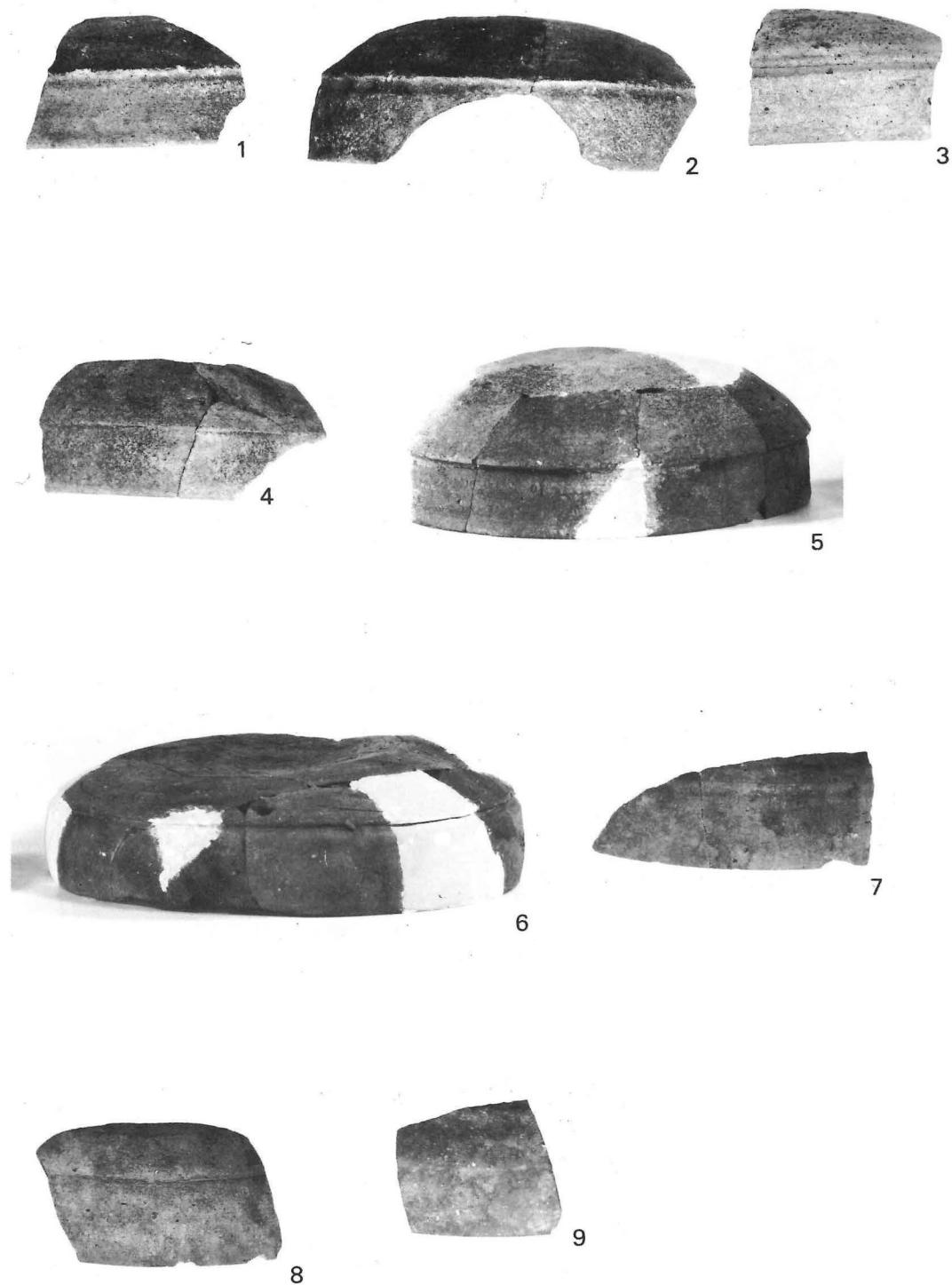
B 地点第 2 号遺構(南から)



B 地点第 2 号遺構(東から)

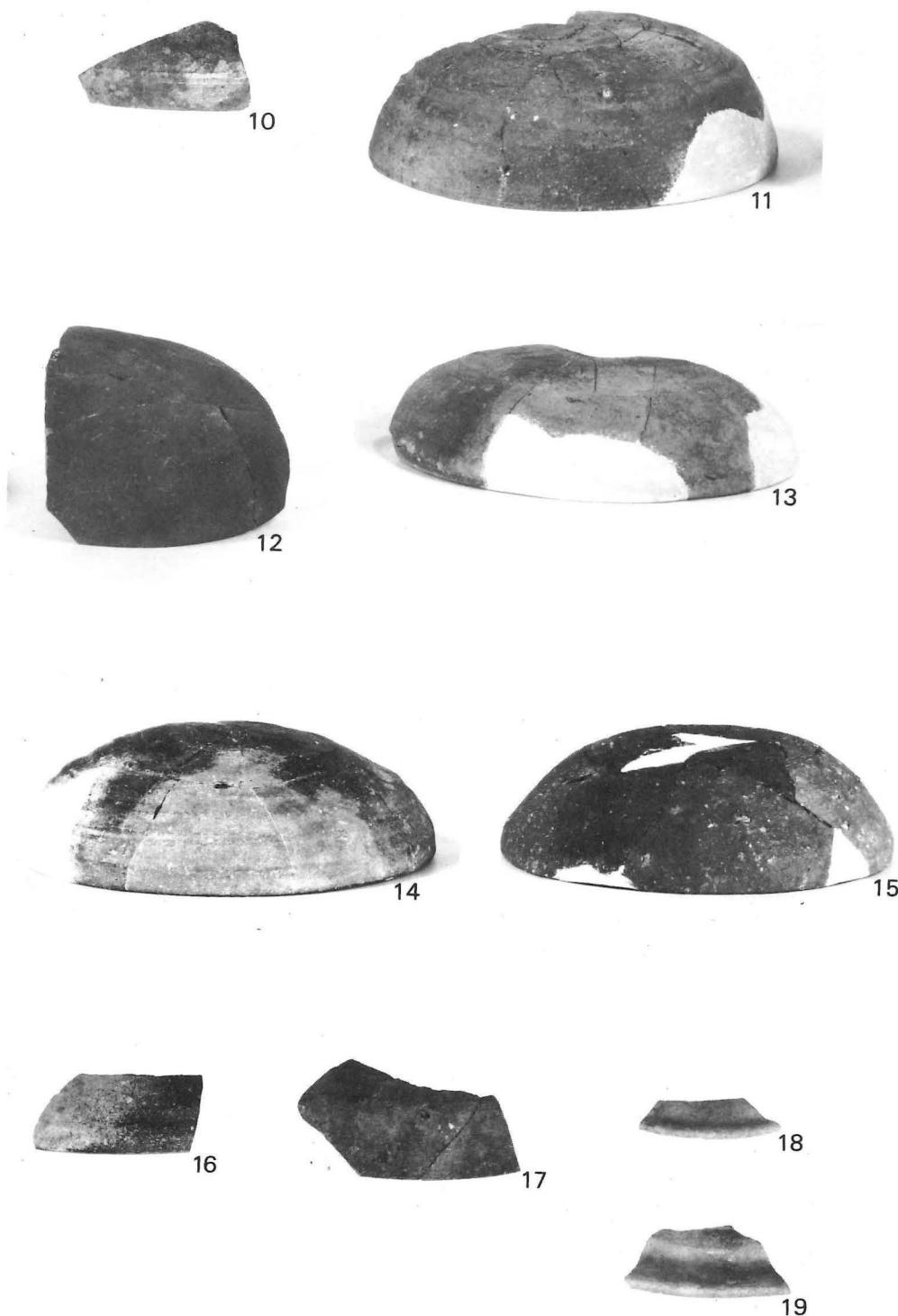
コフノ隣遺跡遺構

図版16



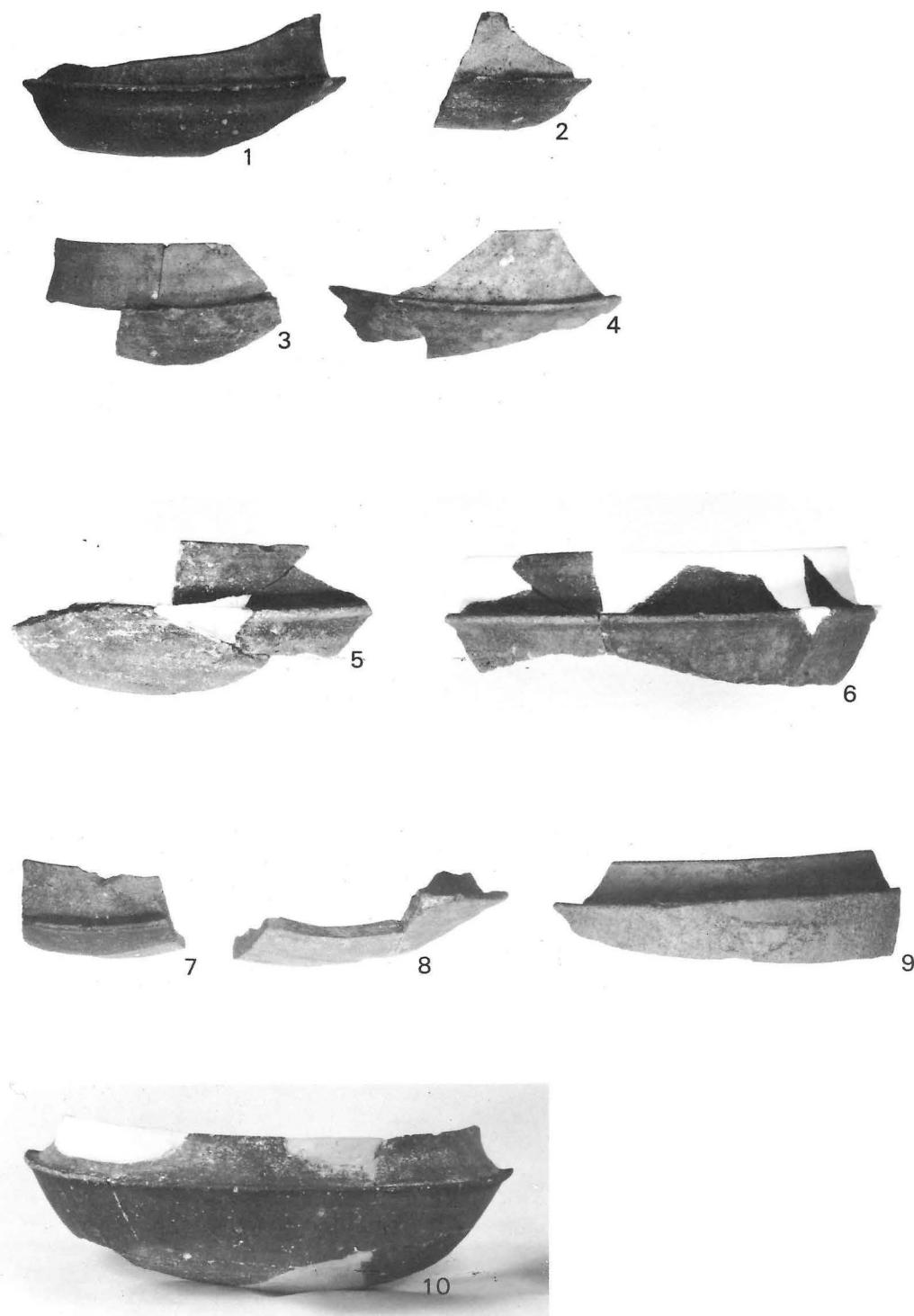
コフノ跡遺跡遺物(1) 土器

図版17



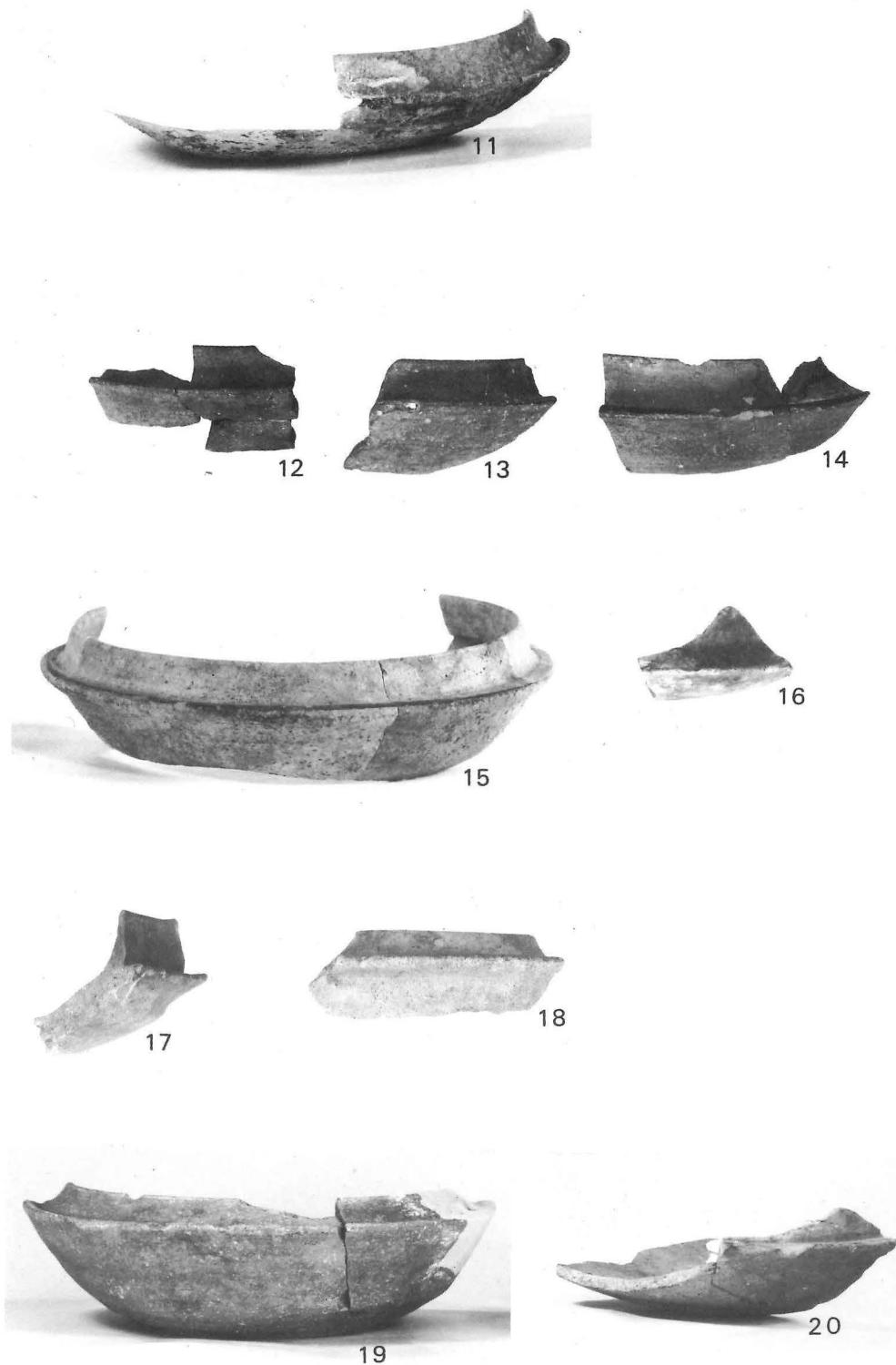
コフノ隣遺跡遺物(2) 土器

図版18



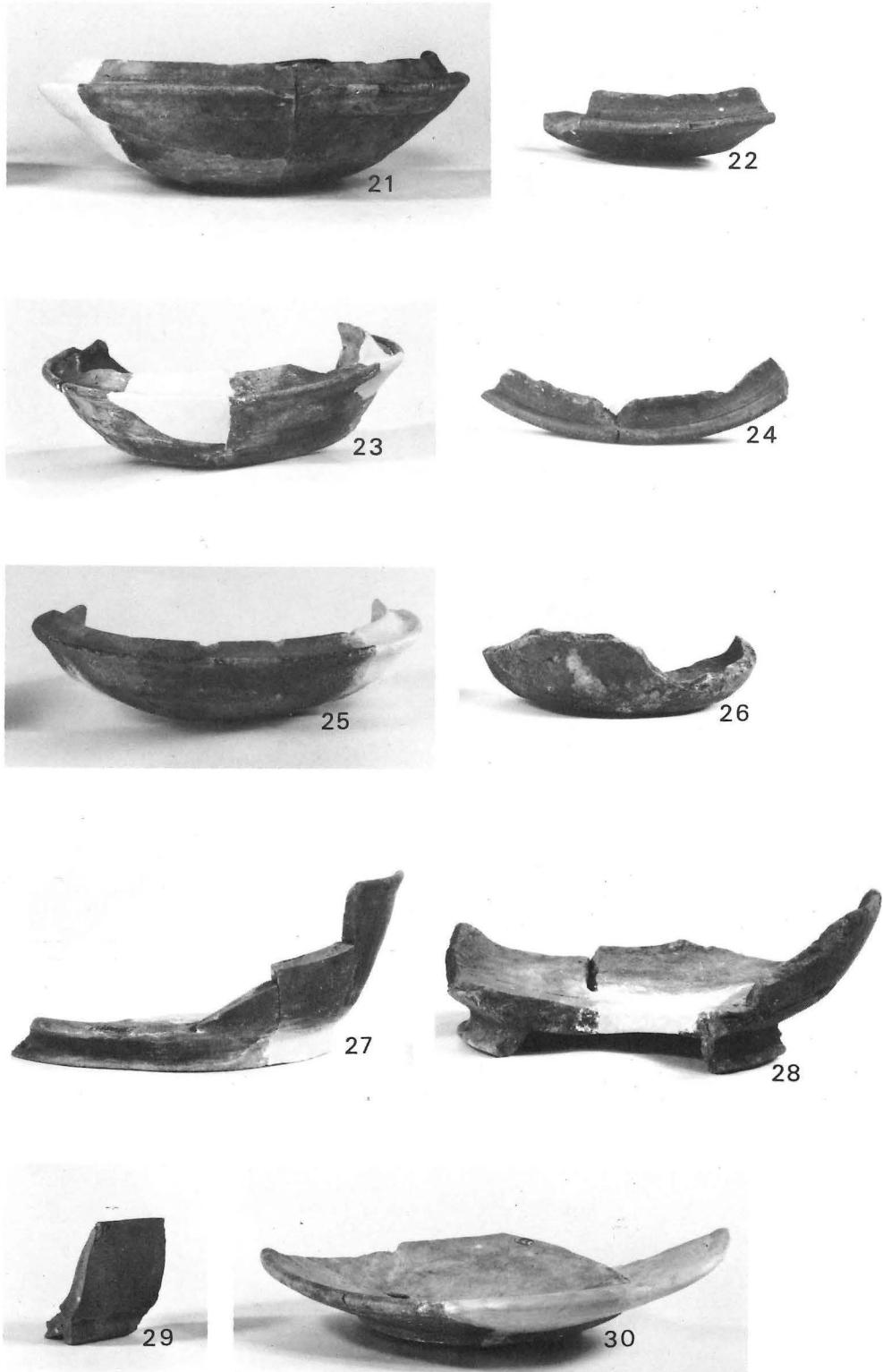
コフノ隣遺跡遺物(3) 土器

図版19



コフノ隣遺跡遺物(4) 土器

図版20



コフノ隣遺跡遺物(5) 土器

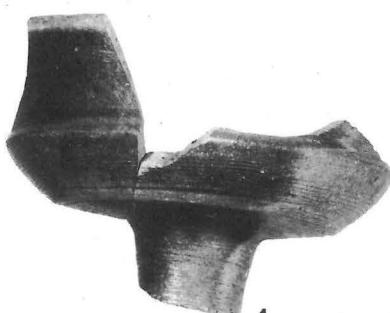
図版21



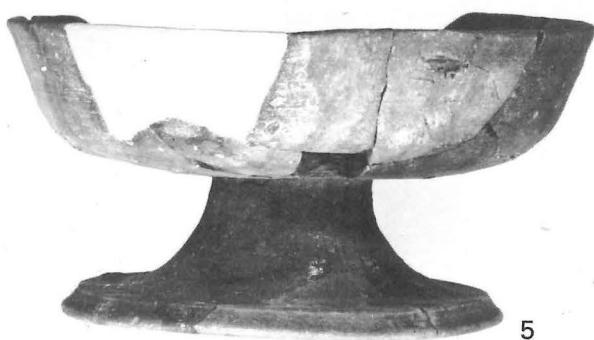
2



3



4



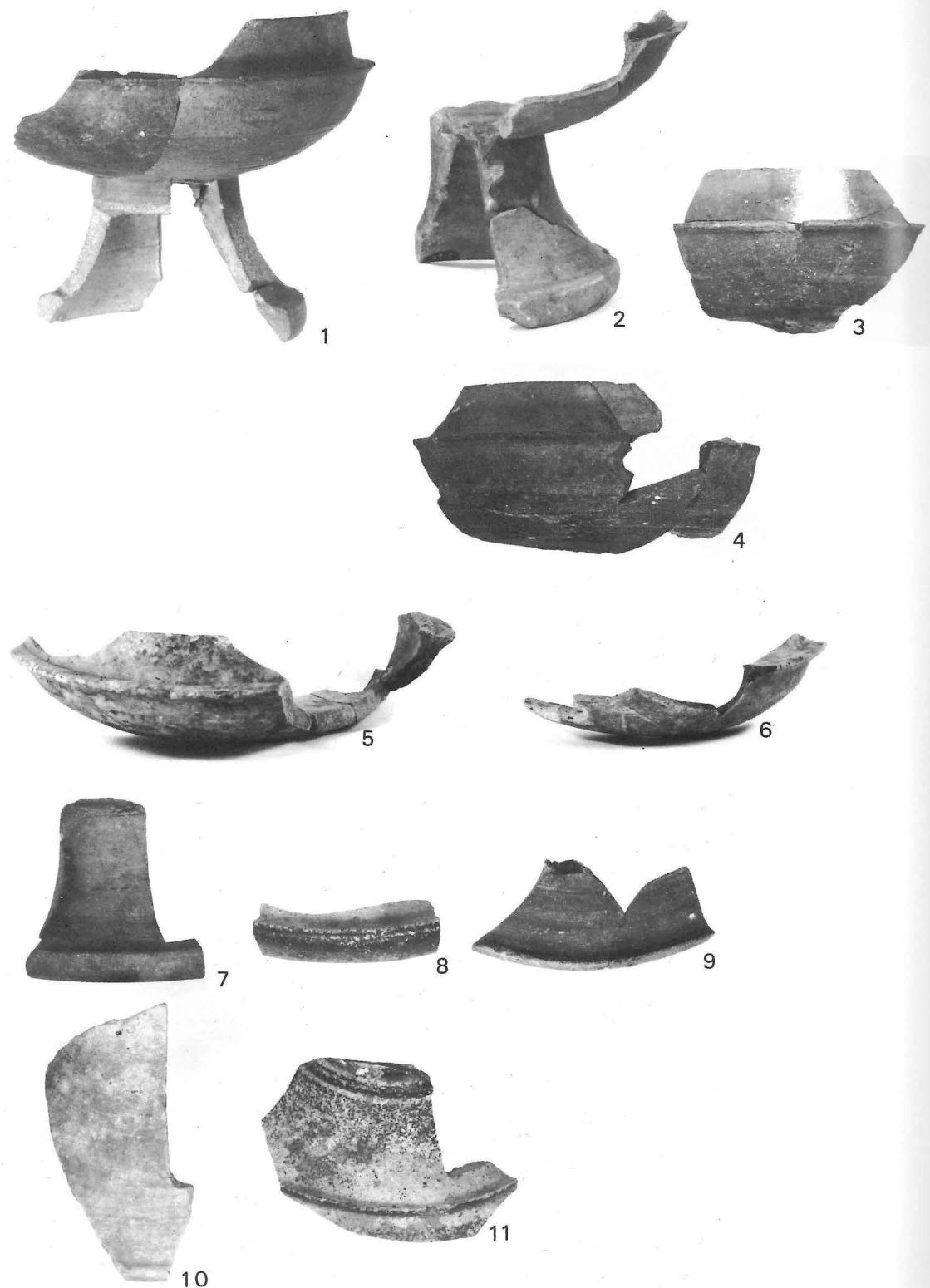
5



6

コフノ隣遺跡遺物(6) 土器

図版22



コフノ際遺跡遺物(7) 土器

図版 23



12



13



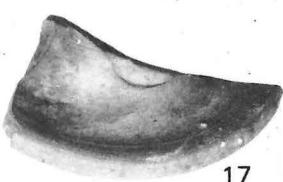
14



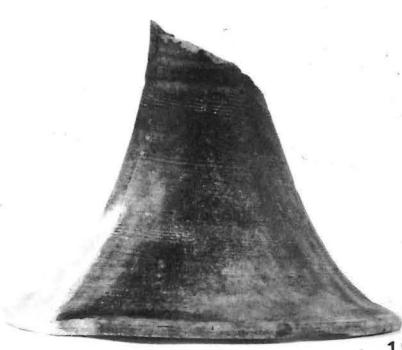
15



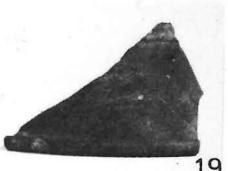
16



17



18

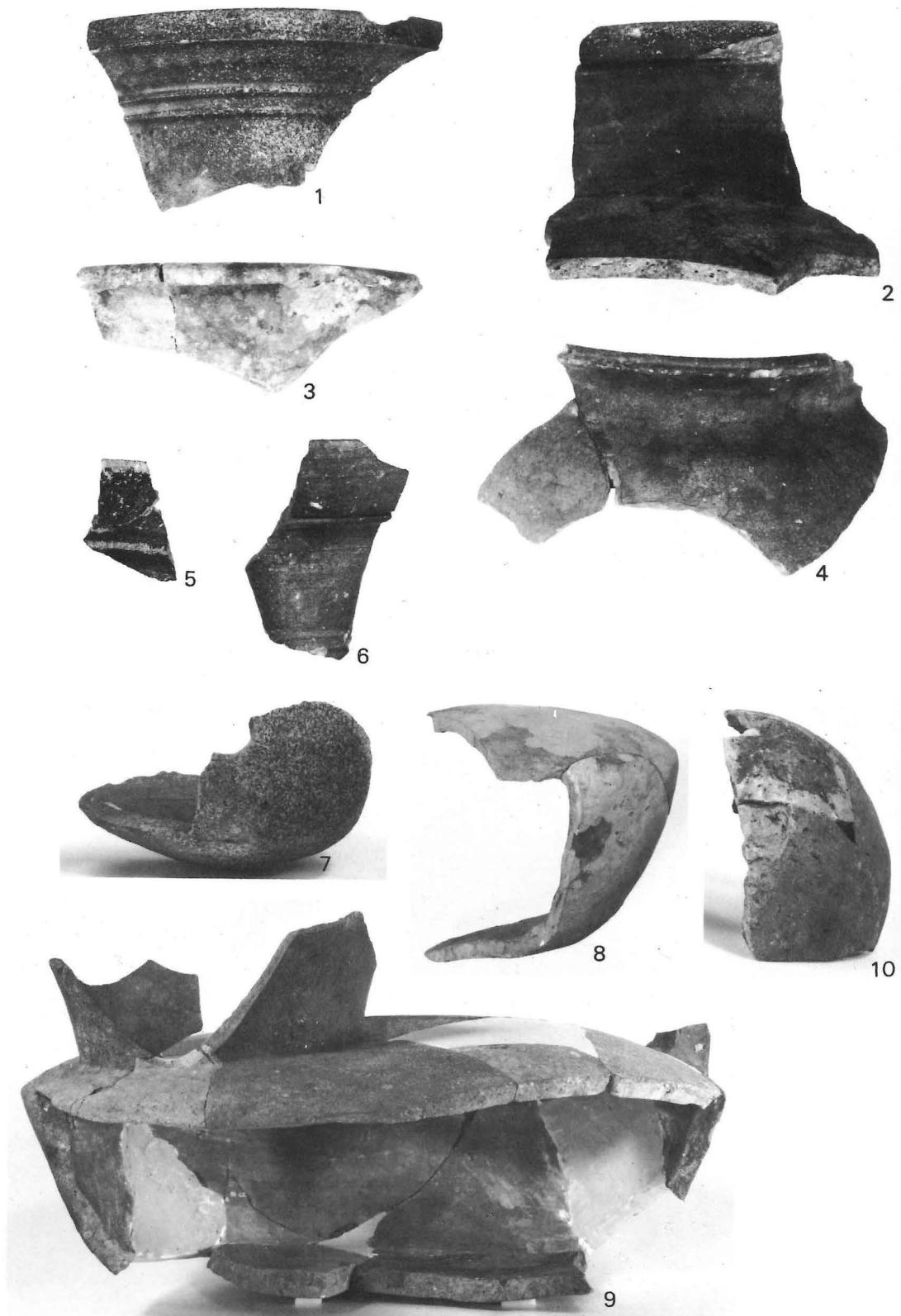


19



20

図版24

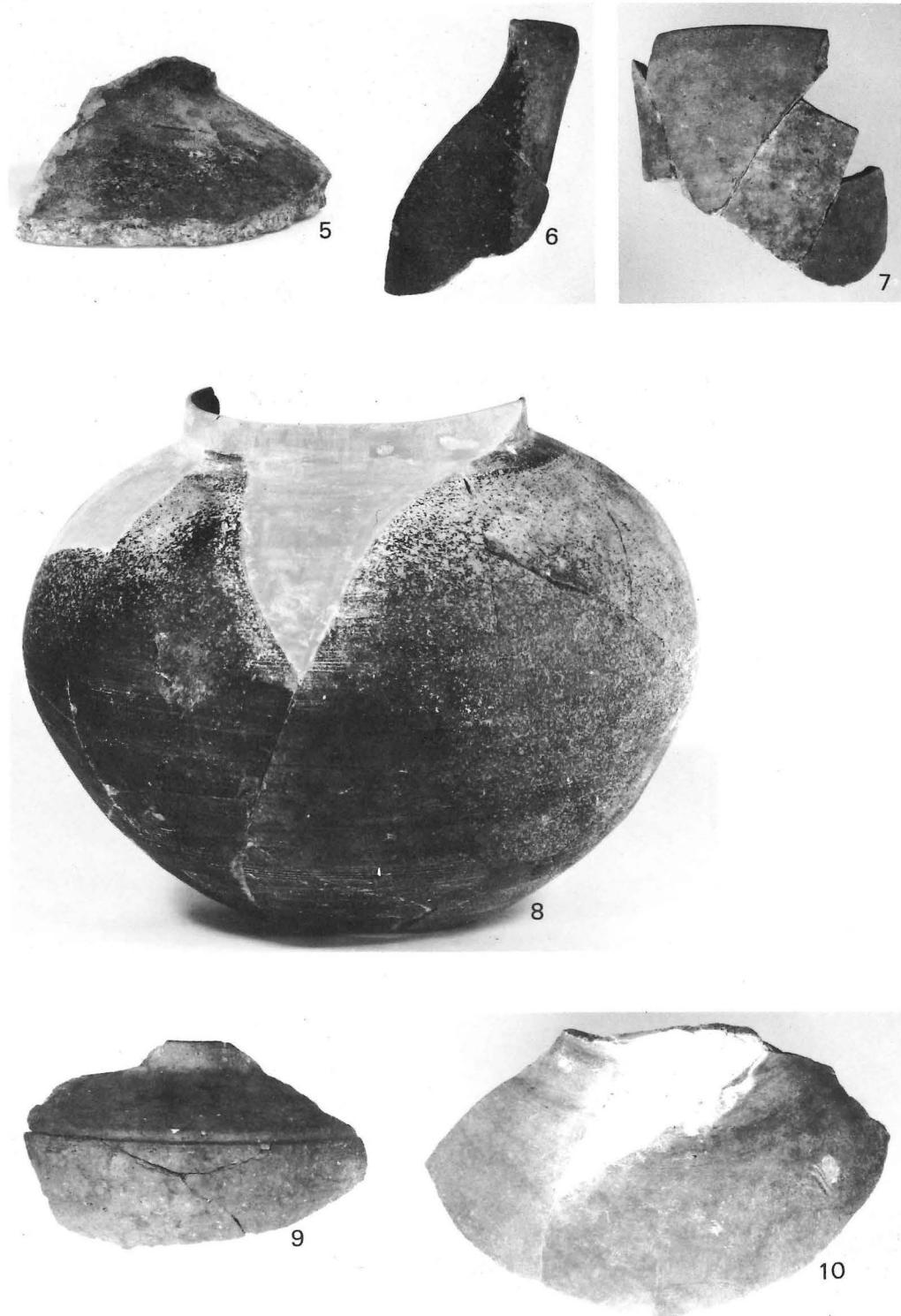


コフノ隣遺跡遺物(9) 土器



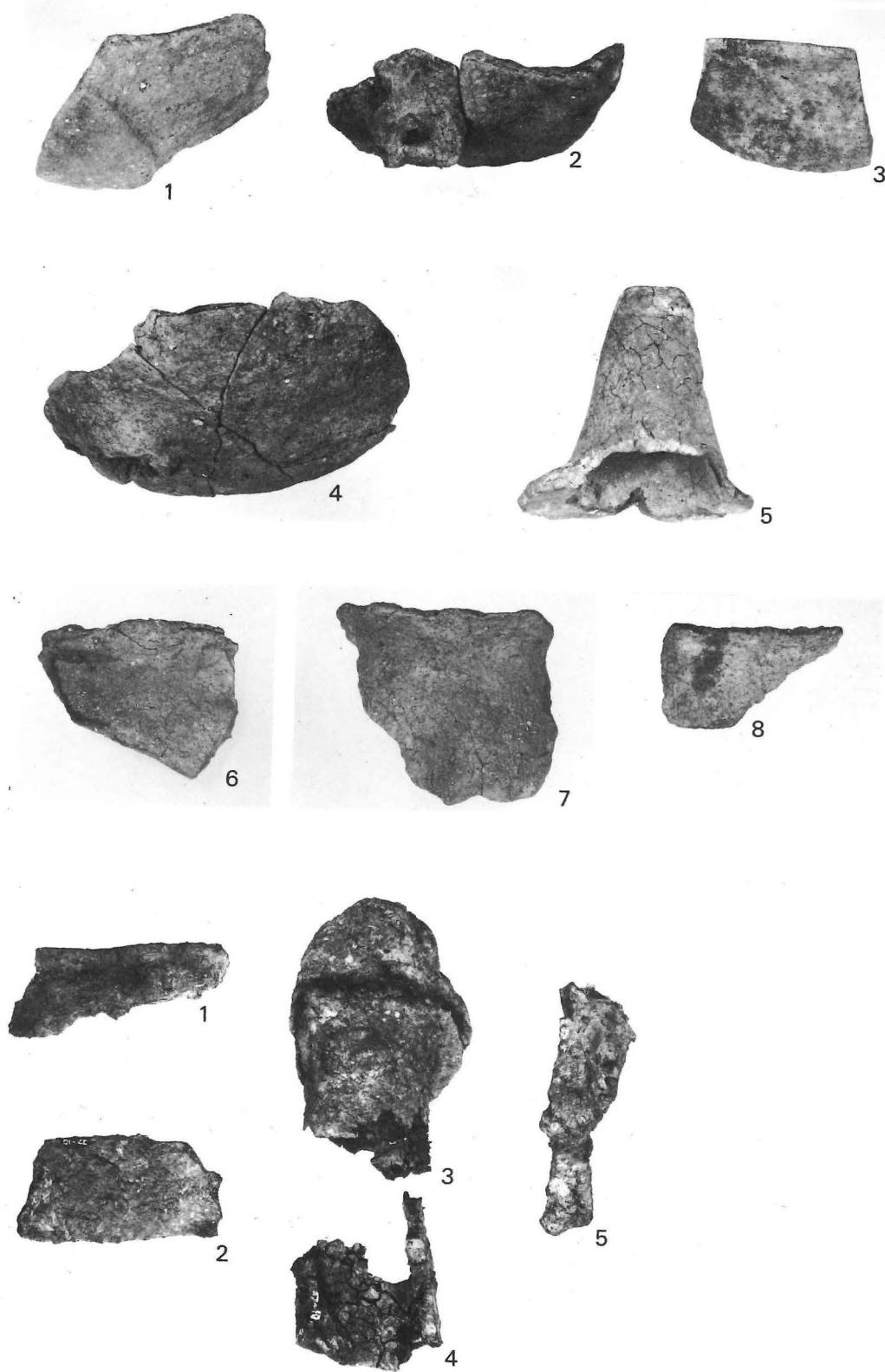
コフノ隣遺跡遺物(10) 土器

図版26



コフノ隠遺跡遺物(11) 土器

図版27



コフノ隣遺跡遺物(12) 土器・鉄器

図版28



1



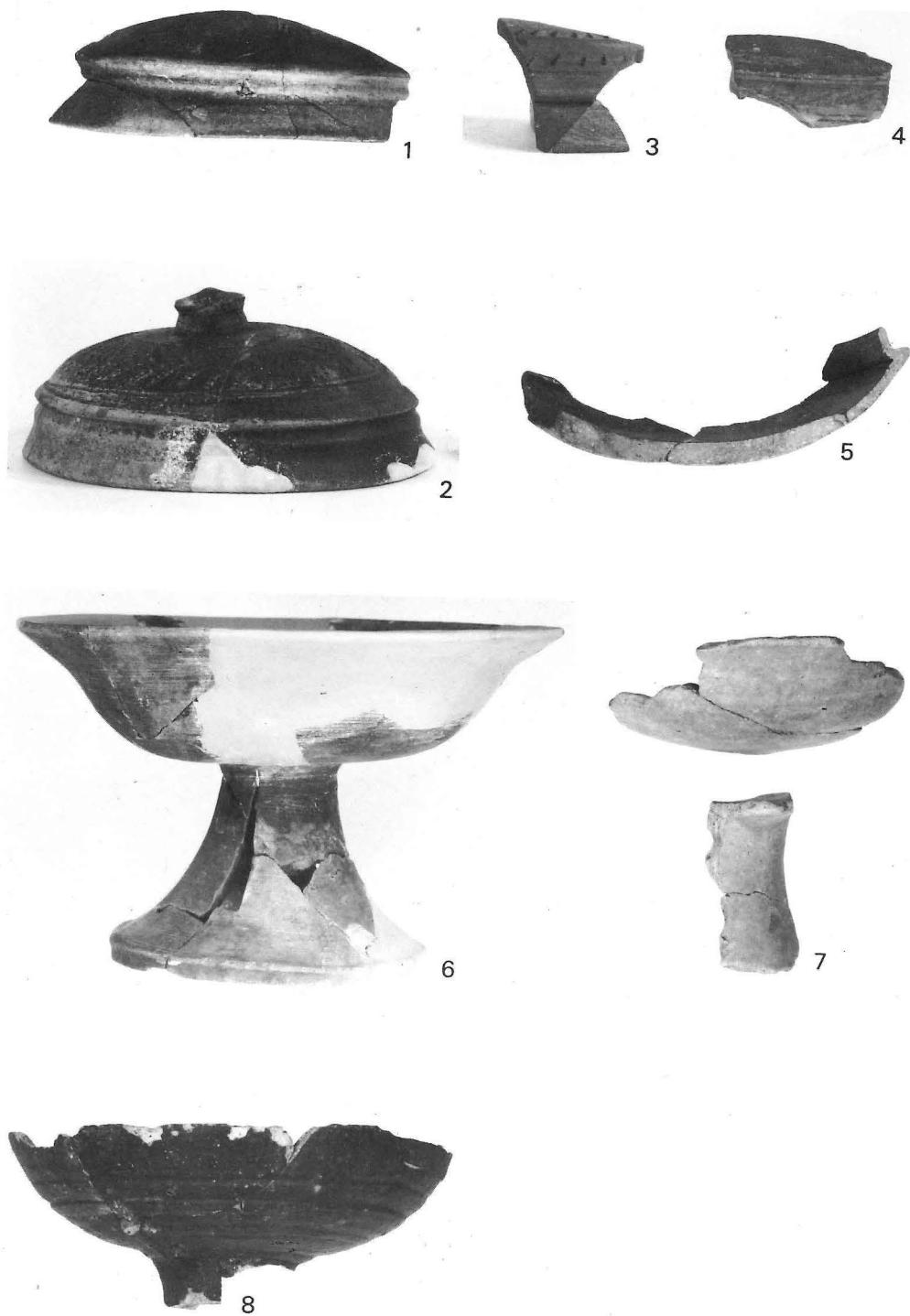
2



3

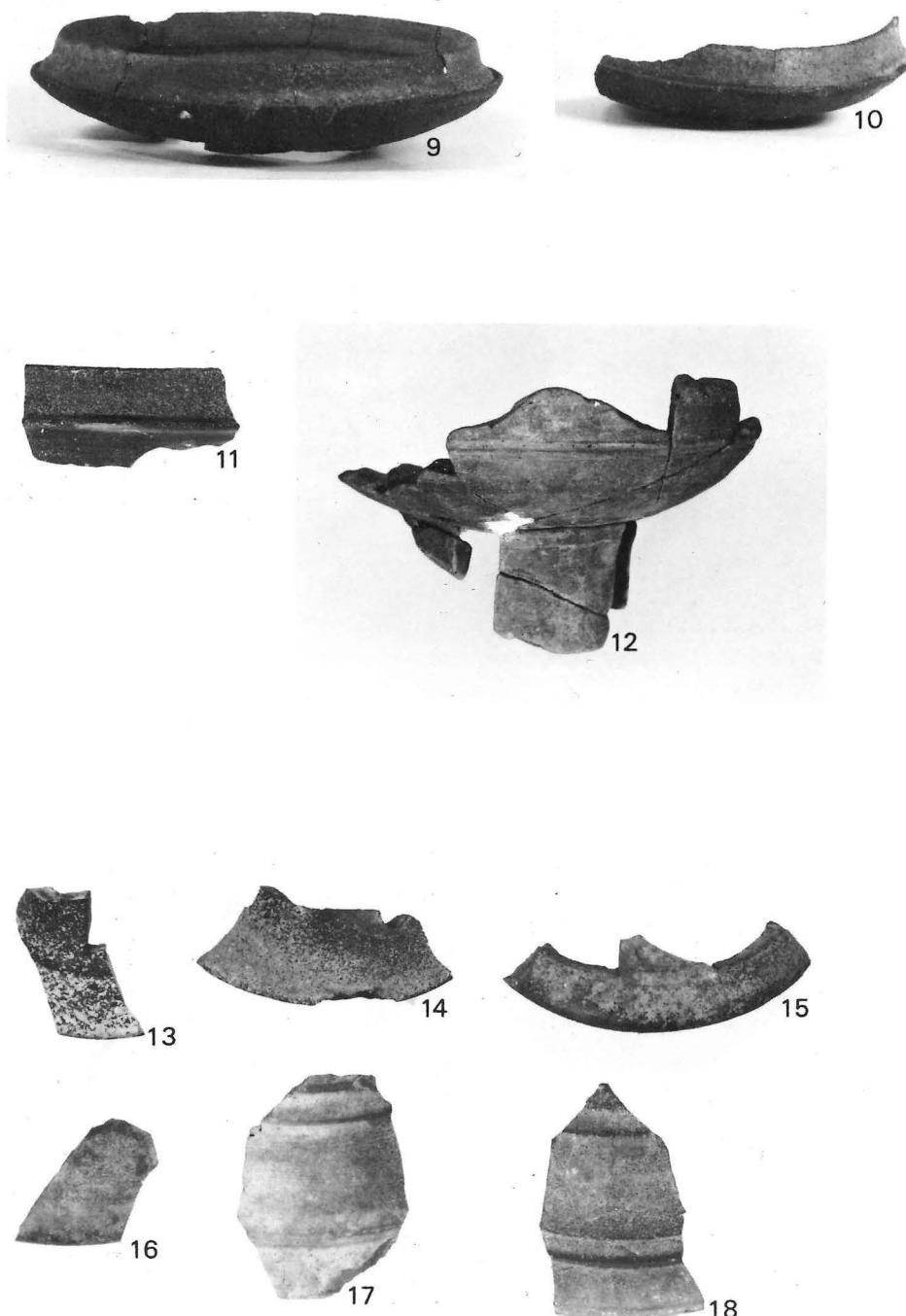
コフノ隊遺跡遺物(13) 土器

図版29



コフノ隣遺跡遺物(14) 土器

図版30



コフノ隣遺跡遺物(15) 土器



1



2



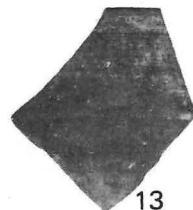
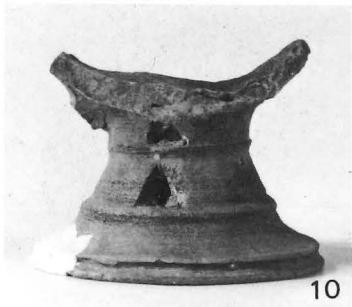
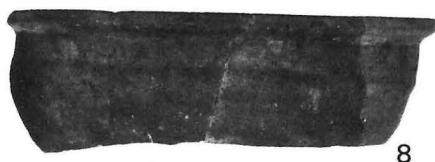
3

4

5

コフノ隣遺跡遺物(16) 土器

図版32



コフノ隣遺跡遺物(17) 土器

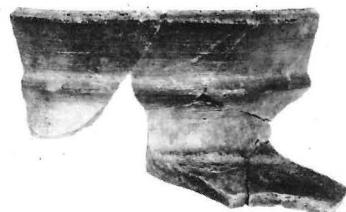
図版33



1



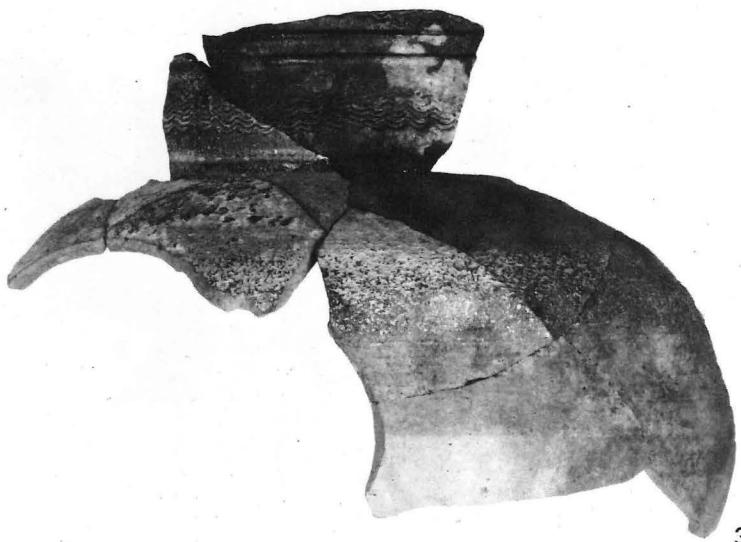
4



2



5



3

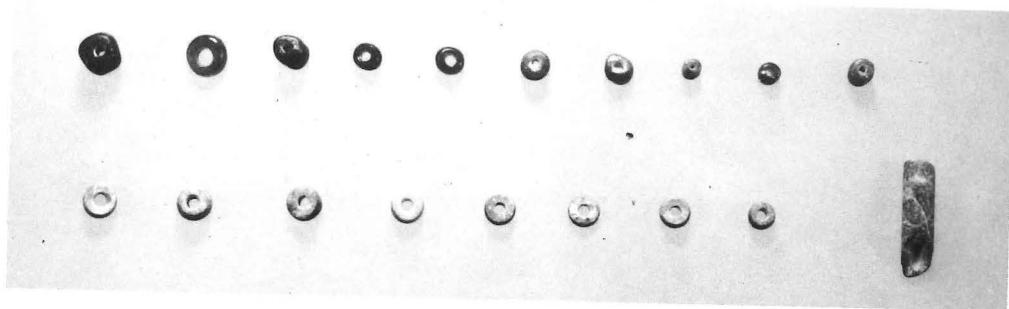
コフノ隣遺跡遺物(18) 土器

図版34

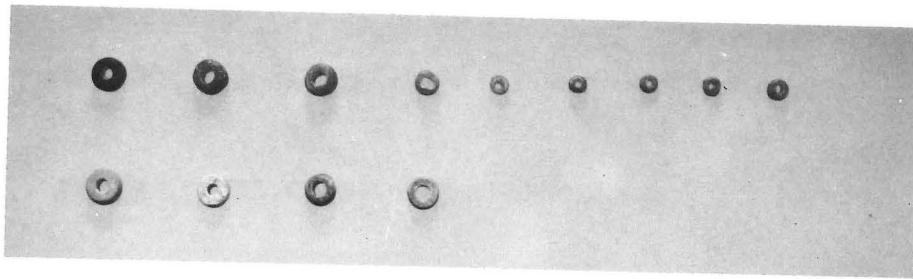


コフノ跡遺跡遺物(19) 土器

図版35



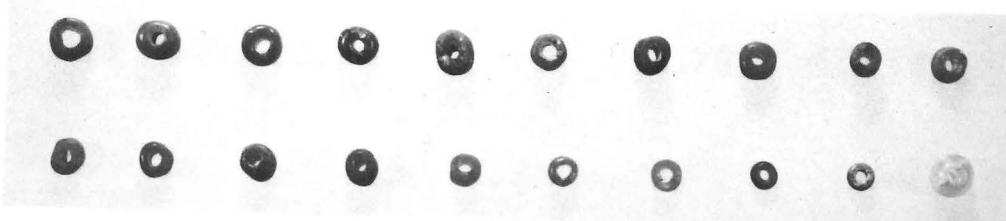
第1号石棺 表面



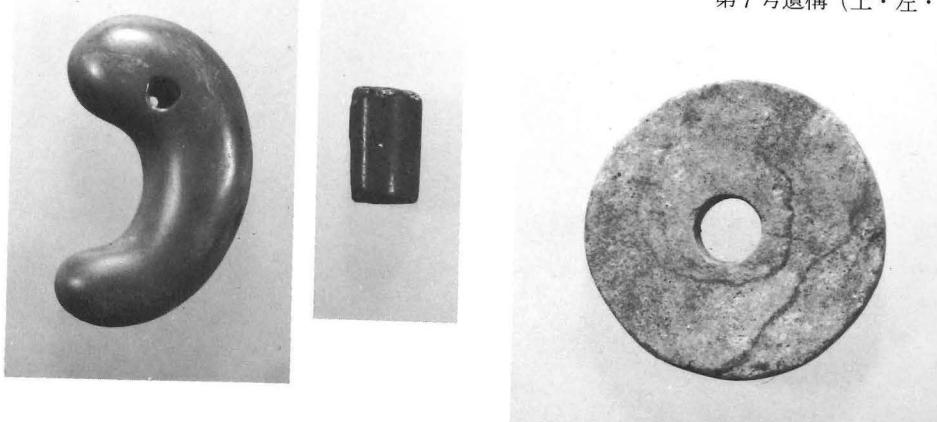
第1号石棺 棺内



第6号遺構 表面



第7号遺構 (上・左・下とも)



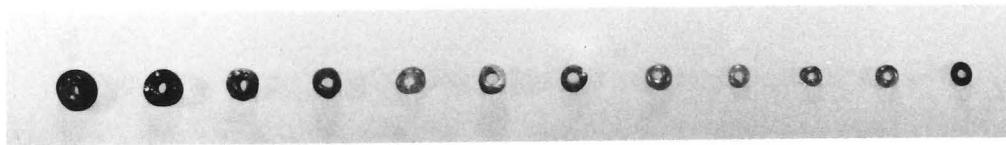
コフノ隣遺跡遺物(20) 玉類・紡錘車

図版36

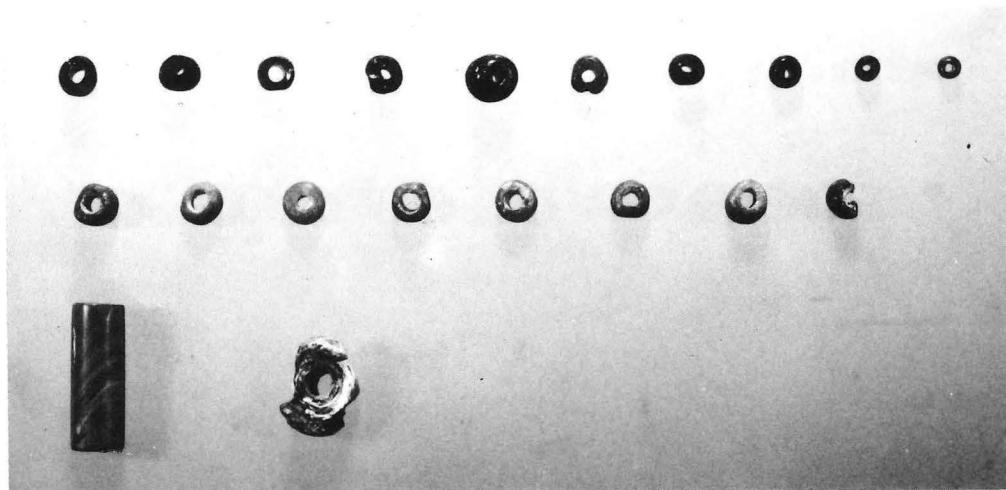


第11号遺構表面

第10号 石棺

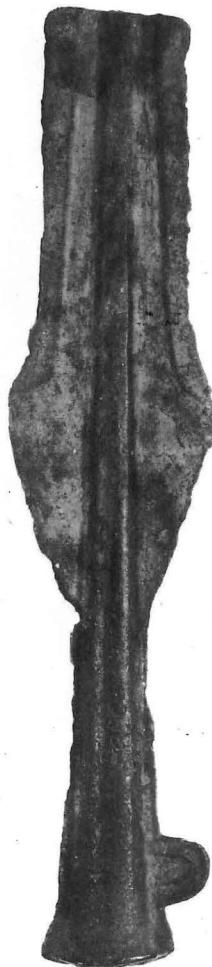


第11号 石室



B 地点第2号石棺

コフノ隣遺跡遺物(21) 玉類・銀環



津和浜出土銅矛と津和浜



上対馬町文化財調査報告書第1集

コフノ採遺跡

昭和59年3月31日

発行 長崎県上対馬町教育委員会  
〒817-17 上県郡上対馬町大字比田勝170番地

印刷 川口印刷株式会社  
〒851-01 長崎市田中町 1020-7